

博士課程教育リーディングプログラム
京都大学デザイン学大学院連携プログラム

Program for Leading Graduate Schools
Kyoto University Collaborative Graduate Program in Design

活動報告書（平成29年度）
Activity Report（2017.4-2018.3）



目次

デザイン学大学院連携プログラム活動報告書（平成29年度）	1
プログラム担当者一覧（2018年3月時点）	3
1 履修者	4
1.1 履修者選抜	4
1.1.1 履修者（予科）選抜	4
1.1.2 履修者（本科）選抜	4
1.2 3年次編入者選抜	5
1.3 Qualifying Examination（博士論文研究基礎力審査）	6
1.4 博士の学位認定基準	6
1.5 修了審査	7
1.6 履修者の進路	8
1.7 履修者の研究活動支援	9
1.8 履修者合宿	10
1.9 意識調査	13
2 プログラムの教育	15
2.1 修士教育の充実	15
2.1.1 教科書シリーズの出版	15
2.1.2 問題発見型／解決型学習（FBL/PBL）の実施	16
2.1.3 沖縄、香港でのデザインスクールの実施	17
2.2 博士教育の実施	21
2.2.1 オープンイノベーション実習の実施	21
2.2.2 フィールドインターンシップの実施	23
2.2.3 リサーチインターンシップの実施	25
2.2.4 リーディングプロジェクトの実施	26
2.3 研修・学習会	34
2.3.1 研究提案表現伝達学習会	34
2.3.2 フィジカルプロトタイピング集中実習	34
2.3.3 異分野・異業種企業訪問学習会	36
2.3.4 USA 訪問学習会	38
3 拠点の形成	40
3.1 デザインイノベーション拠点の活用	40
3.2 デザインファブリケーション拠点の活用	40
4 イベント	42
4.1 サマーデザインスクール2017	42
4.2 スプリングデザインスクール2018	44
4.2.1 国際デザインシンポジウム	44
4.2.2 デザイン学学生交流会	47
4.2.3 京都観光データウォーク	48
4.2.4 第6回 産学協同型認知デザインワークショップ	50
4.3 デザインビジョンズ	51

4.3	デザインビジョンズ	51
4.4	各種イベント	56
5	デザインイノベーションコンソーシアム	63
5.1	概要	63
5.2	会員	64
5.3	活動内容	65
5.3.1	プロフェッショナル・デザインキャンプ	65
5.3.2	デザインフォーラム	66
5.3.3	デザインイノベーション拠点フェロー	70
6	プログラムのPDCAサイクル	71
6.1	質問紙調査	71
6.2	東一条館オープンキャンパス	72
6.3	博士課程教育リーディングフォーラム2017	73
6.4	デザイン学ユニット協議会	74
6.5	PDCAサイクルの確立	76
7	その他の活動	77
7.1	広報活動	77
7.1.1	デザイン学論考	77
7.2	海外調査・交流	78
7.2.1	デザイン学白書作成のための調査	78
7.3	I-U-U-I（産学学産）連携	81
7.4	学学連携	82
7.5	京都大学デザインスクール基金	84
付録1	プログラムの教員	85
付録2	業績リスト（講演・出版）	88
付録3	業績リスト（メディア）	107
付録4	問題発見／解決型学習（FBL/PBL）の成果ポスター	109
付録5	イベントポスター	115

デザイン学大学院連携プログラム活動報告書（平成 29 年度）

本報告書は、「京都大学デザイン学大学院連携プログラム」における平成 29 年 4 月～平成 30 年 3 月の活動をまとめたものである。本年度は履修生募集開始後 5 年目を迎え、5 年間の博士課程の修了者 6 名を出した。これに伴い博士課程教育プログラムの全工程を実施するに至り、教育プログラムとしての一応の完成を示すことができた。平成 29 年度は、博士（総合学術）の学位認定基準を確立し、これまでに構築した制度については、履修生やプログラム構成員らからのフィードバックをふまえ適宜改良を加えつつ、教育プログラムを実施した。平成 29 年度本プログラムでの主要な活動は下記の通りである。

■制度設計■

履修者選抜制度として、本プログラムの履修者はまず予科選抜を受験し、さらに本科選抜を受験する。平成 29 年度の大きな変更点としては、本科選抜を受験できるタイミングを半年ごとに設け、これにより最大 2 年間、履修者は予科生としてプログラムの履修を進めながら進路を熟考できるようにした。平成 29 年度は、17 名（うち 4 名が外国人学生）が予科選抜に合格した。本科生選抜には 4 名が合格した。3 年次編入は 6 名であった。4 月と 10 月に実施した QE（博士論文研究基礎力審査）では、計 10 名が合格した。また、博士（総合学術）の学位については、その認定基準を「デザイン学大学院連携プログラム 博士（総合学術）学位認定基準」として整備した。平成 30 年 3 月修了に向けて、6 名の履修者よりプログラム修了審査願が提出され、博士（総合学術）1 名、付記型学位 5 名が合格した。

■学修環境■

昨年度までと同様に、英語だけで修了要件を満たせるよう英語で履修可能な科目を提供した。研究活動経費の制度として本年度は、修士課程学生 6 名、博士課程学生 21 名に支給した。博士研究を行うリーディングプロジェクトを円滑に進められるような、国内外の多様な専門家による指導体制「学外アドバイザー制」および海外研究機関を受入組織とするリサーチインターンシップのための経費支給を継続した。さらに、博士課程学生が学振の特別研究員への申請を行うにあたり提案書を執筆する際の支援として、研究提案表現伝達学習会を実施した。さらに本年度から、デザイン学履修者がさまざまな業界の企業を訪問し先方の社員と交流させて頂く異分野・異業種企業訪問学習会を実施した。

■科目と履修■

前年度までに構築したカリキュラムを踏襲して実施した。FBL/PBL として 8 テーマを実施した。補助金終了後の本プログラムの継続性の確保を念頭に、プログラムから参画専攻への FBL/PBL の運営移行を徐々に進めた。博士後期課程のデザイン学共通実習科目であるオープンイノベーション実習として、「プログラム主導型」を 2 件、「部局主導型」を 3 件実施した。海外フィールドインターンシップを、昨年度と同様にインドネシアにおいて実施した。リサーチインターンシップは、平成 29 年度には国内外の研究機関を受け入れ機関とする計 3 件の実施計画書が提出された。うち 2 件が平成 29 年度に実施された。共立出版から発刊しているデザイン学教科書シリーズとして、10 月に「組織・コミュニティデザイン」が出版された。

■デザインイノベーションコンソーシアム■

本プログラムに係る産官学連携の強化を目的として設立した「デザインイノベーションコンソーシアム」は、平成30年3月末現在、計73組織が会員となった。コンソーシアム会員が主体となって、第4回プロフェッショナルデザインキャンプ、3件のビジネスデザインシリーズ、1件の政策デザインシリーズといったデザインフォーラムを開催した。また、平成30年3月現在10名のデザインイノベーション拠点フェローが京都大学学際融合教育研究推進センターからの委嘱を受けている。

■イベント■

大学横断型連携活動としては、平成29年5~6月に、香港バプティスト大学と国立成功大学との合同で、デザインスクール in アジアを実施した。例年実施しているデザインスクール in 沖縄を、琉球大学らと共に沖縄市で11月に実施した。毎年9月に3日間をかけて開催する7回目を迎えたサマーデザインスクールでは、主に主共催団体を中心とする産官学から持ち込まれた23のテーマのワークショップに、計206名が参加した。平成30年3月には、国際デザインシンポジウム、デザイン学学生交流会、京都観光データウォーク、および産学協同型認知デザインワークショップを、スプリングデザインスクールとして実施した。デザインビジョンズやデザインワークショップといったセミナーやワークショップ等を、前年度までと同様に積極的に実施した。

■国際連携・学学連携■

平成28年度から開始した、ミラノ工科大学との国際連携先大学を介した産学連携としてのI-U-U-I連携を本年度も継続した。9月に実施したサマーデザインスクールへの参加と組み合わせる形で、本プログラムを中心として国内3社が国際インターン学生を受け入れた。学学連携としては、東北大学電気通信研究所の共同プロジェクト研究を「デザイン学に基づく電気通信システムの革新」と題して実施し、12月に合同シンポジウムを仙台で開催した。また平成29年度は、デザイン学の国際的な確立を目指したデザイン学白書作成のための調査として、シンガポールの国立シンガポール技術デザイン大学およびミラノ工科大学を訪問した。

■プログラムの評価と発展■

5名の外部評価委員を迎えてデザイン学ユニット協議会を3月に実施した。本プログラムの事後評価および将来構想に向けて議論が交わされた。デザイン学プログラムの効果を検証し課題を抽出することを主たる目的とした、履修者を対象とする第三回となる質問紙調査を実施した。また、本プログラムの継続発展のための財政支援を広くお願いすることとし、京都大学デザインスクール基金を設置した。

平成30年4月

平成29年度デザイン学ユニット長 楠見 孝
(京都大学 大学院教育学研究科)

プログラム担当者一覧（2018年3月時点）

北野 正雄	プログラム責任者／理事（教育・情報・評価担当）・副学長
石田 亨	プログラムコーディネータ／情報学研究科 社会情報学専攻 教授
楠見 孝	教育学研究科教育科学専攻 教授
齊藤 智	教育学研究科教育科学専攻 教授
林 康裕	工学研究科建築学専攻 教授
神吉 紀世子	工学研究科建築学専攻 教授
三浦 研	工学研究科建築学専攻 教授
榎木 哲夫	工学研究科機械理工学専攻 教授
西脇 眞二	工学研究科機械理工学専攻 教授
富田 直秀	工学研究科機械理工学専攻 教授
松原 厚	工学研究科マイクロエンジニアリング専攻 教授
泉田 啓	工学研究科航空宇宙工学専攻 教授
西田 豊明	情報学研究科知能情報学専攻 教授
黒橋 禎夫	情報学研究科知能情報学専攻 教授
吉川 正俊	情報学研究科社会情報学専攻 教授
守屋 和幸	情報学研究科社会情報学専攻 教授
太田 快人	情報学研究科数理工学専攻 教授
田中 利幸	情報学研究科システム科学専攻 教授
佐藤 高史	情報学研究科通信情報システム専攻 教授
守倉 正博	情報学研究科通信情報システム専攻 教授
松井 啓之	経営管理大学院 教授
山内 裕	経営管理大学院 准教授
多々納 裕一	防災研究所社会防災研究部門 教授
美濃 導彦	学術情報メディアセンター 教授
塚田 章	京都市立芸術大学大学院美術研究科 教授
上田 修功	NTT コミュニケーション科学基礎研究所機械学習・データ科学センタ代表
山田 敬嗣	日本電気株式会社中央研究所 理事
田中 健一	三菱電機株式会社開発本部 役員技監
梶本 一夫	パナソニック株式会社全社 CTO 室 技術戦略部直轄 主幹
三浦 智康	株式会社野村総合研究所 理事
松田 晃一	独立行政法人情報処理推進機構 顧問
谷脇 康彦	総務省政策統括官（情報セキュリティ担当）
上田 誠	京都市 産業観光局 局長
中小路久美代	学際融合教育研究推進センターデザイン学ユニット 特定教授
川上 浩司	学際融合教育研究推進センターデザイン学ユニット 特定教授
十河 卓司	学際融合教育研究推進センターデザイン学ユニット 特定准教授
村上 陽平	学際融合教育研究推進センターデザイン学ユニット 特定准教授
北 雄介	学際融合教育研究推進センターデザイン学ユニット 特定講師

1 履修者

1.1 履修者選抜

デザイン学プログラムの履修者は、まず履修者（予科）選抜を受験し、さらに半年後、履修者（本科）選抜を受験する。このような予科の制度は、前期に所属研究科の課程の履修を進めるとともに、デザイン学プログラムの目的と内容を理解し、自らの能力と適性を確認する機会を学生に与えることが目的である。

なお平成 29 年度から、本科進学のための判断期間を従来よりも延長するため、半年毎に履修者（本科）選抜を受験できる制度を設けた。この制度により、最大 2 年間履修者（予科）としてプログラムの履修を進めながら進路を熟考できるようにした。

1.1.1 履修者（予科）選抜

平成 29 年度は 4 月、10 月に参画研究科の専攻において修士課程に入学した学生を対象に、それぞれ下記のスケジュールで履修者（予科）選抜を実施した。

【4 月入学者向け】

平成 29 年 4 月 10 日 プログラム応募説明会（於：吉田キャンパス、桂キャンパス）

平成 29 年 4 月 10 日～4 月 24 日 応募期間

平成 29 年 5 月 8 日 履修者（予科）選抜

平成 29 年 5 月 11 日 選抜結果通知

【10 月入学者向け】

平成 29 年 10 月 2 日～10 月 19 日 応募期間

平成 29 年 10 月 24 日 履修者（予科）選抜

平成 29 年 11 月 28 日 選抜結果通知

履修者（予科）の選抜においては、願書、志望調書、出身大学の学業成績証明書等による書類審査を実施した。平成 29 年度は 17 名（4 月入学者 15 名、10 月入学者 2 名）の応募があり、審査の結果、17 名全員（教育学研究科 3 名、工学研究科 4 名（機械理工学専攻）、情報学研究科 7 名（知能情報学専攻 3 名、社会情報学専攻 2 名、数理工学専攻 1 名、通信情報システム専攻 1 名）、経営管理教育部 3 名）が入学を認められた。今年度は、17 名中 4 名が外国人学生であった。

1.1.2 履修者（本科）選抜

平成 29 年度から半年毎に本科への進学希望が可能となったことから、4 月期本科進学希望者の選抜を 2 月に、10 月期本科進学希望者の選抜を 8 月に、以下のスケジュールで実施した。

【平成 29 年度 4 月期】（平成 29 年 3 月実施）

平成 29 年 2 月 22 日 応募締切

平成 29 年 3 月 21 日 履修者（本科）選抜（面接）

平成 29 年 3 月 22 日 選抜結果通知

【平成 29 年度 10 月期】（平成 29 年 8 月実施）

平成 29 年 8 月 21 日	応募締切
平成 29 年 9 月 25 日	履修者（本科）選抜（面接）
平成 29 年 9 月 26 日	選抜結果通知

本科選抜においては、事前に提出された課題レポートに基づく面接を行うとともに、デザイン学予科での履修状況、英語成績、及びデザイン学大学院連携プログラム主催の研究発表会、セミナー、デザインスクール等の参加実績を合わせて総合的に審査を行った。

4 月期（3 月実施）履修者（本科）選抜には、19 名の履修者（予科）のうち 1 名から、10 月期（8 月実施）履修者（本科）選抜には、21 名中 3 名から応募があり、それぞれ選抜を実施した。その結果、4 名全員（4 月期 1 名（情報学研究科）、10 月期 3 名（教育学研究科 1 名、工学研究科（機械理工学専攻）2 名）が履修者（本科）として選抜され、所属研究科の修了要件を満たすよう単位等を取得しつつ、京都大学ー琉球大学合同デザインスクールなどの各種イベントや、デザイン学共通科目などデザイン学連携プログラムの履修を本格的に開始した。

なお、10 月期に進学を希望しなかった 17 名の履修者（予科）の内、13 名が予科を延長し、4 名が履修を辞退した。履修を延長した 13 名と休学中の履修者（予科）1 名は、平成 30 年度 4 月期に履修者（本科）選抜に応募するか否かを選択する予定である。

1.2 3 年次編入者選抜

本学位プログラムに対する社会的関心・ニーズの高まりを受け、また多様な人材を受け入れるため、社会人経験や修士課程における学修経験を踏まえて 3 年次でのプログラムへの編入を可能としている。今年度は、4 月入学と 10 月入学の 2 回、編入による履修者の募集とその選抜を行った。3 年次編入の資格として、本プログラムに参画する専攻の博士課程に入学した学生であり、本学位プログラムのディプロマポリシーに合致する目的意識を持つと認められ、編入後 1 年以内に博士論文研究基礎力審査（QE）を受験する条件を満たすことができることを求めている。編入資格、本プログラム全体の履修、ならびに編入による場合のプログラム履修について理解を深めてもらうよう、4 月と 10 月の双方の募集において、募集期間に先立ってプログラムへの応募に関する説明会を実施した。

4 月入学の 3 年次編入者の募集期間は 4 月 10 日より 4 月 24 日までとした。3 名（情報学研究科 1 名（留学生）、工学研究科 2 名（建築学 1 名、機械理工学 1 名））の出願があり、これを受けて出願書類による資格確認の上、面接による審査と出願書類とに基づく総合的な審査を行なった。その結果をうけて 3 名の学生を合格とした。10 月入学の 3 年次編入者の募集期間は 10 月 2 日より 10 月 19 日までとした。3 名（いずれも情報学研究科、いずれも留学生）の出願があり、4 月入学者の選抜と同様に、プログラムへの博士編入資格の確認を行ったのち、出願した 3 名の学生について面接を行い、3 名を合格とした。平成 29 年度には、合計 6 名が本学位プログラムへ 3 年次編入した。

1.3 Qualifying Examination (博士論文研究基礎力審査)

本学位プログラムでは、コースワークを通じて習得された知の基盤を評価し、プログラムに係る博士研究を開始する資格が備わっているかどうかを博士論文研究基礎力審査 (Qualifying examination: QE) により審査することとなっている。

QE は、本学位プログラムの3年次以上の履修者で、所属専攻の博士後期課程に在籍し、かつ、デザイン学共通科目・共通実習科目より10単位以上を取得しているものを対象とする。博士後期課程における研究計画が提出され、それが本学位プログラムとの関連があると認められるかどうかを審査基準として、博士論文研究の主体的な遂行に必要な基礎的知識及び能力を審査する。4月入学と10月入学(編入を含む)の年2回行われているプログラム履修者の募集に対応させて、4月と10月にQEを実施している。

平成29年度4月期のQEには、9名の履修者より申請があった。全履修者に対しQE受験に必要な履修単位を取得しているかを確認するとともに、提出された申請書類に基づいて1) 修士課程における所属研究科の履修状況と成績、2) デザイン学共通科目及び主領域科目の評価、3) 修士論文等の概要、4) 博士後期課程における研究計画、履修計画、および5) 指導教員が作成する所見、をもとに審査を行った。この結果、申請のあった9名全員が合格した。10月実施のQEには、1名の履修者より申請があった。4月実施のQEと同様の手続きにより審査を行い、合格した。平成29年度には、合計10名がQEに合格した。

1.4 博士の学位認定基準

デザイン学を修了することにより与えられる学位は、情報学研究科では博士(総合学術)または博士(情報学)にデザイン学修了を付記のいずれか、教育学研究科、工学研究科、経営管理教育部においてはそれぞれの部局の学位にデザイン学修了を付記することとなっている。ユニット教育委員会では既に整備済みの付記型学位の基準とともに、博士(総合学術)の学位認定基準を検討してきており、以下の通りその基準を決定した。

博士(総合学術)の学位については、その認定基準を「デザイン学大学院連携プログラム博士(総合学術)学位認定基準」として整備した。博士(総合学術)は、本プログラムを履修した学生のために新たに設けた学位である。この学位は現在のところ情報学研究科の履修者のみが申請可能であるが、将来的には本プログラムに参画する各専攻においても同学位を申請可能とすることができる。このため、博士(総合学術)の基準は、全専攻の合意の上で決定する必要がある、以下の手順で決定した。

まず各部局からの委員が参加するユニット教育委員会において学位認定基準の原案を作成し、情報学研究科教務委員会を含む各部局への意見照会を行って、原案に対する意見を反映した。この学位認定基準案をユニット教授会に諮り、さらに、プログラム担当者全員に意見照会を行って基準を定めた。

博士(総合学術)の学位認定基準は具体的には以下のとおりとなった。

一貫した論旨の学位論文が次の各号の何れかに該当することを要件とする。

- (1) 学位論文が、所属研究科に係る専攻学術の成果を含み、かつ多様な専門分野を俯瞰する学術的貢献を含むこと。
- (2) 学位論文が、所属研究科に係る専攻学術の社会実装等を提案し、社会貢献に寄与する内容を含むこと。

なお、履修者の混乱がないように、学位申請に関する手続きは博士（総合学術）と付記型学位についてできるだけ同じになるよう設計されている。

1.5 修了審査

今年度は、デザイン学の1期生が修了を迎える。履修者は、所属する研究科と、デザイン学大学院連携プログラムの双方へ修了審査を、「デザイン学プログラム修了審査願」および「デザイン学プログラム履修成果報告書」により申し出ることとなっている。

付記型学位の修了審査においては、各研究科において博士審査資格を有する教員から、調査委員を選出する。その際、異なる研究分野の教員を含む2名以上のプログラム担当者が調査委員に含まれるよう選出を行う。博士（総合学術）の場合であって、情報学研究科所属の履修者については、情報学研究科においてデザイン学側教員を含むように、調査委員会を組織する。いずれの学位の場合も、修了調査委員会は、学位論文公聴会等において試問を行い、履修者が本プログラム終了の基準を満たすかどうか調査する。なお、本プログラムの修了のためには、次の3項目の要件をすべて満たしている必要がある。

- (1) 参画研究科・専攻に5年（3年次編入生は3年）以上（短縮修了の場合は当該研究科の定めるところによる期間以上）在学し、本プログラムのカリキュラム・ポリシーに沿った研究指導を受け、QEに合格後、所定の単位（デザイン学共通実習科目・インターンシップ科目・デザイン学副領域科目から10単位以上）を修得していること。
- (2) 多様な専門分野を俯瞰し、創造的に課題解決にあたるために必要な突出した実践力（独創力+俯瞰力）とその基盤となる学識を身につけていること、および、グローバルに活躍するために必要なコミュニケーション力と国際性を蓄えていること。
- (3) 所属する専攻の修了要件を満たし、所定年限内に提出した博士論文について教育委員会の最終審査に合格すること。

平成30年3月修了に向けて、6名の履修者よりプログラム修了審査願が提出された。6名の学位申請は、博士（総合学術）が1名、付記型学位が5名となっている。

以下に平成29年度修了者の博士学位論文題目を掲載する。

博士（総合学術）	・実践論に基づくワークショップデザイン方法論の開発と社会実装
教育学研究科 付記型学位	・学習課題遂行場面における動機づけの変化 ・感情比喩の理解と産出の特性 ・幼児期における表情の理解と意図的な表出
工学研究科 付記型学位	・ Sensitivity analysis and optimization methods for thermoelectric devices and their modules (熱電素子および熱電モジュールを対象とした感度解析および最適設計手法)
情報学研究科 付記型学位	・ A Language-Based Approach to Robust Context-Aware Software (堅牢な文脈認識ソフトウェア開発のためのプログラミング言語の研究)

1.6 履修者の進路

2018年2月から3月にかけて、L5履修者全員(15名)に各30分のインタビューを行い、学位取得予定、進路などについて調査を行った。その結果を以下に示す。

- 2018年3月学位取得修了：6名
- 在籍研究科での研究継続：2018年9月修了予定(2名)、2019年3月修了予定(5名)
- 研究指導認定退学：2名(内、1名は2018年9月に学位取得予定)

修了予定を基にすると、修了率は86.7%である。これは指導認定退学を除いた学生の割合であるが、実際には、認定退学半年後に学位を取得予定の学生もいるため、学位取得率は9割を超える見込みである。また、修了平均年は5.46年となる。在籍研究科に比べ修了率は上回り、修了平均年は同等程度である。今後も順調な学位取得を期待したい。

図1は専門領域の学修と就職の動向を示している。多くの学生が、自らの専門以外にも他の領域を学び、4割の履修者の博士テーマに影響を与えている。また、博士研究の内容を変えるには至らなかったが、他の領域を学ぶことが職業観に影響を与えた場合もある。その結果、自らの専門に関わらず様々な職種に進路を選択している。特に注目すべきは、心理学を専攻する学生の進路である。従来は、博士学生の進路はほとんどがアカデミアであったが、デザイン学に参加した結果、その進路は企業研究所、事業・コンサルタントなどに大きく分散している。

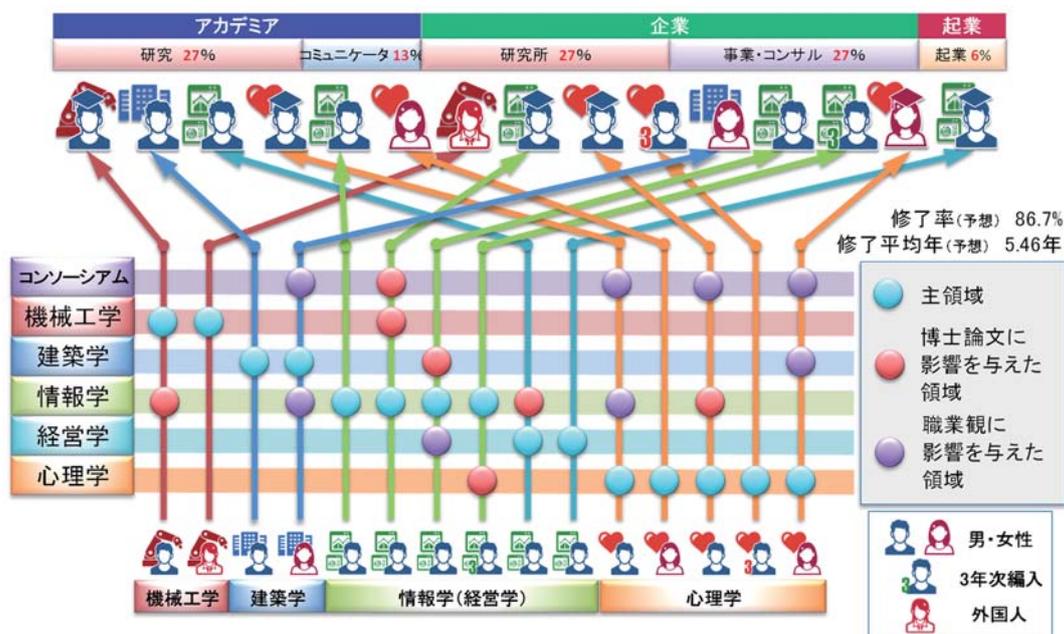


図1 専門領域の学修と進路

図2は履修者のプログラム活用の類型と進路の関係を示している。履修者によって、本プログラムの活用方法は様々であるが、概ね4種の類型に分類できる。デザイン学の提供する機会を活用し社会や海外など体験を広げていった「機会活用型」、専門を深める一方で周辺領域との接点を広げていった「専門領域拡張型」、異なる専門を学び研究領域を横断する新しいテーマにチャレンジした「クロスボーダー型」、企業や他分野と接することを通じて

キャリアパスに対する視野を広げていった「キャリアパス開拓型」がある。就職の傾向としては、機会活用型は当初からアカデミアに残り研究を志向していた履修者に多い。一方、専門領域拡張型は企業研究所を、クロスボーダー型は企業の事業部門やコンサルタント部門を進路として選んだ者が多い。キャリアパス開拓型は様々な進路に進んでおり起業した者もいる。

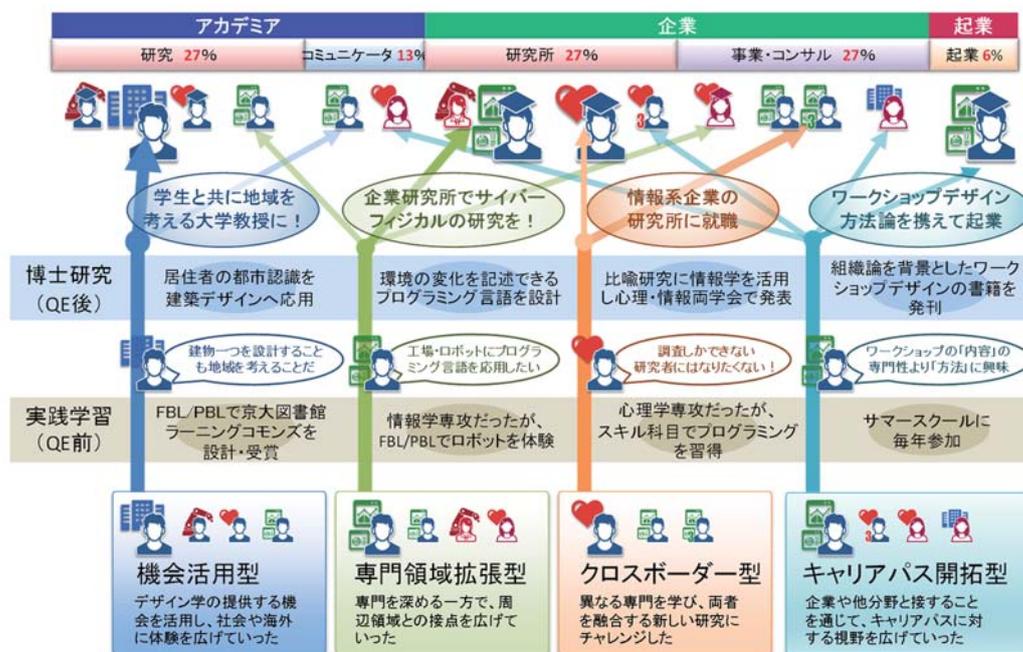


図2 履修者のプログラム活用と進路

上記のインタビュー結果から、デザイン学プログラムが履修者の研究テーマや進路に大きな影響を与えたことが分かる。一方で、履修者のプログラムの活用方法は、それぞれ個人的である。デザイン学プログラムは体系的な教育を試みてきたが、履修者の学びはあくまでも自由自在である。

1.7 履修者の研究活動支援

デザイン学プログラムでは、助成期間後半の学生数の増加に対応するために、博士課程における教育研究に専念するための給付型支援経費である奨励金は設けず、補助金終了後の継続性を維持するため、学振の特別研究員への申請支援を強化している。その一環として、「博士課程教育リーディングプログラム履修者研究活動経費取扱要領」および「デザイン学大学院連携プログラム履修者研究活動経費に関する内規」に基づき、履修者が自発的に独創的な研究活動を行うために必要な経費の支援を目的として、応募制により、審査のうえ、研究活動経費を支給している。本経費は、全体予算を勘案し、海外での研究活動のための旅費を含めて1人当たり年間100万円（半期の場合は50万円）の範囲で募集人数と併せて上限を設けている。なお、募集に際し、申請額の上限および採択する受給者数の上限を明示し、併せて学外で実施されるデザイン学イベントのための旅費が必要な場合は、研究活動経費の一部として計上することとしている。また、平成27年度からは、博士課程後期学生に対

しても研究活動経費の制度を適用し、学術振興会特別研究員の申請を前提に 100 万円を上限に支給している。

平成 29 年度は 1 年次 3 名、2 年次 3 名、3 年次 5 名、4 年次 8 名、5 年次 8 名から応募があり、提出された研究活動経費申請書ならびに成績に基づいて、本プログラムが設置する選考委員会によって審査が行われた。審査にあたっては、プログラム研究活動としての研究目的の妥当性、研究課題の学術的重要性、研究課題の学術的な特色・独創性、研究計画・方法の妥当性、研究活動経費の妥当性の 5 つに関して評価を行った。

上記の研究活動経費に加えて、博士研究を行うリーディングプロジェクトを円滑に進められるように、国内外の多様な専門家による指導体制「学外アドバイザ制」を導入し、海外研究機関を受入組織とするリサーチインターンシップとともに必要な旅費をそれぞれ 30 万円を上限に支給している。なお、リーディングプロジェクトの本格化に伴い、産学連携の拠点であるデザインイノベーション拠点へのアクセスを向上させるために、キャンパス間連絡バスを全便、拠点正面で停車させることを実現している。

1.8 履修者合宿

(1) キックオフ合宿

2017 年 6 月 17 日（土）～18 日（日）の日程で、滋賀県高島市マキノ町にてデザインスクールキックオフ合宿を行った。本合宿は、4 研究科 11 専攻に分かれて所属する履修者が一堂に会し、デザインワークショップなどを通してデザイン学を体感するとともに、履修者同士・教職員が交流し親睦を深めることを目的としている。昨年度に引き続き、新入生（L1）はオリエンテーションを兼ねて、博士課程 1 年次（L3）の履修者は QE 後の履修や研究についてのガイダンスを兼ねて、それぞれ原則参加とし、博士課程学生を含む全履修者に参加を呼びかけた。参加者は、履修者 29 名（L1：10 名、L2：3 名、L3：6 名、L4：4 名、L5：6 名）、教職員 14 名であった。

合宿の 1 日目は、ユニット長によるトーク、自己紹介を行った後、学年、専門分野混成のチームに分かれ、後述のワークショップを行った。その後、コーディネータによるキャリアパス懇談会を行い、夜には懇親会で参加者同士の親睦を深めた。2 日目は、1 日目のワークショップの続きを行い、最後に各チームの議論の内容を発表し、振り返りを行った。

例年、L2 の履修者の一部に学生実行委員を任命し、合宿中に行うワークショップの企画についても任せているが、今回は、参加者がデザイン学についての理解をより深められるような企画とするため、ワークショップの企画は教員が行った。具体的には、1 期生が最終学年となり修了を控えていることから、ワークショップのテーマを「デザインスクールでの経験は将来の仕事や社会生活にどう関連するのか？」とし、履修者全員で議論を行った。これは、新入生だけでなく博士の履修者も、デザインスクールでの経験が将来どのようなことに活きるのか等を想像してもらうことにより、自らの多様なキャリアパスを描く助けとしてもらうことを狙ったものである。



楠見先生のトーク



ワークショップ1日目



夕食



懇親会



ワークショップ2日目



最終発表



合宿を終えて

(2) リフレクション合宿

2018年3月20日(火)～21日(水)に滋賀県高島市でリフレクション合宿を行った。本合宿は、修了する1期生が自身のデザイン学での活動を振り返り、その経験や知識を後輩にフィードバックするとともに、修了生と履修者のつながりを強めることを目的とした、修了生主導のイベントである。今年度初めてデザイン学大学院連携プログラムの修了生が誕生するため、今回が初めての企画となる。参加者は、履修者が14名、教職員が7名であった。

1日目は、L5の学生のデザイン学での5年間の活動の振り返りを中心に行った。自身の成功談や失敗談を後輩の学生に伝え、その後、履修者からの質問が飛び交った。特に印象的だったのは、イベントを含むデザイン学のカリキュラムと博士研究との距離感の取り方についてであった。うまく両者をシンクロさせて進めるのが理想であるが、研究テーマが基礎研究に寄っている場合などに、修了生がどのようなスタンスでデザイン学のカリキュラムに取り組んでいたのかが履修者にとっては興味のあるところであったようだ。最後に、プログラムコーディネータの石田先生より、デザイン学の立ち上げ時のエピソードや修了生のキャリアパスの多様性について説明があった後、修了生へのメッセージで締めくくった。

2日目は、修了生がリードして、同窓会の設立について議論を行った。同窓会の名称や目的、スタイルなどについて議論が交わされ、初代会長には古田幸三君が選任された。名称や目的については方向性が確定しなかったため、修了生のメーリングリストを作成し、修了生と履修者で引き続き議論が行われることになった。



自身の体験談を話す修了生



修了生に熱心に質問する履修者



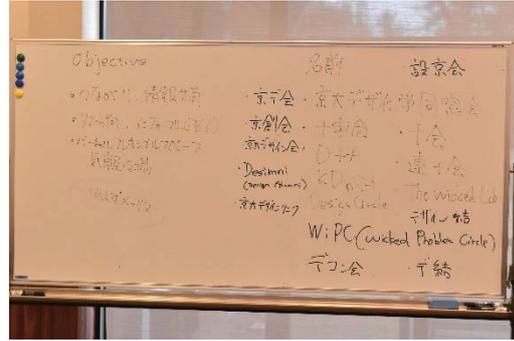
石田先生のトーク



1日目の様子



懇親会



同窓会の設立に向けた議論の跡



合宿を終えて

1.9 意識調査

本プログラムでは、教育プログラムの効果と課題を把握することを目的とし、毎年、履修者への質問紙調査を定期的に行っている。本年度は、新たに本プログラムへの履修を開始した、修士課程1年生(L1)および博士課程編入生(L3相当)を対象として調査を行った。

今回の調査は、2017年6月17~18日に開催したキックオフ合宿におけるプログラムの初日の午後に、当該学生を対象として調査紙への回答時間を設け、実施した。解答時間は30分である。また、キックオフ合宿に不参加だった該当学生には、後日メールにより解答を依頼した。

新入生を対象とした質問紙調査は、昨年度までと同様に、選択式の24問と、自由記述する7問から構成される。解答として18名から解答を得た。選択式の24問では、身につけたい力として、それぞれ、「1:是非獲得したい 2:できれば獲得したい 3:あまり興味はない」を回答してもらった。

回答結果の平均値から、新入生らが是非獲得したいと思っていることとして上位に挙げられた項目は、昨年までと同様に下記である。

- 状況を観察し、問題の本質を見抜く力
- 状況を観察し、何が課題かを捉える力

これらに加え、今回の調査で新たに上位に浮上した項目として、下記が認められた。

- 自分の研究を進めて行く上で、不足している情報や資源を認識し、必要に応じて他者に頼る力
- 課題に対してクリエイティブにアイデアアプローチを出す力

今年度の調査では、新入生よりも編入生の割合が高いことから、年次が高く、このような傾向がみとれる可能性があるが、デザイン学を学び、その実践を通して得られる感覚が、より深く浸透しつつあるようにも見受けられる点が興味深い。

下記に、デザイン学を履修することで機会が増えそうなこととして期待していることを調査した結果のグラフを示す。点数が高いほど、期待があると回答した件数が多いことを表す。本年度の調査結果を、2015年度の同様の調査結果と並べてみると、異なる研究分野に接する機会に対して、変わらず非常に高い期待を有していることが見てとれる。また、異文化に接する機会への期待は低めになっているものの、国外に行く機会の増加に期待をもっているように見受けられる。この変動の理由として、回答した履修者における留学生比率の増加が背景にあることも考えられる。来年度以降の調査も踏まえた上で、動向を調査する予定である。



新入生が抱くデザイン学への期待

大きな傾向としては、これまでに実施している新入生を対象とした調査と同様の傾向が見られ、新入生の期待と理解は、概ねこのような傾向を示していると考えられる。学年が進みデザイン学プログラムへの参加を通してこれらの期待と理解とがどのように変化していくかを見ていくことで、本プログラムの教育効果と課題を把握することへとつなげていく。

2 プログラムの教育

2.1 修士教育の充実

2.1.1 教科書シリーズの出版

温暖化、災害、エネルギー、食糧、人口などの複合的な問題は、1つの専門領域だけで解くことはできない。専門の分化が進む大学は、横断的な教育研究を進める必要がある。そこで、異なる領域の専門家が協力するための共通言語としてのデザイン学テキストシリーズを出版することとした。執筆には、情報学、機械工学、建築学、心理学、経営学を専門とする多数の教員が参加している。

本テキストシリーズ第1巻の『デザイン学概論』は、30余名の執筆により、2016年4月に共立出版から発刊した。現在、6つのデザイン学共通科目に対応する以下の書籍の執筆、出版を進めている。

『デザイン方法論』：執筆中

『アーティファクトデザイン』：2018年4月刊行

『情報デザイン』：2018年5月刊行

『組織・コミュニティデザイン』：2017年10月刊行

『デザイン構成論』：2018年3月末脱稿

『フィールド分析法』：2018年3月末脱稿

以下、2017年度に出版した『組織・コミュニティデザイン』の概要を示す。

『組織・コミュニティデザイン』 山内 裕・平本 毅・杉万 俊夫著

京都大学デザインスクールの講義「組織・コミュニティデザイン」の内容をまとめたテキスト。組織デザインやコミュニティデザインについての一般的議論を前置し、社会科学の基礎的理論をレビューした後、社会のデザインに関する重要な基礎理論を紹介する。デザインとは何か、デザインの対象は何かについての基本的な考え方を理解することで、デザインの実践が充実する。



2.1.2 問題発見型／解決型学習（FBL/PBL）の実施

本科目は、FBL（Field-Based Learning）を通して、与えられた実世界の状況から解決すべき問題を発見するプロセスをチームで体験することで、デザインの実践およびデザイン理論とデザイン手法の習得を行い、また、PBL（Problem-Based Learning）を通して、与えられた実問題をチームで解決するプロセスを体験することで、デザインの実践およびデザイン理論とデザイン手法の習得を行う。本科目で扱うテーマは、デザイン学に参画する各分野の教員が研究として取り組む実問題と、企業や自治体などから持ち込まれる実問題を実習化したものである。平成 29 年度は以下の 8 テーマを実施した。

[前期]

- データの地産地消～観光分野を対象に考える～（学術情報メディアセンター／情報学研究科 美濃導彦）
- データコミュニティデザイン（情報学研究科 佐藤彰洋）
- ICTを活用する新しい地域交通システムのサービスデザイン（情報学研究科 平岡敏洋）
- 構成と分解によるアーティファクトの探求と展示（デザイン学ユニット 中小路久美代）

[後期]

- データの地産地消～スマートツーリズムのデータエコシステム～（学術情報メディアセンター／情報学研究科 美濃導彦）
- 社会感情的能力の教育・評価に関わるデザイン（教育学研究科 野崎優樹）
- 不利益な工業デザイン（デザイン学ユニット 川上浩司）
- ハイスピードカメラによる日本美の発見（工学研究科 富田直秀、高等教育研究開発推進センター 土佐尚子）

※括弧内は筆頭実施責任者。

FBL/PBL はデザイン学共通実習科目として参画専攻がそれぞれ提供している。前期、後期とも 1 単位で、本プログラムにおいては QE の受験に必要な単位として認定される。選択科目であるが、社会に実在する問題発見、問題解決を異分野の学生がチームで取り組む最初の機会であり、QE 前の受講が推奨されている。なお、プログラム非履修者（各専攻在籍の、本プログラムを履修していない学生）のうち情報学研究科社会情報学専攻の修士課程の学生は、平成 28 年度から修了単位として FBL/PBL の単位が認定されるようになっている。

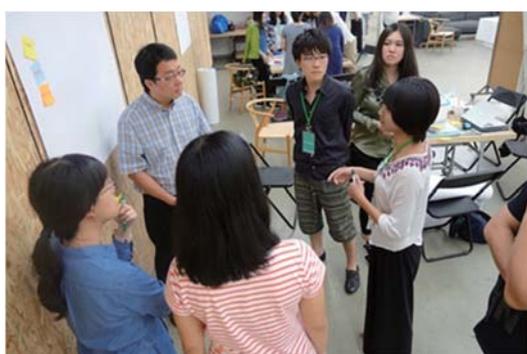
また、補助金終了後の本プログラムの継続性の確保を念頭に、プログラムから参画専攻への FBL/PBL の運営移行を徐々に進めている。具体的には、FBL/PBL のテーマ募集や参加者（受講者）募集は、これまでデザイン学ユニット所属の担当教員が取りまとめてきたが、平成 30 年度より、情報学研究科社会情報学専攻では、テーマ募集と参加者募集を専攻で独自に並行して実施するよう調整を進めている。学生にとっては本プログラムで募集するテーマと専攻で募集するテーマに違いはなく、従来どおり所属する専攻によらずいずれのテーマでも受講できる。

2.1.3 沖縄、香港でのデザインスクールの実施

(1) デザインスクール in アジア

平成 29 年 5 月 26 (金) ～6 月 4 日 (日) に香港バプティスト大学と国立成功大学との合同デザインスクールを実施した。本合同デザインスクールの目的は、京都大学での FBL/PBL、さらにサマーデザインスクールを経験した履修者(本科、修士 2 年)に、香港バプティスト大学や国立成功大学の学生と合同でデザインワークショップを行うことによって、修得したデザイン理論やファシリテーションの手法の定着を図ることである。今年度は、高齢化社会のためのシェアリングエコノミーを共通テーマとした。また、香港に加えて台湾でも開催することで、アジア各地の異なる環境に対して国際的な視点で高齢化社会のためのシェアリングエコノミーを設計することを目指した。まず初めに台湾の国立成功大学がホストとなりワークショップを開催し、順に京都大学、香港バプティスト大学と開催場所を移していく。どの大学の学生も少なくとも他国と自国を 1 カ所ずつ経験することで、自国の環境や文化との比較を通して、ホスト国の問題発見および解決を試みた。また、今年から国立成功大学が加わることで、工業デザインや経営学、文学など参加学生の専門分野が多様化し、異分野協働の環境が整った。

今年度は 3 都市でワークショップを行うことから、昨年までのように京都での取り組みを香港の課題解決に適用するといったスキームではなく、高齢化社会のためのシェアリングエコノミーという共通テーマの下、台南、京都、香港の各都市の高齢化に関わる問題に取り組んだ。台南では高齢化によって生じた空き家のシェアリングを、京都では高齢者の孤独を防ぐためのコミュニティという場のシェアリングを、そして香港では高齢者の人材のシェアリングのデザインを試みた。特に京都は 3 都市の中でも一番高齢化率が高く、また独居老人も多いことから、他の 2 都市と比べてより課題が深刻化している。このような課題への取り組みとしてコミュニティカフェ(まちの縁側)という、高齢者と地域コミュニティを繋ぐ活動が行われているが、コミュニティカフェの運営者も高齢化しており、その持続性が大きな課題であった。そこで、京都のワークショップではコミュニティカフェというコミュニティの場のシェアリングを持続可能とするモデルの構築に取り組んだ。



台南セッション



京都セッション



香港セッション



(2) デザインスクール in 沖縄

昨年に続き、5回目となるデザインスクール in 沖縄を開催した。本スクールの対象は主に1年次の履修者であり、ファシリテーションの習得を1つの目的とし、琉球大学と合同でワークショップを行うことで、新しい問題の発見と解決策を見いだす機会としている。

今回は「子どもの貧困」をテーマとして実施した。昨年同様、参加者がワークショップにおいてより効果的なファシリテーションを実践できるよう、事前にファシリテーション講習を実施した。今回特筆すべき事項の1つとして、例年以上に多様な大学、学部からの参加者があったことが挙げられる。

なお、過去のテーマは次のとおりである。第1回：「観光」、「おもてなし」、第2回：「健康」、「雇用」、第3回：「こどもの国の活性化」、「図書館と商店街の連携を通じた活性化」、第4回：「普天間飛行場の跡地利用」。

(i) ファシリテーション講習（於 京都大学デザインイノベーション拠点）

沖縄での合同デザインスクールの実施前に、デザインプロセスとデザイン手法、ファシリテーション、インタビューについての基礎的な講習のほか、昨年と同様にフィールドワークについての講習も併せて実施した。今回は琉球大学、愛媛大学からも計10名弱の受講希望者があったため、テレビ会議システムで接続し遠隔で実施した。

【スケジュール】

11月11日（土）13:30～17:30

講義「デザインとは」

講義「フィールドワークについて」

講義「インタビューについて」

講義「ファシリテーションとは」

ワークショップのデザイン、テーマ概要、オリエンテーション



講義「デザインとは」



講義「ファシリテーションとは」

(ii) 京大ー琉大合同デザインスクール（於 琉球大学地域創生総合研究棟 1階）

近年、日本では子どもの「貧困率」が上昇しているが、中でも沖縄県の子どもの貧困率は全国平均の約2倍に達しており、大きな社会問題となっている。本スクールでは沖縄県や現地のNPOなどの協力を得ながら、講演、フィールドワーク、ディスカッションを通して現状を理解した上で、問題の解決策をデザインした。参加者は5～6名で1チームとなり、計6チームに分かれてグループワークを行った。デザイン学履修者はファシリテータとして各チームの議論をリードした。

【スケジュール】

11月23日（木・祝）

午後 オープニング、基調講演、グループワーク

11月24日（金）

終日 フィールドワーク（平日につき京大生と一部の参加者のみ）

11月25日（土）

終日 フィールドワーク、グループワーク

11月26日（日）

午前 グループワーク、発表準備

午後 発表会、クロージング

【発表タイトル】

グループ1：親子モラル教育と児童センター人手不足対策

グループ2：「食卓」でつながる“みんなの家”～みんなで食べる、みんなで学ぶ～

グループ3：場所から切り込む子供の貧困 ～1Fに居座るご老人～（優秀賞）

グループ4：そうだ、服よ！ 服から変わる子供の貧困

グループ5：Are you aware? ウンジュ シュン?

グループ6：ゆいまーるアソシエーション



グループワーク



フィールドワーク



発表会



講評

(iii) 参加者

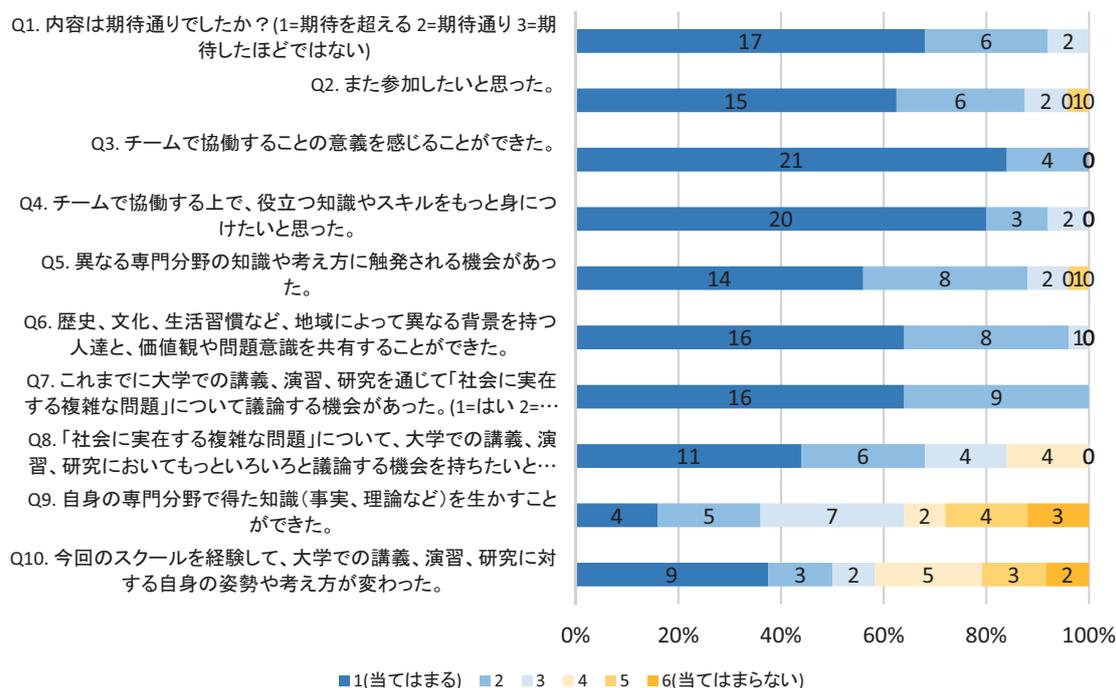
- ・学生 29 名（京大デザイン学履修者 10 名、琉球大学大学院生 3 名（工学研究科 2、人文社会科学 1）、琉球大学学部生 10 名（工学部情報工学科 4、工学部工学科 1、観光産業科学部観光科学科 1、法文学部 2、教育学部 1、医学部保健学科 1）、名桜大学学部生 3 名（国際学群 2、スポーツ健康科学科 1）、愛媛大学学部生 2 名（法文学部人文社会学科 1、社会共創学部産業イノベーション学科 1）、沖縄県立開邦高等学校 2 年生 1 名（学術探究科）。
- ・教職員 8 名（京大 4 名、琉球大学 3 名、愛媛大学 1 名）
- ・社会人協力者（教員 1 名、行政 4 名、公益法人 2 名）

(iv) アンケート

琉球大学側の参加者も含め、全員を対象にアンケートを実施した。内容は「デザインイノベーションインデックス」などに基づき、本スクール向けに新たに設計したものである。

結果を以下に示す。サマーデザインスクールと同様に、活動内容は 9 割が期待以上と回答し (Q1)、再度の参加意欲も非常に高い (Q2)。また、多様性のあるチームでの協働の意義を感じ (Q3、Q5、Q6 等)、そのためのスキルの習得の意欲も高いことが読み取れる (Q4)。回答者の約半数は学部生（琉球大学等）であることに留意する必要があるが、自身の専門性をなかなか活かせなかったと感じた参加者が多かったようである (Q9)。しかし、本スクールを経験して、大学での講義や研究に対する姿勢が変わったと明確に回答した参加者も 1/3 を超えていることをみれば (Q10)、本スクールが単なるイベントの枠を超え、大学における教育研究に対して少なからぬインパクトを持つことが示唆される。

アンケート結果



2.2 博士教育の実施

2.2.1 オープンイノベーション実習の実施

本実習では、社会の実問題を発見し解決するデザイン活動のために、関係する専門家あるいはステークホルダーに依頼し、オープンイノベーション（OI）のためのチームを構成し、ワークショップを連続的に実施することで目標を達成する。プログラム主導型、部局主導型、研究室主導型の3種類があり、いずれも異領域の専門家が加わるチームを受講者が構成し、マネジメントすることが要件である。

- **プログラム主導型**：デザイン学ユニットのOI実習担当教員が実施責任者となり、デザインイノベーションコンソーシアムの会員組織の協力を得て実施する。テーマは原則として公開可能で知財に関わらないものとする。受講者は履修者の中から募集し、その役割は、専門家として問題解決や問題発見に参加するだけでなく、OIのためのチームを構成しマネジメントすることにある。
- **部局主導型**：デザイン学参画専攻の教員が実施責任者となり、社会に存在する実問題、あるいは近未来に想定される実問題を課題とするほかは、プログラム主導型と同様である。
- **研究室主導型**：デザイン学履修者の指導教員が実施責任者となり企画実施する。博士研究を構想するためのもので、他領域の専門家を招き研究テーマを検討するなど、主として履修者の所属する研究室で行う。

今年度はプログラム主導型2件、部局主導型3件、研究室主導型2件の計7件を実施した。

下記に一部のテーマの概要を掲載する（括弧内は筆頭実施責任者）。

[前期]

近未来の建築空間・建設現場のイノベーションデザイン

（プログラム主導型・デザイン学ユニット 十河卓司／課題提供者：(株) 竹中工務店）

概要：近年の建築空間においては、エネルギー問題、空き家問題、少子高齢化問題などを背景として、付加価値の高い建築物が求められている。また、建設現場においては、建設作業員の不足が問題となっており、働く若者にとっての魅力向上や、建設工事における生産性向上が求められている。そこで本実習では、これまでの建築の枠にとらわれず、さまざまな専門分野の技術や知見を活用し、新しい建築空間、あるいは建築現場のアイデアを検討する。



専門委員会の様子

京都市中心部における「通り」の暫定的利活用に向けたプレイスメイキング

（部局主導型・工学研究科 神吉紀世子）

概要：京都市中心部は、長い歴史の中で、両側町を構成する「通り」を形成してきたが、「通り」に自動車交通が増加することで、「通り」に人々の賑わいが無くなりつつある。近年では、課題解決のため、歩行者空間の拡幅やオープンカフェの実施などのプレイスメイキングが全国的に実施されている。本実習では、修徳学区を対象エリアとし、関係諸団体と協議しながら「通り」の利活用に向けたプレイスメイキングを実験的に行う。

控えめな祝祭を創る <疎住のなかの Placemaking 京丹波和知での試作>

（部局主導型・工学研究科 神吉紀世子）

概要：京都府京丹波町・旧和知町の中心駅である JR 和知駅では利用客は年々減少が続けるが、依然地域の町場機能や文化活動の中心であり、駅周辺の居住者が主体となりにぎわいの維持のための活動が続けられてきた。本実習では、和知地域の地域特性を体感できるサイクリングコースとその小規模なサポート施設を計画・試作し、地域内にある3つの駅を要に和知のにぎわいが地域内の各主体により無理なく持続していく構造をデザインする。

[後期]

将来の高齢者向けサービスのデザイン

（プログラム主導型・デザイン学ユニット 十河卓司／課題提供者：パナソニック（株））

概要：超高齢化社会を迎えつつある日本では、高齢者が元気に自立し続けられる社会を構築することが求められる。一方で、30～40年先には高齢者数は減少に転じるほか、医療技術や AI・ロボット技術の進化などにより、高齢者向けサービスのニーズは現在とは変化することが予想される。本実習では、それらの変化を踏まえた上で、ケア施設が提供すべきサービスや、高齢者の生活行動を変えるような健康維持のための新しいサービスを検討する。

デジタル端末を用いた筆跡によるストレスの評価および学習環境のデザイン

(部局主導型・教育学研究科 野村理朗)

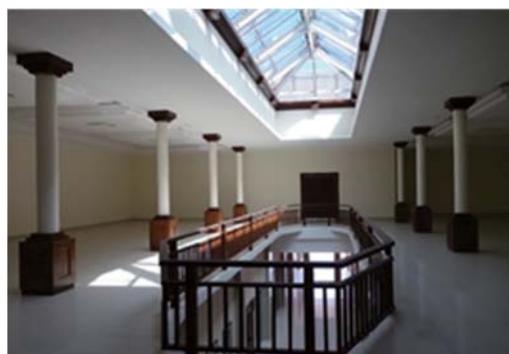
概要：近年、デジタル端末を用いた教育機会が学校現場で増え、得られるデータを学習者・教育者・学習環境のために利用する研究が増えている。本実習では、生体データのうち収集が比較的容易と考えられる筆跡データを、実際の教育現場のテストを通じて収集し、学校現場に資する研究を目指す。初等中等教育の教諭と相談しながら学校現場で実施可能な形のテストをデザインし、高校生を対象に実施する。

2.2.2 フィールドインターンシップの実施

フィールドインターンシップは、「現場の教育力」を活用する試みで、複数の専門領域に関わる国際的・社会的課題に対して、フィールドにおける問題解決を通じてリーダーシップを養成するものである。本科目での到達目標は、初めて状況を理解するフィールドにおいて、適切に状況を構造化し、解決可能な問題として定義するとともに、限られた時間内で現場のステークホルダーや異なる専門領域のメンバーと円滑にコミュニケーションを取り協力して実現可能な解決策を立案することである。

平成 29 年度は、昨年度に引き続き、文化財保護を目的とした NPO 「Indonesian Heritage Trust」を受入組織として、インドネシアのギャニャール県を対象に「情報から感情を想起させるスバック博物館の展示デザイン」をテーマに取り組んだ。インドネシアのギャニャール県には、2012 年に UNESCO の世界文化遺産に登録された「トリ・ヒタ・カラナの哲学を表現したスバック・システム」に含まれるパクリサン川流域のスバック景観があり、最古の灌漑システムを含んだ棚田の景観が有名である。スバックとは、伝統的な水利組合であり、バリ・ヒンドゥー教の哲学「トリ・ヒタ・カラナ」と結びつき、スバックの行事や運営が行われている。しかしながら、このように地元住民の生活と密接な関わりを持つスバックが世界遺産に登録されたことで、水田が観光施設に変わり、棚田が海外資本の企業に買い占められ、多くの農家がスバックを離れている。そこで、改めて住民にスバックの重要性を認識させ、スバックの持続可能性を高めるよう住民を動機づけるために、建設中のスバック博物館（右図）の展示をデザインすることが今回のインターンシップの課題である。

まず 1 日目は、スバックに関する基本知識を得るために、スバックの現地訪問と講義を受講した。具体的には、地元大学（Dwijendra 大学）の Sedana 教授からスバックに関する最新の調査研究の結果について講義を受講した。さらに、フィールドサーベイとして Nyuh Kuning 村の水田やスバック寺院を訪問し、灌漑施設や寺院のメンテナンス状況などを確認した。2 日目は、既存のスバック博物館の問題点と新博物館の潜在的な資源を調査するために、Gianyar 州の隣の Tabanan 州のスバック博物館と建設中のスバック博物館に訪問した。また夜には、フィールドワークで得られた気づきをグループ内で共有し、3 日目のグループディスカッションに備えた。特に印象的だったのは、従来のスバック博物館が農作業の知識を伝えることを目的とした展示構成になっ

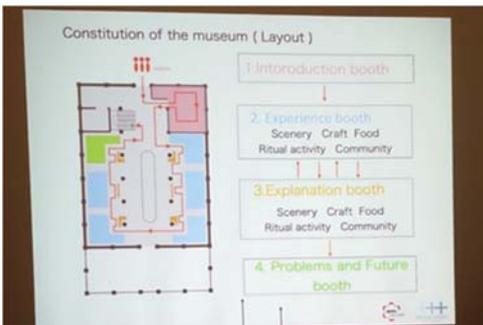


建設中のスバック博物館

ており、スバックの現状や重要性を伝えるものでなかったことである。また、新博物館の立地が棚田のない海沿いではあったが、スバックの源泉であるアグン火山とスバックの最終地である海の両方を一望できる素晴らしい場所であったことが印象的であった。3 日目は、世界遺産の Tirta Empul や Mengening やその周辺のスバックを訪問し、農民へのインタビューなどを通して、観光地化しつつある棚田に対する農民の生の声を収集した。また、午後は前日の気づきなども踏まえ、グループディスカッションを行い、現状の問題点を整理し、新博物館の展示のコンセプトをまとめた。最終日は、前日にまとめた新博物館の展示コンセプトを具体化するためのグループディスカッションを行った。各自のアイデアをブース毎にまとめ、全体のレイアウトなどを設計した。最後に新博物館に Gianyar 県文化課の課長を招き、現地発表会を行った。



フィールドワークの様子



現地発表会の様子

2.2.3 リサーチインターンシップの実施

リサーチインターンシップは、主として国内外の研究機関の研究室に数週間から数ヶ月滞在し、受入先組織の研究者との共同研究を通じて、デザイン学の視点から既存の学術分野を横断する境界領域において真理を探究でき、新しい研究分野において研究チームを組織してリードできる能力の涵養を目指している。そのために、指導教員がインターンシップ先を決定した後、履修者が受入先組織と共同研究の提案、計画、滞在中の宿舎等についての協議を行い、実施計画書を作成する。関係教員による実施計画書の事前審査を受けた上でインターンシップを実施し、インターンシップ終了後にはレポートを提出し、報告会で発表することを必須としている。

平成 29 年度は、3 件実施計画書の提出があり、それぞれ兵庫県立大学応用情報科学研究科の研究室、香港中文大学マーケティング専攻の研究室、英国ブリストル大学実験心理学部の研究室を受入先組織としている。このうち実施済みの前者 2 件について実施内容を報告する。

1 件目の兵庫県立大学へのリサーチインターンシップでは、比喩表現の解釈をコーパスに基づいて自動的に計算する、心理学と情報学を横断する共同研究を実施した。本研究では、名詞比喩表現の主題と喩辞を入力とし、名詞比喩表現の解釈を出力とする検索モデルの提案と評価を行った。より具体的には、はじめに主題と喩辞のそれぞれの語の意味を、日本語コーパスに基づいて生成される n 次元の特徴ベクトルとして求める。そして、この主題と喩辞のベクトルに対して、2 種類の計算モデル（平均モデルと **Predication** モデル）を適用し、それぞれの方法によって計算される比喩表現の特徴ベクトルを求めた。この比喩表現ベクトルを用いて、コーパスから類似する形容詞を求め、比喩表現の解釈としている。

2 件目の香港中文大学へのリサーチインターンシップでは、人種のカテゴリー知覚に関する文化比較について共同研究を行った。本研究では、日本人で見られた白人に対するカテゴリー知覚バイアスが日本人特有のものか、それとも香港人でも見られるのか明らかにすることが目的である。実験結果から、日本人よりも香港人の方がカテゴリー知覚バイアスが強いことが明らかとなった。さらに、このバイアスに影響を与えている要因について、遺伝子解析と質問紙調査により、遺伝子多型（COMT、DRD4）、心理的指標、多人種との接触頻度の 3 つの観点から分析を行っている。



実験で採取した口腔細胞



実験アシスタントとともに

2.2.4 リーディングプロジェクトの実施

博士課程では、社会的課題に挑戦する産学(官公民)リーディングプロジェクトに参加し、複数アドバイザー制度の下で、高度な専門性と俯瞰力を要求する協働を通じて学位論文をまとめる必要がある。リーディングプロジェクトの要件は以下の通りである。

- 社会の実問題、あるいは近未来の問題の発見・解決のためのプロジェクトであること
- 博士の主な指導教員となれる教員がプロジェクトチームに含まれていること
- 複数の専門領域による博士指導体制が構想されていること

平成 29 年度は、5 件のリーディングプロジェクト調書が提出され、3 年次履修者は学位研究を各自のリーディングプロジェクト内で進めている。

以下に掲載可能な進行中のリーディングプロジェクトを示す。

[平成 29 年度開始のプロジェクト]

履修者 A (教育学研究科)	
指導教員	齊藤 智 (教育学研究科 教授)
プロジェクト名	文脈情報がワーキングメモリに与える影響の心理学実験及び計算論的モデルによる検討
[プロジェクトの概要] 日常生活においては、単にものを覚えるだけでなく、何らかの作業をしながら、ものを覚えておく必要がある。このような場面で必要とされる記憶機能としてワーキングメモリが挙げられ、これまでワーキングメモリと様々な認知課題との関連が解明されてきた。ところが、実際の社会的な活動の中では、我々はさまざまな作業を行い、その作業の内容は刻々と変化すると考えられる一方で、そうしたダイナミックな環境におけるワーキングメモリの働きは、これまでほとんど研究されてきていない。そこで、本プロジェクトは作業の内容が変化することが記憶成績に与える影響を検討する。この検討により、社会的な活動を含む日常生活における人間の認知活動の特性を明らかにすることを目指す。	
履修者 B (教育学研究科)	
指導教員	野村 理朗 (教育学研究科 准教授)
プロジェクト名	児童虐待のメカニズム解明に向けた心理・生理学的取り組み
[プロジェクトの概要] 児童虐待は子どもの心身の健全な発達に重篤なダメージを与え、死亡事例に至るケースも少なくない。日本においても児童虐待報告件数は年々増加しており、非常に重要度の高い社会問題の 1 つである (厚生労働省生労働省、2017)。児童虐待に関する取り組みは国内外において数多くあるものの、児童虐待が発生する心理・生理的機序に関する基礎的研究は必ずしも十分とはいえない。本プロジェクトでは、心理学だけでなく近接する他領域の分野の手法を包括的に利用し、児童虐待の発生に関わる学際的知見を得ることを目的とする。最終的には、その知見を他の様々な領域に還元し、児童虐待防止に向けた他分野融合型の取り組みを構築することを目指す。	

履修者 C (工学研究科 (マイクロエンジニアリング))	
指導教員	松原 厚 (工学研究科 教授)
プロジェクト名	工作機械使用環境のモデル化による加工性能の向上
<p>[プロジェクトの概要]</p> <p>工作機械において、熱変位は加工精度・加工効率を低下させる大きな要因である。工作機械に発生する幾何誤差のうち7割近くが熱変位によるものであるとされている。熱変位は機械要素や加工による発熱のほかに、工作機械の据付けられた環境の温度変化にも大きく影響される。現在の工作機械では熱変位の補正が行われている。しかし、温度環境の変化により、工作機械に発生する熱変位を機械上の補正により十分に抑制することは難しい。恒温室に機械を据付けることにより、温度環境の影響を予測しようという取り組みがなされている。しかし、環境温度分布の管理と工作機械自体の温度管理の両方を行い、工場全体の省エネを図るなどの取り組みは行われていない。そこで、工作機械にとって最適な工場全体の温度環境デザインを行う。</p>	
履修者 D (工学研究科 (建築学))	
指導教員	三浦 研 (工学研究科 教授)
プロジェクト名	仮想建築・都市空間における認知行動を誘発する体験型デザインシステムの構築
<p>[プロジェクトの概要]</p> <p>履修者は、人間の認知や行動を誘発させるような環境構築のためのデザイン方法論を体系化することを目指している。我々は無意識に周囲の環境から影響を受けて生活しており、個々の技術開発の集約となった現代社会では、人間の創造する新たな価値観の変容に柔軟に対応することは難しい。</p> <p>本プロジェクトでは、人間と環境に介在する関係性に着目した人間行動を誘発するデザイン方法論を構築する。そのためのアプローチとして、(a) 地域資源、(b) まちづくりコミュニティ、(c) 空間の文法、という3つの要素からなる枠組みを提案する。これらの3つの要素を介して、建築的なアプローチからソーシャルなコンテキストを踏まえて街並みのデザインを再定義することで、街並みの変化からその背景にある人々の振る舞いへと研究を拡張させていく。これが確立できれば、建築的なアプローチにとどまらず、組織デザインや教育のデザイン、消費者の購買意欲の心理・行動などの研究にも応用の可能性がある。</p>	
履修者 E (情報学研究科)	
指導教員	守屋 和幸 (情報学研究科 教授)
プロジェクト名	津波被害漁場における魚類の生息地利用の解明と漁業復興に関する研究
<p>[プロジェクトの概要]</p> <p>大地震や津波などの大規模な災害は予見が困難な上、被災地の人間社会・自然環境に多大な打撃を与える。特に水産業においては資源を有する漁場が破壊されることにより操業が困難になるため、その早期の回復が望まれる。本プロジェクトでは東日本大震災により被災した漁場が被った影響を学術的に解明する研究を背景とし、その成果は水産業復興に大きく貢献すると考えられる。また、現地の水産業に古くから関わる福島県水産試験場との協議によって問題・課題の明確化と解決法の模索を目指しており、デザイン学プログラムの目標とする取り組みを実践する。</p>	

[平成 28 年度開始のプロジェクト]

履修者 A (教育学研究科)	
指導教員	楠見 孝 (教育学研究科 教授)
プロジェクト名	処理流暢性を感じる認知的メカニズムの解明
<p>[プロジェクトの概要]</p> <p>我々が様々な物事を評価する際には、「〇〇しやすさ」がその基準の一つとして挙げられる。この「〇〇しやすさ」は、心理学では処理流暢性という概念で研究されている。処理流暢性の効果は、単語を覚えている程度から他者の印象評価まで多くの評価や判断に影響を与えている。しかし、処理流暢性が生じるメカニズムについては明らかになっていない。特に、我々が「〇〇しやすい」と感じるように物事がデザインされることは、必ずしも望んだ結果が得られない可能性がある。例えば、記憶しやすいよりも記憶しにくいと感じる学習方法の方が記憶課題の成績が良いことが示されている。</p> <p>そのため、本プロジェクトでは流暢性という概念を実験的に検討し、「〇〇しやすさ」を感じるメカニズムの解明を目指す。それを通して、心理メカニズムの観点から妥当な「デザイン」に資する知見を社会に還元することも同時に目指す。</p>	
履修者 B (教育学研究科)	
指導教員	楠見 孝 (教育学研究科 教授)
プロジェクト名	食品リスク認知に関するリスクリテラシーのアセスメントと育成
<p>[プロジェクトの概要]</p> <p>現代は食品に対する安全・安心を求める声が大きく、食品のリスク (人の健康に悪影響を及ぼす可能性) に対応できる市民を育成することが求められる。本プロジェクトの目的は、(1) 食品リスク認知に関するリスクリテラシー (リスクに関わる科学的情報を理解する能力) を評価し、(2) リスクリテラシーを高める教育をデザインすることである。前者の目的を達成するため、本プロジェクトではリスクリテラシーの主要な構成要素であるニューメラシー (確率・統計を理解する能力) の日本語版尺度を作成する。また後者の目的のため、食品リスクの発生確率を理解するためのリスクリテラシー教育を行う。リスクリテラシー教育は、高大連携事業の一環であり、学生の主体性を引き出すためにアクティブラーニング形式で行う。本プロジェクトは、教育学・心理学・農学を専攻するメンバーによる学際的な研究である。</p>	
履修者 C (教育学研究科)	
指導教員	楠見 孝 (教育学研究科 教授)
プロジェクト名	利他行動を促進する社会デザインの提案
<p>[プロジェクトの概要]</p> <p>利他行動・協力行動は円滑な社会生活に欠かせない人の営みである。また、日常のコミュニケーションだけでなく、途上国の貧困問題等の解決においても利他行動は重要な役割を果たしうる。こうした利他的なふるまいを促進する際に、利他的な人に与えられる評判情報が機能すると考えられる (e.g., Milinski, 2002)。本プロジェクトでは、利他行動に対してどのような評判が与えられるのか、評判を気にすることで人が利他的になるのはどのようなときかを調べる。その基礎的な知見をもとに、評判情報を活用することによって利他行動を促進する社会環境デザインの提案を目指す。</p>	

履修者 D (教育学研究科)	
指導教員	齊藤 智 (教育学研究科 教授)
プロジェクト名	系列順序表象の獲得と運用を支える発達メカニズムの検討
<p>[プロジェクトの概要]</p> <p>幼児期から児童期は、言語、行為、文字、数を自らのものとする重要な時期である。しかし、上記の各領域の関係は不明瞭であるだけでなく、各領域に困難を抱える子どもたちに対する教育方法も確立されていない。そこで、本プロジェクトは言語、行為、文字、数に共通する系列順序情報に着目する。特に、私たちは個々の順序情報を記憶するのではなく、より抽象的な系列表象を形成し、様々な状況で柔軟に運用することを可能にする発達メカニズムを明らかにすることを目的とする。本プロジェクトで得られた知見は教育実践に示唆を与えるだけでなく、各領域に困難を抱える子どもたちの障害像を発達の観点から見直すことも可能にする。なお、本プロジェクトは、上記の広範な領域を網羅できるように、各領域で世界最高峰の研究者と連携して研究を進める予定である。</p>	
履修者 E (教育学研究科)	
指導教員	野村 理朗 (教育学研究科 准教授)
プロジェクト名	瞑想を用いた医療従事者向けの燃え尽き防止プログラムのデザイン
<p>[プロジェクトの概要]</p> <p>現在、医療従事者などの燃え尽きが問題となっている。この問題に対応して、米国の Mind & Life Institute のボードメンバーであり禅の指導者でもある Joan Halifax は、医療者・瞑想指導者・認知神経科学者を中心としたメンバーによって、瞑想を用いた医療従事者向けの燃え尽き防止プログラム (GRACE) を開発し、米国を中心に運用している。</p> <p>Joan Halifax の呼びかけにより、日本でも、2015 年度に Being With Dying 研究会が発足し、日本の医療者・瞑想指導者・神経科学者を中心としたメンバーによって日本版 GRACE を開発中である。特に医療従事者向けに、仏教由来のメンタルトレーニングを提供するためには、認知神経科学の観点からメカニズムを解明するとともに、科学的に説明することが決定的に重要である。そこで、本プロジェクトでは、①fMRI を用いて瞑想の神経基盤を解明すること、②それらの知見を踏まえて、医療者や瞑想指導者とともに科学的なメンタルトレーニングを開発すること、③医療従事者向けに適切に伝達するためのワークショップをデザインすることを目的とする。</p>	
履修者 F (工学研究科 (機械工学))	
指導教員	榎木 哲夫 (工学研究科 教授)
プロジェクト名	ドライバと自動化による協調運転のデザイン (Design of Driver-Automation Co-Agency)
<p>[プロジェクトの概要]</p> <p>ドライバ (人) とクルマ (機械) が「自然」な形で協調できるシステムを実現するうえでデザインに求められる視点と課題抽出を目的に、京都大学工学研究科機械理工学専攻機械システム創成学研究室 (榎木研究室) を中心に自動車メーカー・電機・情報通信企業の複数の企業との産学連携プロジェクトとして実施する。特に、人と自動化の間での「適応的機能配分」の課題や、人または自動化のいずれかが行っていたタスクを適当な時点で他方に譲り渡す「権限委譲」の課題をはじめ、ドライバの状況認識や心理学的側面、さらに社会の人々に心から受け入れられる自動運転の実現に向けた技術的課題と法制度のあり方を含めた幅広い未解決課題について取り組む。</p>	

履修者 G (工学研究科 (機械理工学))	
指導教員	小森 雅晴 (工学研究科 教授)
プロジェクト名	全方向移動ロボットの機構の解析と総合
<p>[プロジェクトの概要]</p> <p>工場や倉庫での搬送作業は移動ロボットによる支援・代替が進められている。しかし、従来の機構は人のように高度な移動を行うことができず、適応可能な作業や環境が限られていた。そこで本プロジェクトでは、任意の方向に移動可能な全方向移動ロボットの研究を行う。種々の全方向移動ロボットを統一的に扱える理論を構築し、用途に適した機構を設計するための方法論を整備する。特に有用性の高い機構のプロトタイプを製作し、実験により実環境での振る舞いの調査を行う。提案する全方向移動ロボットは、高齢者用の移動装置やコンパクトシティにおける高効率な移手段など様々に応用できる。</p> <p>本プロジェクトの進行に際し、外部の企業である一志株式会社から機械の設計等の技術について現場視点でのアドバイスを受ける準備が整っている。</p>	
履修者 H (工学研究科 (建築学))	
指導教員	神吉 紀世子 (工学研究科 教授)
プロジェクト名	大都市圏周辺地域の居住エリアにおけるスマートシュリンキングモデルの構築—大阪府茨木市における立地適正化計画を通して—
<p>[プロジェクトの概要]</p> <p>人口減少社会に移行しつつある現在、大都市圏周辺地域の居住エリアでは住民の生活環境を維持できるように、地域の実情に合わせて低密度化を図るスマートシュリンキングモデルが模索されている。そのような社会的背景から、大都市圏周辺地域として代表的な大阪府茨木市を事例として、スマートシュリンキングモデルを構築することが、本プロジェクトの目的である。</p> <p>そのために、昨年度は、茨木市に実在する工場跡地をケーススタディとしたアーバンデザインセミナーの実施に参画して、居住エリアのモデルを構築した。昨年度の成果を踏まえて、本年度からは、都市全体の観点から居住エリアのスマートシュリンキングモデルを構築するため、茨木市立地適正化計画の策定に関わっている。具体的には、本年度、各居住エリアの実情を把握するために、茨木市民 3000 人を対象としたアンケートを実施している。その結果を踏まえて、来年度はスマートシュリンキングモデルの構築に向けた市民ワークショップ等を実施する予定である。</p>	
履修者 I (情報学研究科)	
指導教員	石田 亨 (情報学研究科 教授)
プロジェクト名	Research on Multilingual Environment for Collaborative Ideation
<p>[プロジェクトの概要]</p> <p>Now a day, people from different country usually learn English or a shared language to collaborate. In this case, people with low shared language skill might not be able to contribute as much as it should be due to language barrier. This leads to inequality of chance to understand and speak up. In this project, we would like to create a supporting environment for multilingual collaboration based on the idea that people can communicate better, smoother, with better understanding, regardless their level of shared language skill. This project deals with collaboration problems with technology, including machine translation. However, not only information science, but also social science could be our tool to the solution we are looking for by taking the different cultural and language background into account.</p>	

[平成 27 年度開始のプロジェクト]

履修者 A (教育学研究科)	
指導教員	楠見 孝 (教育学研究科 教授)
プロジェクト名	動機づけを促進するコンピュータ利用学習システムのデザイン
<p>[プロジェクトの概要]</p> <p>情報通信技術の発達に伴い、様々な形態のコンピュータを利用した学習 (Computer Based Learning) が普及している。これらは利便性や効率に優れる反面、自律的な取り組みが求められるため長続きしないことが多いという問題がある。本プロジェクトでは、心理学と情報学の知見を拡張・応用し、自律的な動機づけを高める学習課題の提示方法や仮想空間上の学習環境についての研究活動を行い、持続して取り組むことのできるコンピュータ利用学習システムをデザインする。</p>	

履修者 B (教育学研究科)	
指導教員	楠見 孝 (教育学研究科 教授)
プロジェクト名	比喩表現のコミュニケーションモデルの提案
<p>[プロジェクトの概要]</p> <p>比喩表現は慣用的な表現では言い表すことができない体験を表現することを可能にする表現であり、感覚経験・感情的体験・抽象事物などを他者に伝達する際に不可欠である。しかし、比喩表現が伝達される過程やその効果は明らかになっていない。そこで、本研究では比喩表現のコミュニケーションモデルを提案することを目的とする。具体的には、心理学実験や調査による仮説モデルの生成と、仮説モデルをもとにした日本語コーパスを用いた比喩表現伝達システムの提案を行う。本研究は言語学・心理学・情報学に対する貢献だけでなく、私たちの日常的な比喩表現の使い方に対してインパクトを持つと考える。</p>	
履修者 C (教育学研究科)	
指導教員	野村 理朗 (教育学研究科 准教授)
プロジェクト名	幼児期における表情表出の発達の検討ー日本とカナダの比較研究
<p>[プロジェクトの概要]</p> <p>他者とのコミュニケーションにおいて、適応的な表情表出は重要である。本プロジェクトでは、感情や表情の理解・表出が大きく発達を遂げる幼児期を対象に表情の表出がどのように発達し、どのような要因に支えられ、表情をコントロールできるようになるかを検討することを主な目的とする。表情の表出においては、これまでの研究から日本を含む東アジア圏と欧米において文化差が見られることが示されている。こうした知見を踏まえ、カナダのオタワ大学の Pierre Gosselin 教授の協力を受け、日本とカナダの幼児の表情表出にはどのような違い、あるいは類似点があるかを検討する。</p> <p>こうした比較研究の実施により、表情表出の発達における文化の影響についても明らかにできると考える。コミュニケーションにおいて重要な伝達手段である表情表出の違いを文化間で検討することは、今後より拡大するであろうグローバル社会の中で、異文化の他者と円滑なコミュニケーションを実現する上で有用な知見を与えると考えられる。また、文化比較研究に限らず、表情表出の発達過程や、それを支える要因を解明することは、表情の表出が乏しいと言われる ASD 児・者や認知症患者などのトレーニングや、ひいては、人とコミュニケーションをとることを目的としたロボット等の適応的な表情表出の実現にも有益な知見を提供できる可能性があると考えられる。</p>	
履修者 D (教育学研究科)	
指導教員	野村 理朗 (教育学研究科 准教授)
プロジェクト名	他者の人種カテゴリー知覚と差別・偏見の個人差についての文化比較
<p>[プロジェクトの概要]</p> <p>他者の人種が何であるかについての直感的な判断は、人種についての信念を介して他人種への差別や偏見へと結び付くが (e. g., Chao, Hong, & Chiu, 2013)、この関係性は認知的柔軟性に関与する遺伝子多型によりある程度規定される (Fujita, Himichi, & Nomura, in prep)。こうした遺伝子多型は環境への感受性が指摘されていることから、本プロジェクトでは、環境について文化に焦点を当て、文化的な違いが他者の人種カテゴリー知覚と差別・偏見の個人差に与える影響について、遺伝子多型の分布が同一で文化の異なる日本と香港両国民に対し、遺伝子解析、脳活動並びに心理指標を測定比較することで検討を行う。この検討により得られる知見は、他人種他者への差別や偏見の発生メカニズムの解明につながるものであり、人種間葛藤解消方法について一定の示唆を得られると考える。</p>	

履修者 E (工学研究科 (機械理工学))	
指導教員	西脇 眞二 (工学研究科 教授)
プロジェクト名	ナノスケールを対象とした熱電素子のトポロジー最適化
<p>[プロジェクトの概要]</p> <p>トポロジー最適化をはじめとする構造最適化手法は、大学のみならず企業でも広く研究、開発がなされてきた。しかし、ナノスケールを対象とした最適化に関する研究報告は未だ少ない。ナノスケールにおけるトポロジー最適化手法の構築は、マクロスケールでの性能の抜本的な改善に繋がることが期待出来る。その一方で、本手法の構築には、機械工学の知識のみならず、数学、情報学等の知識が必要となる。特に今後、大規模計算機を用いた手法の構築、検証を検討しており、並列化計算などに関する知識が非常に重要となる。そのために、今後、それらの分野の専門家との協働を行っていく予定である。</p>	
履修者 F (工学研究科 (建築学))	
指導教員	神吉 紀世子 (工学研究科 教授)
プロジェクト名	『ダイアログ』を導入した都市認識アプローチ手法の開発
<p>[プロジェクトの概要]</p> <p>本研究は、都市・建築デザインへ向けて地域・都市における実践的なアクション手法の開発を目的とする。アクションリサーチの立場から、近年、組織開発、グループ発想やイノベーションの基本手法として注目される『ダイアログ』を独自の設定で都市・建築の分野に導入し、居住者個々人の関心や価値観に基づくものの複雑で本人から表明され難い「地域への価値付け」を共に納得に至る行程を通じてつくり上げ、外部的に記述するコミュニケーション手法を開発してきた。さらに、そうした価値付けの多様な内包可能性を包含しつつ地域の実空間における「発見的な価値付け実態化の可能性」を得るための方法として、必ずしも顕在指摘されていない「問い」の創造を観察者に働き掛けるアクションを実施した。これにより、観察者が実空間の現象に気が付き「指し示し」、これまでとは異なった見方や「価値付け」を獲得することをサポートするグループアプローチ方法を案出した。これら一連のプロジェクトは都市の 50 年、100 年後の価値を語る状況を作り出し、より多くの主体が混在したデザインの可能性を扱うものである。</p>	
履修者 G (情報学研究科)	
指導教員	大手 信人 (情報学研究科 教授)
プロジェクト名	ワークショップにおける組織デザインの探求
<p>[プロジェクトの概要]</p> <p>環境変化の激しいグローバルな社会の中で、社会問題や経営課題もより複合的・横断的で難解なものになりつつある。そのため、多様な個人が組織の垣根を越えて協働共創する場が求められている。その代表例がワークショップである。これまでワークショップは主に教育やまちづくり分野で学習形式や合意形成手法として盛んに議論され、仮説検証やモデル構築がされてきた。そこでは、プロセスの実践そのものは、ワークショップデザイナーやファシリテータの熟達、つまり属人的な経験値として扱われてきた。しかし、実際のワークショップは、状況依存的な出来事への即興性が求められる場であるが故に、既存モデルでは説明できないワークショップ特有の人々の実践方法が存在する。</p> <p>その実践の理論や方法論を探求することは、社会の実問題解決の場づくりの基盤として貢献すると考える。本プロジェクトでは、京都大学デザインスクールでの様々なワークショップイベントを対象にビデオ観察調査を実施している。エスノメソドロジー・会話分析によりワークショップ場面の相互行為を分析し、経営学 (組織論、サービス学) の観点から、ワークショップの組織デザインの理論と方法論を探求する。</p>	

履修者 H (情報学研究科)	
指導教員	吉川 正俊 (情報学研究科 教授)
プロジェクト名	文化的視座からの新たなサービスデザイン方法論の検討
<p>[プロジェクトの概要]</p> <p>人々のニーズや抱える問題が複雑化する現代社会において、その充足や解決だけに焦点を合わせた新規サービスや商品の開発は限界を迎えつつある。一方で、それを乗り越えるような方法論や視座の提供はなされていない。この先の社会をデザインしていく上で、その基盤となるような方法論の確立は、企業の経済活動に留まらず、社会的な意義の高い案件である。本プロジェクトでは、履修者の研究の一貫したテーマである、サービスの文化性を切り口とした新規サービスデザイン方法論の確立を目指す。具体的には自身の研究やこれまで実施してきた企業との共同研究から得られた知見を元に、本プロジェクトにてさらなる議論、実践を重ね、「文化の構築」という視点から、サービス創出方法に新たな理論基盤を与えることを目指す。</p>	
履修者 I (情報学研究科)	
指導教員	黒橋 禎夫 (情報学研究科 教授)
プロジェクト名	知識に基づく構造的言語処理の確立と知識インフラの構築
<p>[プロジェクトの概要]</p> <p>テキストは、専門家によるデータ分析結果や解釈、ステークホルダの批判・意見など、人間の知識表現の根幹をなしている。しかし膨大な知識が蓄積され、科学技術や社会構造が複雑化した現代では、専門家ですら関連する情報を網羅的に把握することが困難な状況が生まれている。本プロジェクトは、大規模言語資源に基づく言語処理、Web 情報分析、形式意味論・意味解析の理論研究を融合することにより、知識に基づく頑健で高精度な構造的言語処理を実現し、これによって様々なテキストの横断的な関連付け、検索、比較を可能とする知識インフラを構築する。工学的な観点に加え、認知心理学的な観点からもシステムの評価を行い、よりユーザ目線のシステム設計を目指す。また、構築したコーパスや辞書、言語解析システムを、不満買取センターなど企業のカスタマーセンター業務等の社会の実問題に適用し、その解決に役立てることを目標とする。</p>	
履修者 J (情報学研究科)	
指導教員	五十嵐 淳 (情報学研究科 教授)
プロジェクト名	IoT ソフトウェア開発を支える文脈指向言語の設計開発
<p>[プロジェクトの概要]</p> <p>現在は、IoT 製品やロボットが一般に普及し始め、センサーなどから取得されたデータをソフトウェア上で利用することが一般的になってきている。そのようなソフトウェアの開発においては、センシング値のような連続的に変化する値や、位置情報などの環境の変化に応じた動的な振舞いの変化を扱う必要があるが、それらを自然に扱うためのプログラミング言語機構は未だ成熟しているとは言えず、IoT ソフトウェアの開発を難しくしている。本研究では、この問題を解決すべく、センシング値や環境の変化に感受的なソフトウェアを容易に開発するための文脈指向プログラミング言語を設計する。</p>	

2.3 研修・学習会

2.3.1 研究提案表現伝達学習会

研究提案表現伝達学習会は、履修者が、研究提案書を構想、執筆するプロセスをサポートすることを目的として 2016 年度より開始した学習会である。本年度は、5 月 2 日および 5 月 15 日の 2 回、デザインファブ리케이션拠点において開催した。初回は L3（情報学、教育学）2 名、L5（教育学）1 名、2 回目は、L3（機械工学）1 名の参加があった。デザイン学ユニット教員がそれぞれ数名参加した。

デザイン学プログラムでは、学振への申請を研究活動経費受給のための条件とし、外部に対して研究を提案するという姿勢を推奨している。研究提案表現伝達学習会では、自分が行おうとしている研究について、その意義や位置付け、また研究に対する熱意といった事柄を、短いフレーズや文章で効果的に伝えることを学ぶことを目的とする。想定される査読者と分野の関わりや、多数の提案書を短時間で読むという査読者らの状況を理解することは、提案書を作成する上での重要なポイントとなる。

本年度の研究提案表現伝達学習会では、それぞれの履修者が、提案書の草稿を会場に持ち寄り、会場にいる人数分のコピーを作成した。ついで、教員を含めた参加者全員が、1 本あたり 5 分を目処に、全ての提案書の草稿を読み、よくわからないと思った箇所や強調すべきフレーズに直接マーカーや赤ペンで書き込んだ。全員分の提案書をチェックした後、各提案書に対し順番に、10～15 分をかけて参加者がコメントし書き込みを行なった提案書を著者に戻した。

参加した履修者らは、自分の分野以外の提案書を読むことで、自分自身の研究の位置付けの方策を探ると共に、他者の提案書に対する自らの感想やコメントについて、教員や他の履修者との重なりやずれを体験する機会となったといった感想が得られた。

2.3.2 フィジカルプロトタイプング集中実習

日時：第 1 回 8 月 30 日（水）10:30～18:00
第 2 回 8 月 31 日（木）10:30～18:00
第 3 回 9 月 6 日（水）10:30～18:00
第 4 回 9 月 7 日（木）10:30～18:00（全 4 日間）
場所：京都大学デザインファブ리케이션拠点
講師：大島 裕明（京都大学大学院情報学研究科）
白石 晃一（京都大学デザイン学ユニット）
平塚 晃美（京都大学デザイン学ユニット）

デジタルファブ리케이션とフィジカルコンピューティングを用いたフィジカルプロトタイプングを実践するスキルを身に付けることを目的とした、全 4 日間の集中実習講座を実施した。本集中実習講座は、昨年にも行ったものであり、今回は 2 回目となった。

デザイン学履修者（予科）3 名、デザイン学履修者（本科）1 名、ユニット構成員（教員）1 名、情報学研究科所属教員 1 名の合計 6 名が受講した。

全 4 回では、毎回、フィジカルコンピューティング、3D モデリング、デジタルファブリ

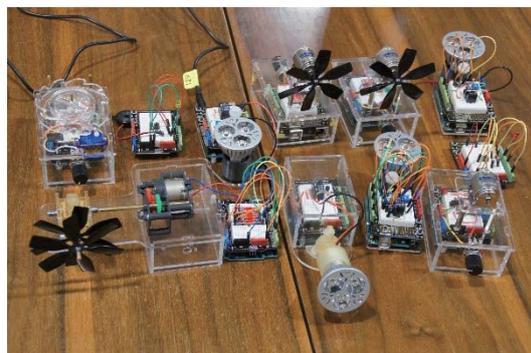
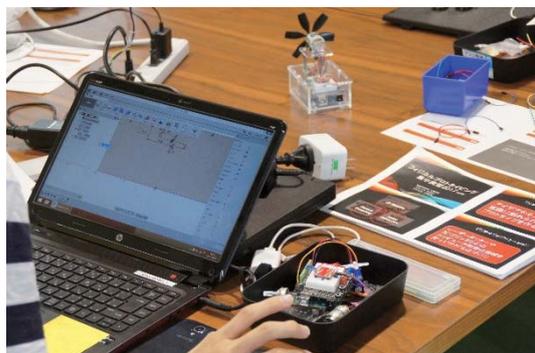


ケーションについて学ぶとともに、新しく学んだスキルを使ってプロジェクトを行った。具体的には、第1回は SOS ボックスという光と音で SOS のモールス信号を発生させる機械の作成、第2回は人の動きを感知して光る人感 LED ライトの作成、第3回は風量調整機能や首振り機能を持つ扇風機の作成、第4回はそれまでに行ったプロジェクトを自由に改造するプロジェクトを行った。

フィジカルコンピューティングでは、Arduino をマイコンとして用いて様々な電子部品を利用した回路を組み、プログラミングを用いた制御が行えるようになった。はじめは写経的に回路を組み、プログラムを書くということを行ったが、その後、可能な限り自由に改造してもらう時間を作り、自分で考えたように動かせる楽しみを感じてもらった。電子部品としては、LED、PWM 制御、タクトスイッチ、圧電スピーカ、トグルスイッチ、トランジスタを用いた電子スイッチ、リレーを用いた電子スイッチ、光センサ、可変抵抗、モータードライバを用いた DC モータの制御、サーボモータ、などができるようになった。

3D モデリングでは、Fusion360 を用いた 2D モデリングと 3D モデリングを行った。3D モデリングにおいても、可能な限り自分で考えてモデリングしてもらうことを目指した。モデリングされた筐体は、レーザーカッターや 3D プリンタなどのデジタルファブリケーション機器を用いて実際に出力して利用した。

昨年よりも、教科書的に教える内容を少なくし、自発的に活動してもらう時間を長く取るようにした。その結果、複葉扇風機、扇風機カバー、ボールジョイントなどを作成するという挑戦が見られた。



成果物



講師と参加者

2.3.3 異分野・異業種企業訪問学習会

デザインイノベーションコンソーシアムの会員企業の協力を得て、デザイン学履修者がさまざまな業界の企業を訪問し、訪問先の社員と交流させていただく企画を今年度から開始した。本企画の趣旨は、(1) デザイン学履修者が多様な業種の企業の事業活動の現場を訪問し、社員の方々と研究や業務について議論することを通じて、自らの研究を社会や産業界との関係で捉える機会とすると同時に、将来のキャリアパスを構想するために役立つこと、および(2) 訪問先の企業において、社員が現在の業務の枠を超えて異分野の最先端の研究を知ること、新たな事業活動を構想する契機としていただくこと、である。

初回はオムロン株式会社の協力を得て実施した。概要を以下に示す。

日時：2017年9月8日（金）14:00～17:30

場所：オムロン株式会社 京阪奈イノベーションセンタ

スケジュール：

14:00～14:20 会社紹介

14:20～15:20 技術紹介

15:20～15:50 所内見学

15:50～16:00 休憩、ポスターセッション準備

16:00～16:40 デザイン学履修者によるポスターセッション

16:40～16:45 クロージング（技術・知財本部 企画室長 勅使川原 正樹 氏）

企画担当者：

京都大学デザイン学ユニット 特定准教授 十河 卓司

オムロン（株）技術・知財本部 主査 今井 紘 氏（デザインイノベーション拠点フェロー）

参加者：

情報学1名（L2）、機械工学4名（L1、L3、L4×2名）、心理学3名（L4、L5×2名）、
引率教員（デザイン学）1名、計9名



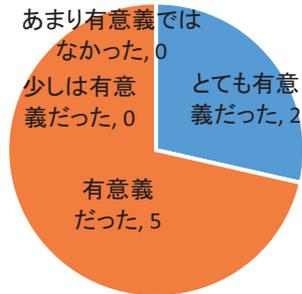
オープニングの挨拶



ポスターセッション

アンケート結果：

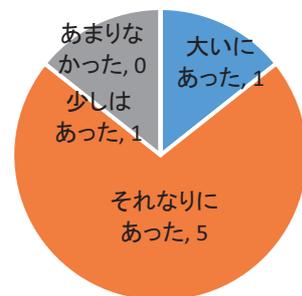
(1) 今回の内容は有意義でしたか？



どんなところがそう感じましたか？

- 動機づけや学習など私の専門分野を活かした技術開発が行われているところ。
- 企業での研究の進め方が、想像とは少し異なることが知れた。
- 企業内の研究環境の一部を実際に見ることができた。
- 通常の学会等とは異なる観点で自身の研究に対してコメントをいただいた。

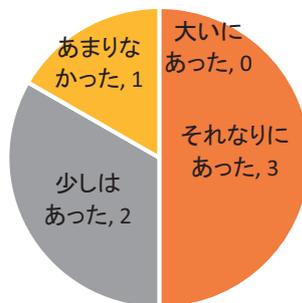
(2) 自身の今後の研究の参考になるところはありましたか？



どんなところがそう感じましたか？

- 異業種の人に研究発表をすることで、自らの研究の社会的意義を再考することができた。
- 自分の知見をどう応用していくかを考える良い機会となった。
- 自分にはない視点でオムロンさんが研究に取り組んでいたため、多様性を受け入れる必要があると感じたところ。
- 自身の研究について、課題設定へのニーズや妥当性についてコメントをいただいたこと。

(3) 自身の今後のキャリアパスの参考になるところはありましたか？



どんなところがそう感じましたか？

- 企業の方々が私の専門分野の知見を踏まえて技術開発をされているところ。
- 自分の専門が活かせる一般企業もあるということが肌で感じられた。
- 大学で得た研究計画・遂行の経験が、企業の研究でも活かせる予感が感じられたこと。
- 人脈づくりという意味で。

2.3.4 USA 訪問学習会

2017年9月20日から28日までの日程で、昨年度に引き続き2回目となる米国訪問学習会を実施した。

参加者の選抜にあたっては、参加学生それぞれに自分自身の研究成果がある程度形になっていることを条件とした。結果として、L3が2名、L4、L5各1名を選抜した。学生の所属は、情報学1名、機械工学2名、建築学1名であった。

参加者には、各自の簡単な経歴と、現在の研究の興味を短文として記してもらった。訪問に先立ち、これらをプロフィールとして先方に配布した。参加学生が自らの研究内容について分野や言葉を越えた環境で説明を行う際には、「pechakucha style」と呼ばれる、20～40秒程度の一定時間で自動再生される10～20枚のスライドを使って説明するというプレゼンテーションのスタイルをとった。この発表スタイルの準備として、出発までに2回合同発表練習会の機会を設け、その都度、スライドのレビューや説明の仕方の指導を行った。訪問先から情報をもらうだけではなく、訪問する側からも対等に、研究の興味やデザイン学に対する思いを伝え、議論を行う、という目的は達成できたように思う。

第二回米国訪問学習会 訪問先と旅程（7泊9日）	
Day 1 (9/20):	(移動) 大阪 (伊丹) → 成田 → デンバー
Day 2,3 (9/21-22):	ATLAS Institute (University of Colorado, Boulder) 訪問 Mark Gross, Director, Ellen Do, Professor,
Day 4 (9/23):	(移動) デンバー → サンフランシスコ
Day 5 (9/24):	The Exploratorium Museum 訪問 Ryoko Matsumoto, Tinkering Studio Curator
Day 6 (9/25):	(移動) サンフランシスコ → サンディエゴ
Day 7 (9/26):	The Design Lab (University of California, San Diego) 訪問 Scott Klemmer, Co-founder, Steven Dow, Assoc. Professor, Donald Norman, Co-founder
Day 8 (9/27):	(移動) サンディエゴ → 大阪 (関空) (9/28)

コロラド大学においては、ATLAS Institute を中心に、Mark Gross 所長らから、学際融合研究のカリキュラムや研究プロジェクトについての紹介を受けた。デザイン学からの参加学生4名は、ATLAS Institute の Graduate Seminar (大学院生が参加する週1回のセミナー) において、自らの研究について、pechakucha style でプレゼンテーションを行う機会を設けていただいた。それぞれの発表の後、先方の学生や教員らと活発な質疑が行われた。また、参加学生の興味に応じて、ATLAS Institute や機械工学科に属する研究者や博士課程学生らから、ドローンロボット研究や、テキスタイルや織物を用いたインタラクション技術研究、開発途上国での育児支援研究、大腸内を自律的にクロールする医工連携のロボット研究等の、紹介やデモを受けた。昨年度と同様に、工学部・工学科を中心として、大規模な産学連携プロジェクトを実施するファブリケーション工房スペース Idea Forge の見学も行った。2日目には、先方の教授や学生とデザイン学の参加者として円卓会議スタイルで、大学院におけるデザイン学教育についてのディスカッションを行った。

また、Gross 先生に手配いただき、Boulder 市に本社工場を置き Makers ムーブメントを先導する、フィジカルコンピューティングパーツを製造、販売する Spark Fun の見学をさせて

いただいた。オープンハードウェアを文化とする同社は、工場内を従業員がスケートボードで移動していたり、従業員が連れてきた犬が自由に寛いでいたり、また見学者に工場内部や社長室までオープンに案内をしてくれたり、といった、米国西海岸に代表される自由でオープンな環境を実現しており、参加学生にとっても少なからぬカルチャーショックがあったように見受けられた。

サンフランシスコでは、The Exploratorium を訪問した。Tinkering Studio 学芸員の Ryoko Matsumoto 氏にご案内いただいた。ミュージアム内に設置された展示の仕掛けを作成する工房を見せて頂いたり、また展示のデザインから制作、設置に至るまでのプロセスや課題についてご説明頂いた。ご説明の後、参加学生はミュージアム内を自由に見学した。ミュージアム見学に先立って、参加学生には、自分の研究を展示すると考えてその展示デザインをスケッチするという課題を出した。次の訪問地のサンディエゴまでの移動中に考えるように指示したが、各人、来館者の立場に立った、よく考えられた面白い展示をデザインしスケッチできたように思う。

続いて訪問したカリフォルニア大学サンディエゴ校では、The Design Lab を訪問した。Scott Klemmer 教授、Steven Dow 准教授らに、The Design Lab の説明を頂いた。こちらからはデザイン学プログラムの紹介をした後、学生4名が、それぞれ pechakucha style の研究発表を行った。ここでも、先方の学生や研究員の方から活発に議論を頂いた。残念ながら、The Design Lab ディレクタの Don Norman 氏には、当日体調不良とのことでお休みされお目にかかれなかったが、共同ディレクタの Klemmer 先生より、デザイン学の教育プログラムとしては、本学デザイン学プログラムと類似しており、数年先に行く京都大学のモデルを是非参考にさせて頂く、とのコメントを頂いた。

米国訪問学習会に参加した学生には、各自の体験や考察を、デザイン学論考に寄稿するように求めた。3名の参加者がそれぞれ、デザイン学論考 Vol.11 に論文を寄せている。米国大学におけるデザイン学と研究との関わりや、研究環境と文化、大学と市民との接点、あるいは芸術とデザインの関連など、どれも深い考察となっており、訪問学習会の経験を通して、自身の研究とデザイン学との関わりについての理解と知識創出につながっているように見受けられた。

最後に、訪問した各大学、ミュージアムの先生方、学芸員の方々には、快く訪問を受け入れてくださり、こちらの日程に合わせ、充実したプログラムを組み立ててくださった。この場を借りて深く感謝する。



コロラド大学で発表する履修者



The Exploratorium にて

3 拠点の形成

3.1 デザインイノベーション拠点の活用

京都大学デザインイノベーション拠点（以下、拠点）は、産学官連携、国際連携、大学間連携、学内連携による教育の推進を目的として、京都大学の吉田、桂、宇治キャンパスと連携先の京都市立芸術大学の中間にある京都リサーチパーク（KRP）9号館に整備された。



京都リサーチパーク 9号館外観

平成 26 年度より、フレキシブルスペース、セミナースペース、会議室（計約 300m²）を本プログラム参画部局の構成員（教職員、学生等）とデザインイノベーションコンソーシアム会員等に開放しており、本プログラムやコンソーシアムの主催する各種イベント、授業等で活発に利用されている。

平成 29 年の拠点における主な活動を下記に示す。年間の利用件数は概ね 300 件程度で、そのうち半数が大学の授業や会議、残り半数が産学のイベントや会議など産学官の活動である。最近では本プログラム以外の授業やイベント等での活用も見られる。今後は全学の共用施設として、より幅広い活用が検討される予定である。

<p>■大学関係の活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ● デザイン学科目 <ul style="list-style-type: none"> - 問題発見型／解決型学習（FBL/PBL） - オープンイノベーション実習 - フィールドインターンシップ（報告会） - 情報通信技術のデザイン（最終WS） - 戦略的コミュニケーションセミナー - 遠隔講義（デザイン方法論、アーティファクトデザイン論、組織・コミュニティデザイン論、デザイン構成、フィールド分析法） ● デザイン学イベント <ul style="list-style-type: none"> - デザインスクール in 沖縄（ファシリテーション講習） - デザインスクール in アジア ● 会議 <ul style="list-style-type: none"> - デザイン学ユニット教員会議 <p>など</p>	<p>■産学官関係の活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ● デザイン学イベント <ul style="list-style-type: none"> - デザイン学ユニット協議会、産学交流イベント - ワンコイン mixer - Fushimi Summer School ● リーディングプロジェクト <ul style="list-style-type: none"> - プロジェクト会議 - 公開イベント ● コンソーシアムイベント <ul style="list-style-type: none"> - デザインフォーラム - フェローサロン - コンソーシアム会員主催ワークショップ ● 学会研究会 <p>など</p>
---	---

3.2 デザインファブリケーション拠点の活用

デザインファブリケーション拠点は、京都大学吉田キャンパスにおける当プログラムの拠点である。機械工学科の実験工場跡地（300m²）を活用して、平成 26 年度から運用を開始している。平成 29 年度も、前年度と同様に、安定して活用された。この拠点には、以下の活動をするためのスペースが有機的に結びつくように配置されている。

- デジタルファブリケーション機器などが配置され、プロトタイピングに最適な作業環境となっているファブリケーションスタジオ
- 拠点の中央に設けられ、大小の机の組み合わせによってディスカッションやグループ

- ワークなどが自在に実施できるクリエイションスタジオ
- フローリングの大きなステージであり、講演やプレゼンテーションだけではなく、体を動かすパフォーマンスにも適したパフォーマンススタジオ
- 壁で仕切られ、中二階で外界と緩やかに遮断されたスペースもあり、集中したワークのために設えられたパフォーマンススタジオ
- 安全管理の必要な機器が設置され、安全講習を受けたもの、あるいは教員が帯同する者なら入って機器を利用することができるシールドスタジオ



ファブリケーションスタジオ

利用者に対する人的サポート体制としては、デジタルファブリケーション機器に精通する非常勤講師が 3 日/週、工作機械の安全な利用と管理に詳しい教務補佐員が隔週で常駐し、ほぼ全ての平日には拠点での活動をサポートしている。

管理・運営組織は、ユニット特定教授を拠点長として、各部局から一人ずつの教員、上述の非常勤講師と教務補佐員、ならびにユニット事務から構成され、メールやウェブによる利用予約や申請、初心者への利用ガイダンスを受け付けている。

繁忙期には、平日はほぼ毎日いずれかのスタジオに利用予約が入る。しかし、全てのスペースが貸し切られることは稀であり、ガイダンスを受けて学生証や職員証を電子錠に登録した履修者や構成員は、自由に空きスペースや機器を使うことができ、拠点に来ればデザイン学の何らかの活動に触れることができる。

予約利用のあった延日数と利用予約延人数（月毎）

月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月
延日数(日)	9	14	15	12	15	10	9	9
延人数(人)	123	157	330	341	66	149	95	182



クリエイションスタジオを使ったFBL/PBL



シールドスタジオの工作機械を使った試作

4 イベント

4.1 サマーデザインスクール 2017

日程：2017年9月13日（水）～15日（金）

場所：京都リサーチパーク

主催：京都大学デザイン学大学院連携プログラム／京都大学大学院情報学研究科／京都大学経営管理大学院／デザインイノベーションコンソーシアム

共催：京都大学大学院工学研究科／京都大学大学院教育学研究科／京都大学学術情報メディアセンター／京都市立芸術大学 美術学部・美術研究科／京都工芸繊維大学 工芸科学研究科

サマーデザインスクールは、京都大学の枠を越え、産業界、自治体、そして国内外の他大学から様々な分野の専門家や学生が集う3日間の集中ワークショップである。2011年の開始以来成長を続けてきたイベントであるが、今回は将来の持続性を見据えて全面的に見直しを行った。費用と運営、そしてイベント趣旨の観点から、適正規模と実施内容およびプロセスを設計し直した上で準備を開始した。

主に主共催団体からワークショップのテーマを募り、産学官から持ち込まれた23のテーマについて参加者募集を行った（表4-2）。学内での浸透を深めるため京大生の先行受付を実施したところ、期間中に全体の半数近い席が埋まり、学内での関心の高まりを伺わせた。最終的には他大学や企業等からの参加者も含め全テーマが満席となる盛況ぶりであった。ワークショップの実施スケジュールは例年と変わらず、1日目・2日目はテーマ毎に異なるプログラムに取り組んだ。全体でのオープニング後さっそくフィールドワークに飛び出すグループ、レクチャーやディスカッションを通してじっくりアイデアをまとめるグループ、プロトタイピングで実際にものを作るグループなど、多様なアプローチでそれぞれの課題解決に取り組んだ。最終日にはふたたび全員集合し、各テーマが3日間の成果をまとめたポスター発表を行い、互いにアイデアを披露し議論を交わした。クロージング後の交流会にも多数の参加者があり、日常では関わる機会のない様々なバックグラウンドを持つ参加者達との交流を楽しんでいた。

今回で7回目を迎え、京都大学サマーデザインスクールは一大イベントへと成長を遂げそのスタイルを確立させた。今後どのような進化を見せるのか期待される場所である。

表 4-1 参加者・テーマ実施者・見学者数とその内訳

	参加者		テーマ実施者		見学者
大学職員	1 大学	6 名	5 大学	25 名	
	うち京大	6 名		18 名	
学生	13 大学	93 名	3 大学	6 名	
	うち京大	65 名		4 名	
企業	9 社	22 名	15 社	42 名	
行政	1 機関	1 名	1 機関	2 名	
その他	1 組織	2 名	7 組織	7 名	
合計		124 名		82 名	69 名

表 4-2 実施テーマ一覧

1. 展示物のないミュージアムのデザイン —ノーベル賞級の難解な基礎理論を展示する手法のメタデザイン—	12. 「社会感情的能力」を高めて「実践に生かす」仕掛け作り
2. 未来の人生最後の1年をデザインする	13. 「見上げたくなる空」をデザインする
3. D.E.Y.: エレクトロニクス製品を個人がつくる未来のサービス	14. Communicate Your Culture beyond Untranslatable Words
4. 『駅の雨漏り』対策のイノベーション	15. 京都でのユニバーサルデザインを考える
5. Rendezvous gardens ～見る庭園から遊ぶ庭園へ～	16. 「学ぶ」と「働く」をつなぐ場のデザイン
6. 不便の効用を活用させる無人島	17. “自然に学ぶものづくり”から、「暮らしの快適」をデザインする
7. データによる京都発見! ? ～地域課題の解決と新たなサービス・ビジネス創出を目指して～	18. 「KYOTO 3017」～これから1000年残したい京都の姿～
8. 未来の京都ステイ	19. “生まれ変わり”で街を改革する
9. センシング技術による母子健康の未来	20. 落下するモノをデザインする
10. DESIGN AND BEAUTY	21. 法則を学ぶ: 黄金比や優れたおもちゃのデザインを与えるか?
11. アイスブレイク技法としての自己開示のデザイン	22. 京都の2050年 食のライフスタイルを考える
	23. 未来の高齢者の「楽しい!」をデザインする



オープニング



ディスカッション



アイディエーション



プロトタイピング



ポスター作成



ポスター発表

4.2 スプリングデザインスクール 2018

デザイン学大学院連携プログラムの公式イベントとして、本プログラムの実施内容の世界的発信を目的に、2018年3月11日～16日の開催期間中に、以下の4つのイベントを開催した。

まず、「京都観光データウォーク」(実行委員長：情報学研究科 佐藤彰洋特定准教授)では、国連世界観光機関 (UNWTO) が提唱する持続可能な観光のための指標開発方法論の一部を利用し、京都をフィールドとして持続可能な観光を実現するために必要となる指標の特定作業を3日間のワークショップ形式で行った。

「第6回国際デザインシンポジウム」(実行委員長：デザイン学ユニット 十河特定准教授)では、シンポジウムテーマとして“Skills for Designing Future Society”(未来社会のデザインのためのスキル)が設定され、本プログラムのデザイン学教育について、教員の視点からはどのようなスキルの涵養を目指したのか、また履修者の視点からは本プログラムが提供する機会をどのように活用したのか等についてさまざまな意見が交わされた。

上記国際シンポジウムの直後には、昨年に引き続き「第2回デザイン学学生研究交流会」(実行委員長：デザイン学ユニット 北特定講師)を開催した。さまざまな研究科や専攻に所属する本プログラムの履修者が互いに研究を紹介しあうポスター発表会であり、相互に研究交流を図るとともに、国際シンポジウムに出席する招聘者や教員からフィードバックを得ることを目的として開催された。

「第6回産学連携型認知デザインワークショップ」(実行委員長：教育学研究科 楠見教授)では、変化する環境の中で活躍できる人材を育むために、産業組織心理学の知見を踏まえながら、仕事での経験を効果的に学習や成長につなげる仕組みを考える半日のワークショップを実施した。

4.2.1 国際デザインシンポジウム

2018年3月14日の午後に、第6回国際デザインシンポジウムを開催した。今回のテーマは“Skills for Designing Future Society”(未来社会のデザインのためのスキル)である。本プログラムから初めての修了生を送り出すタイミングと重なることもあり、今回はプログラム履修者に焦点を当て、学生が集まるコンパクトなシンポジウムとすることを目標とした。その一環として履修者から5名の学生委員を募集し、学生セッションの企画を依頼した。招待講演にはクランフィールド大学より富山教授を迎えた。デザイン学ユニット特命教授として本プログラムの関連イベントで講演いただくのはこれが初めての機会となった。また、同日午前中には第5回デザイン学ユニット協議会を開催し、その出席者にも本シンポジウムに合流いただけるスケジュールとした。

シンポジウム当日は、冒頭の十河実行委員長からのオープニングの挨拶の後、富山教授の招待講演があった。講演では、インパクトの大きな研究をするには、分析、要素、具体といった視点だけでなく、統合(synthesis)、システム、抽象といった視点も持つことが大切である、社会や顧客の要求を正しく理解した上で研究テーマを設定することが大切である、といった話が、具体的な事例の紹介とともにあった。

続いて京都大学デザイン学ユニットに所属する若手教員によるパネルディスカッションが行われた。セッションのテーマはシンポジウムのテーマと同じ“Skills for Designing Future

Society” とされ、本プログラムコーディネータの石田教授が進行役を務めた。まず北特定講師から、過去に開催された京都大学サマーデザインスクールの分析結果が紹介された。ワークショップのオーガナイザが知識提供や議論参加などを行うよりも、適切なデザイン手法の提示などにより参加者支援を行う方が、良い成果につながりやすいといった解釈が提示された。続いて村上特定准教授から、本プログラムの実習として過去に実施されたインドネシアでのフィールドインターンシップの紹介があった。こうしたデザイン活動を遠隔地のフィールドで実施する際に留意すべきこととして、アイデアの実装は現地の組織が行うため、現地での社会受容性ととも実現可能性が重要、長期間のプロジェクトとなる場合には現地との継続的なコミュニケーションが重要、といったノウハウが提示された。最後に十河特定准教授から、同じく本プログラムの実習として過去に実施されたオープンイノベーション実習の説明があった。問題の解決策を異分野協働でデザインするには、多様な専門性を背景とする専門家の議論を指揮できるスキルが重要であるが、受講者がその難しさを初めて経験し、必要性を痛感する場となっていることがアンケート結果から読み取れるといったことが紹介された。

次の学生企画セッションでは、“Real voices of KDnS students: How do you utilize your experiences at Design School for your researches/ activities?” と題して、履修者が本プログラムで提供される科目、イベント等の機会をどのように活用したのかについて、日本人3名と留学生3名の計6名の履修者から発表があり、「デザインスクール in 沖縄／香港などでの経験から、自らの研究でもユーザ観察を行うようになった」といった履修者自身の経験が語られた。発表に対して会場からも活発な質問があり、履修者からは「他の研究分野のデザイン手法を自らの研究に取り入れ、研究が発展するといった可能性もあり、他の学生にも履修を勧めたい」「デザイン学は、多様な専門のメンバーで議論し第3のアイデアが出てくるところが素晴らしい」といった声が挙がっていた。なお、本セッションの企画、進行は発表者とは別の5名の履修者が中心となり行った。



招待講演



学生企画セッション

以下にプログラムの詳細を示す。

12:30-13:00 Registration

13:00-13:05 Opening Remarks

13:05-14:15 Invited Talk

Skills for Design and Engineering Researchers: Capturing Needs and Requirements of Customer's and the Society

Tetsuo Tomiyama (Professor, Cranfield University / Adjunct Professor, Kyoto University Design School)

14:15-15:15 Panel Discussion: Skills for Designing Future Society

Session Chair: Toru Ishida (Professor, Kyoto University / Program Coordinator, Collaborative Graduate Program in Design, Kyoto University)

Panelists:

Exploring Meta Design by Analyzing the Summer Design School

Yusuke Kita (Lecturer, Unit of Design, Kyoto University)

Field Internship: Interdisciplinary Collaboration in Fields

Yohei Murakami (Associate Professor, Unit of Design, Kyoto University)

Open Innovation Practice: Developing skills for organizing multidisciplinary collaboration

Takushi Sogo (Associate Professor, Unit of Design, Kyoto University)

15:15-15:30 Coffee Break

15:30-17:00 Design School Student Session

Real voices of KDnS students: How do you utilize your experiences at Design School for your researches/activities?

Session Chair: Ryunosuke Oka (L5), Graduate School of Education

Speakers:

Victoria Abou Khalil (L3), Graduate School of Informatics

Samar El Helou (L4), Graduate School of Informatics

Luciano Henrique de Oliveira Santos (L4), Graduate School of Informatics

Tatsuro Terakawa (L4), Graduate School of Engineering

Kozo Furuta (L5), Graduate School of Engineering

Nozomu Kutomi (L5), Graduate School of Informatics

17:10-18:30 Collocated event: Students Research Exchange Workshop in Design

18:30-20:00 Banquet

4.2.2 デザイン学学生交流会

国際デザインシンポジウムの一部として、「デザイン学学生交流会」が行なわれた。それぞれ研究分野が異なるデザイン学履修者が互いの研究を紹介しあい、相互に研究交流を図るとともに、教員からデザイン学の観点でフィードバックを行い、異なる分野の研究をデザイン学に誘うことを目的としている。具体的には3月14日17:10~18:30に、京都大学時計台国際交流ホールにて、ポスターセッションのかたちで行なわれた。学年別、分野別の参加者数を下表に掲載する。

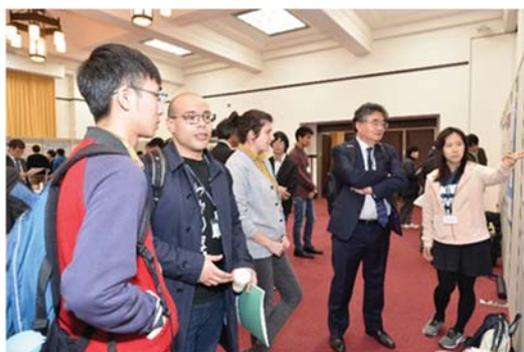
表：学年別の参加者数

学年	在籍数	参加者数
L5	15名	5名
L4	14名	7名
L3	13名	9名
L2	6名	3名
L1	16名	4名

表：分野別の参加者数

分野	在籍数	参加者数
情報学	30名	13名
機械工学	11名	6名
建築学	5名	3名
心理学	15名	5名
経営学	4名	1名

一期生にあたるL5学生から、履修開始1年の節目を迎えようとしているL1学生まで、合計27件の発表があり、ポスターを前に活発な議論が交わされた。時間を半分にして奇数・偶数のコアタイム制としたが、納まりきれない議論はその後のバンケットまで続いていた。全学年の履修者が一堂に会し、自らの研究を語り合う貴重な機会となった。



4.2.3 京都観光データウォーク

京都大学デザイン学大学院連携プログラムの年間スケジュールとして毎年実施されている京都大学スプリングデザインスクール 2018 の一部として京都大学デザイン学大学院連携プログラム主催、京都大学大学院情報学研究科共催として「京都観光データウォーク 2018」を 2018 年 3 月 11 日（日）～2018 年 3 月 13 日（火）の 3 日間にわたり実施した。国連世界観光機関駐日事務所、総務省統計局、国土交通省観光庁、京都市、京都府（京都市内で京都市が後援するデータと統計に関するイベントについては京都市と京都府とが協調して後援を行っている）の後援でワークショップを開催した。

3 日間の共同作業の参加者総数 21 名（内京都大学デザイン学に携わる教員 3 名を含む）、外部講演者 7 名（3 月 11 日 3 名、3 月 13 日 4 名）、3 月 13 日（火）午後の一般聴講者 32 名からなる総勢 60 名の参加により 3 日間の参加型デザインプロセスを用いた共同作業ならびに成果報告会（基調講演、成果発表会、パネル討論会）を実施した。

国連世界観光機関（UNWTO）が提唱する持続可能な観光のための指標開発方法論の 3 フェーズからなる 12 ステップの方法論の一部を利用し、京都をフィールドとして持続可能な観光を実現するために必要となる指標の特定作業を 3 日間にわたり実施した。

3 月 11 日（日）は今回のワークショップの実施内容についての説明およびグループ分けと、グループごとのファシリテータの紹介を行い、事前に課してあった京都およびそれ以外の場所における観光資源とリスクに関する宿題をグループごとに共有することで、相互理解を深めた。その後、専門知識の提供を、牧澤憲氏（京都市産業観光局 観光 MICE 推進室 課長補佐）、（題目：京都市観光の現状と取組）、井上景介氏（京都市総合企画局 情報化推進室統計解析担当 解析推進係長）（題目：京都市におけるオープンデータの取組）、吉田 順子氏（国連世界観光機関駐日事務所）（題目：国連世界観光機関（UNWTO）の役割とその活動について）より受けた。これらの専門知識を基に京都における持続可能な観光を実現するために必要となるエリアの特定と、持続可能な観光を実現するために利用できる資源ならびにそのリスクについて議論した。資源とリスクの観点から持続可能な観光を実現するために必要となる長期ビジョンの特定を行った。

3 月 12 日（月）はデータ分析と実地調査をそれぞれのグループで行った。午前中はデータ分析ツールおよび京都市の基礎データとして統計情報可視化システム MESHSTATS、CharIP naVi 並びに、京都市オープンデータポータルを用いて、持続可能な観光を考える上で必要となる資源とリスクについて京都市の状況を把握するためにデータを用いた。さらに、グループごとに調査区域を特定し、午後からその場所に実際にでかけることにより参与調査を通じた気づきをまとめた。

3 月 13 日（火）には、これら調査により得られた基礎データと参与調査により得られた知見を元に資料作成を行い、3 日間の共同作業により得られた知見を基に、京都において持続可能な観光を実現するための長期ビジョンと、これを実現するために必要となる指標の候補およびそのデータ源について発表した。この発表会に先立ち、谷道正太郎氏（独立行政法人統計センター 課長代理）（題目：統計データの利活用推進に向けて）、Ms. Ariana Luquin Sanchez（国連世界観光機関アジア太平洋センター 課長）（題目：2017 International Year of Sustainable Tourism for Development: Overview and Legacy）、瓦林康人氏（国土交通省観光庁 審議官）（題目：2017 年国連開発のための持続可能な観光国際年における我が国の取り組み、そして未来へ）、Mr. Volker Genetzky（Deputy Head of Division “Development of digital

technologies” , German Federal Ministry for Economic Affairs and Energy) (題目 : Digital Technologies - Smart Data) による基調講演を行った。なお、国土交通省観光庁瓦林審議官はインフルエンザのため急遽欠席のため、代理として中條一夫氏 (国土交通省観光庁 参事官) が基調講演を行った。

その後のパネル討論では、「2017年開発のための持続可能な観光国際年で我々が学んだこと、得られたもの、そして将来へ向かってできる活動と、それを支えるデータと統計の役割」をパネル討論のテーマとし、パネリストに谷道正太郎氏 (独立行政法人統計センター 課長代理)、Ms. Ariana Luquin Sanchez (国連世界観光機関アジア太平洋センター 課長)、瓦林康人氏 (国土交通省観光庁 審議官)、Mr. Volker Genetzky (Deputy Head of Division, German Federal Ministry for Economic Affairs and Energy)、笠原 秀一氏 (京都大学学術情報メディアセンター 特定講師)、司会 : 佐藤 彰洋氏 (京都大学大学院情報学研究科 特定准教授) により討論を行った。なお、国土交通省観光庁瓦林康人審議官がインフルエンザで急遽欠席のため、代理として国土交通省観光庁岡田良子氏が代理でパネル討論会に登壇した。討論の内容としては以下のようなものが挙げられた。

- (1) データが人と人、組織と組織をつなぐ役割を有すること、
- (2) データが地域の魅力を見出す方法論となり得ること、
- (3) 地域開発において観光は有効なツールであるが地域の魅力は地域の人々にとってはむしろ当たり前の事にこそ見つけられること、
- (4) 観光は人と人、地域と地域を接続することができること、
- (5) ドイツにおいて中小企業を対象にスマートデータに関する知識移転を行っているスマートデータフォーラムの活動モデルが地域開発において参考となり得ること、

などが挙げられた。2017年国連持続可能な観光国際年の活動から得られた知見が、将来における観光分野と地域開発の基本戦略として、観光資源の発掘、並びに資源開発、プロモーションを通じた交流人口の増加にデータ利活用の活動が有効であることが確認できた。



3月11日のグループワークの様子



3月13日午後のパネル討論会の様子

4.2.4 第6回 産学協同型認知デザインワークショップ

仕事を通じた成長を思い描こう：人材育成のためのデザイン

日時：2018年3月16日（金）14:00～17:00

場所：京都大学 百周年時計台記念館 会議室 III

実行委員会：今城 志保氏（リクルートマネジメントソリューションズ 組織行動研究所）

楠見 孝、野崎 優樹（京都大学大学院教育学研究科）

仕事は私たちの人生の中で大きな位置を占める要素の1つである。今回の講座では、変化する環境の中で活躍できる人材を育むために、仕事での経験を効果的に学習や成長につなげる仕組みを考えるワークショップを実施した。参加者は、デザイン学本科生2名、デザイン学予科生2名、学内参加者10名の計14名だった。

まず、参加者同士で、自分が実際に体験した「経験からの学び」を共有するとともに、様々な経験からの学びを分類するための枠組みを考えるグループワークを行った。その後、リクルートマネジメントソリューションズ 組織行動研究所主幹研究員の今城志保氏より、「新入社員の組織社会化」や「ホワイトカラーの仕事の持論」など、これまで今城氏自身が行ってきた、産業・組織心理学の最新の研究知見をご紹介いただいた。そして、ここまでの内容を踏まえながら、経験からの学びを促進するための教育プログラムを考えるワークショップを行った。

参加者を対象とした事後アンケートでは、「今回のワークショップを通じて、組織社会化や仕事での学びといった大きなテーマに対して産業・組織心理学がどのようにアプローチしているのか、その一面を知ることができた」、「大人の経験学習のプロセスに思いをはせるのは新鮮だった」といった感想が見られ、産業・組織心理学の知見を踏まえながら、これからの仕事での経験を成長に結びつける在り方を思い描く充実したワークショップとなった。



4.3 デザインビジョンズ

デザインビジョンズでは、デザイン学に広く関係する学術的な講演を運営している。デザイン学に関する共通の基盤となるような講演に加え、各領域の専門性に特化した講演をバランスよく組み合わせて実施している。このような機会を通して、学生が最先端の研究に触れることができ、研究の姿勢、方法論、学問的背景などを理解し、自らの研究を構想する助けとなる。特に自分と異なる専門分野の講演に触れることで、別の領域の研究のやり方や課題の設定の仕方に新鮮さを覚え、得るものが大きい。同時に、多様な視座からデザイン学に関する議論を集め、デザイン学という学問を確立することに寄与している。この活動を継続していくと共に、さらに広く学生を巻き込むことができるように努力していきたい。

Designing Homework to Achieve Better Learning Outcomes in Compulsory Education －義務教育で学習成果を上げる宿題のデザイン－

日時：2017年6月30日（金）16:30～18:00

場所：京都大学教育学研究科本館2階 216号室

講師：Natalia Suárez Fernández 氏 (Assistant Professor,
The University of Oviedo, Spain)

企画：Emmanuel Manalo (京都大学教育学研究科 教授)

At the Graduate School of Education, on June 30, 2017, we invited Dr Natalia Suárez Fernández to give a lecture on her research findings about homework. Dr Suárez is an Assitant Professor at the Department of Psychology of the University of Oviedo in Spain. For over 5 years, she has been working with a multinational research team on investigating various aspects of homework assignments and the promotion of self-regulated learning in compulsory education contexts. Based on some of their key research findings, the lecture she presented identified some crucial teacher- and parent-factors that could make homework more facilitative of academic achievement.

Dr Suárez lecture was held from 17:00-18:00. Prior to her lecture, however, she held an informal discussion session with graduate students (16:30-17:00), covering a wide range of issues including the similarities and differences in education systems in Spain, Japan, and a few other countries. The graduate students who participated in this session were also able to explain some of the reasons why they were interested in the topic of homework and in finding out more about Dr Suárez' research findings.

Dr Suárez' lecture went very well. The key conclusions she drew at the end were as follows:

- ・ Doing homework is beneficial for academic achievement.
- ・ Quality – rather than quantity – of time spent on homework is what matters.
- ・ Time management of homework is one of the most important variables that link to academic achievement.
- ・ Teachers must provide feedback if they assign homework.
- ・ Parental involvement is beneficial depending on execution.



講義の様子

Tasteful disturbance

日時：2017年7月18日（火）16:30～
場所：京都大学総合研究9号館 N7 講義室
講師：Hernan Diaz Alonso 氏
（南カリフォルニア建築大学 学長）

企画：竹山 聖（京都大学工学研究科 教授）

建築学科ではこの講演会の前週に設計演習関係の講評会が全て終了し、学生たちが不在であったため、学部学生の参加は少数だったが、他大学や海外の建築教育に関心のある研究者、また最新の建築動向に敏感な建築家などが京都のみならず遠方からも集まり、桂キャンパスからも多くの大学院生が駆けつけ、熱のこもった雰囲気の中での講演と質疑応答が行われた。

同氏によるコンピュータと3Dプリンターを駆使した造形は、近未来的でありながらノスタルジックであり、アルゴリズムックでありながら具象的でもあって、フランク・ゲーリーなどに代表されるここ30年ほどの模型とコンピュータを駆使した造形、コンピュータエイディド・バロックと対照するなら、いわばコンピュータエイディド・ゴシックとも称するべき、不可思議で時にグロテスクとも見える意味性に溢れた造形であって、それらが多くの画像とともに紹介された。

その一種幻想的な造形は、19世紀末ウィーンの官能的表現をも想起させるもので、かつて近代建築が規範とした機械的抽象的造形から完全に脱し、生命的具象的造形の可能性が展開される。コンピュータと3Dプリンターという道具の革新を通じた陰影と物語性を持った秘めやかな造形は、大いに議論的となった。



講義を行う Hernan Diaz Alonso 氏

Publishing in Top-Tier Journals in Organizational Behavior: A Junior Scholar's Perspective

日時：2017年10月25日（水）13:00～14:30
場所：京都大学総合研究2号館3F ケーススタディ演習室
講師：YAM, Kai Chi 氏 (Assistant Professor, National University of Singapore)

主催者：Yutaka Yamauchi (Associate Professor, Graduate School of Management, Kyoto University)

Professor Yam shared his thoughts based on the experience of publishing a number of papers in top-tier journals in Organizational Behavior. He went over various important issues in writing good quality papers publishable in top-tier outlets. He limited his presentation in quantitative papers and in organizational behavior.



Assistant Professor YAM, Kai Chi

First, he outlined six different ways to achieve the level of interestingness and novelty, e.g., borrowing ideas from other disciplines such as psychology and focusing on counterintuitive and paradoxical ideas such as dark side of good stuff. He gave some examples from his own publications.

Second, he discussed how to write, particularly the introduction. He gave the concrete guideline for four-paragraph structure. Third, he suggested a few criteria for good theories, e.g., the size of the model. Fourth, to achieve the empirical rigor, he suggested going to all the articles of the top five journals in the field for the last three years and understand the criteria.

More than 30 students and faculty members participated from various departments. A lot of questions raised by the audience made the seminar highly interactive and engaging.

Re-designing people's beliefs and attitudes about weight gain and obesity: Implications for anti-obesity campaigns

日時：2017年11月1日（水）17:00～19:00

場所：京都大学教育学部本館 2F Room 216

講師：Dr. Rachel Dryer (Senior Lecturer, School of Psychology, Charles Sturt University, Australia)

主催者：Emmanuel Manalo (Professor, Graduate School of Education, Kyoto University)

On Wednesday Nov 1, 2017, Dr. Rachel Dryer gave a lecture on her recent research findings about people's beliefs and attitudes concerning eating disorders, weight gain, and obesity. Dr. Dryer is a Senior Lecturer in the School of Psychology of Charles Sturt University in Australia. Her main area of research is health psychology, and she has worked not only with other academic researchers, but also with medical practitioners, clinicians, and community health professionals.



Dr. Rachel Dryer

In her lecture, Dr. Dryer stressed that obesity is now recognized as a significant global problem by many international health organizations such as the World Health Organization (WHO). It was estimated in 2014 that about 40% of all people in the world now meet the criteria for being overweight or obese. Educational campaigns to combat this problem are therefore important and many governments worldwide invest in such campaigns. However, one of Dr. Dryer's key research findings indicates that anti-obesity advertisements that are perceived to be stigmatizing of overweight individuals are less effective in motivating people to adopt healthier eating and other lifestyle behaviors. This finding suggests that advertisements that are less negative in their portrayal of people who are overweight may be more effective in instigating the desired change in people. Such findings are important to consider in the re-design of educational campaigns for the promotion of more healthy lifestyles to reduce the occurrence of problems like obesity.

Dr Dryer's lecture went very well, and she had discussion with some members of the audience after the lecture about relevance and applications of her findings to the Japanese context.

「パフォーマンスティヴィティ」について考える

日時：2017年11月20日（月）10:00～12:30

場所：京都大学総合研究2号館3階東側 マルチメディア講義室

講演1：「装置と配置：フーコーとドゥルーズ、そしてカロン」

須田 文明氏（農林水産省 農林水産政策研究所 国際領域上席主任研究員）

講演2：「経済学の行為遂行性という問い：M. カロンを中心に」

山本 泰三氏（四天王寺大学ほか 非常勤講師）

講演3：「行為遂行性の事例：理論、テキスト、配置の相互関係」

北川 亘太氏（関西大学 助教）

企画：山内 裕（京都大学経営管理大学院 准教授）

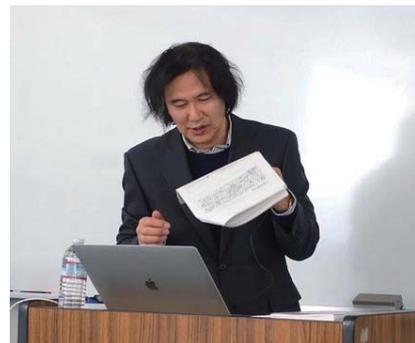
まず須田先生に、遂行性概念の中核をなす「配置（agencements）」の概念を、フーコーの「装置（dispositif）」との違いを際立たせながら解説していただいた。もともと装置概念は異種混濁的な要素が同一の運動の中で捉えられるため、構造、制度、場などの概念に依拠する必要がないという利点があったが、一方で人々をコントロールし方向付けるということを機能としており、人と非-人を対照的に扱うことが難しい。

特に、ドゥルーズが主体化、言明行為、諸力の線が配置の変化によって絡み合うという意味で、装置ではなく配置概念を採用し、Callonがこの配置概念（agencement）における行為遂行性（agency）の強調を重視して採用した。Device やアッセンブラージュのような訳語は、このような概念の差異をわかりにくくしてしまう。その他、アクターネットワークにおける the social の位置について、事前には共通世界は存在せず、遂行的にあらわれる暫定的な結果であるということも議論された。遂行性やアクターネットワークに対する批判も交えて、わかりやすく議論していただいた。

山本先生に、ご自身が須田先生と翻訳された『経済学の行為遂行性』を中心に、Callonらの議論する経済の遂行性について解説いただいた。まず経済学が一つの科学の名のもとに主体としての経済学者が客体としての経済を観察し記述するという枠組みの問題点を指摘し、遂行性概念の経緯をAustinの言語行為論、Butlerのジェンダー研究、科学技術社会論における介入概念などを辿りながら解説していただいた。

最後に北川先生には、ある企業での事例研究における研究者と研究対象者の間の遂行性について、発表いただいた。例えば、対話概念をサービス・ドミナント・ロジックから取り出し、研究者が参加する形でクライアントの商品開発のコンサルテーションを「対話」として概念化し、この概念化の結果としての組織の変容を記述するという、研究と現場が入り組んだ遂行性を議論した。

社会をデザインしていこうとするデザイン学において遂行性は避けることのできないキーワードであるが、今回は理論的背景、具体的な経済学の遂行性概念、そして事例研究という幅広い視点で議論することができ、理解を深めるいい機会となった。



講義を行う須田 文明氏

“Judgement and Strategy”
“Videography of Alternative Entrepreneurship”

日時：2017年3月22日（木）10:00～12:00

場所：京都大学総合研究2号館3F ケーススタディ演習室

講演1：“Judgement and Strategy”, Robin Holt 氏 (Copenhagen Business School, Professor)

We had stimulating discussions with the first speaker, Professor Robin Holt. He presented the book he had just published, “Judgment and Strategy,” Oxford University Press. Through reviewing a vast literature on strategy, Prof Holt defines strategy as “self presentation to itself and others.” He walked us through the three groups of strategy literature. The first focuses on knowledge and instrumentality, including outward looking competitive analysis (Porter) and inward looking resource based view (Barney). The problem with this view is that things do not work as planned and the model necessarily contains the residual variable. The second group emphasizes “visions” as advanced by Mintzberg. Yet, this view loses the critical and cynical stance towards its own strategy and leaves critical questions unexamined as to why we need growth and why we need to be the number one, for instance. The third group is characterized as “will,” ranging from military type strategy of acquiring as many weapons as possible and the recent notion of agility, which sort of gives up strategy. This last group seems to give up too much and loses the critical thinking. Prof Holt proposes the concept of “judgment” covering the broad literature including Immanuel Kant to emphasize the nuanced stance of direct involvement in the situation but critical stance toward the situation. This discussion helps start thinking of strategy in new ways and overcome the above problems.



講義を行う Robin Holt 氏

講演2：“Videography of Alternative Entrepreneurship”,

Annika Skoglund 氏 (Uppsala University, Associate Professor)

Professor Annika Skoglund presented her ethnographic and videographic research on alternative entrepreneurship. Alternative entrepreneurship is an umbrella concept covering various alternative modes of entrepreneurship such as social, eco, and feminism entrepreneurship. Video was proposed as a useful and appropriate methodology to capture the experience of these alternative entrepreneurship, which is often processual and messy. She presented one part of the videography she put together from her research on Prezi, a Hungarian company that tries to change the ways people in Hungary and in the world to communicate themselves.



講義を行う Annika Skoglund 氏

The first seminar was instrumental in thinking about how to go about designing social activities in a critical manner. The second pushed us to think of both alternative mode of design and research methodology for studying it.

4.4 各種イベント

Rekindling Your Creative Confidence through Design Thinking

日時：2017年4月8日（土）14:45～16:45

場所：京都大学デザインファブリケーション拠点

ファシリテータ：・Federico Lozano 氏 (Asst. Professor of Innovation, Norwegian University of Science & Technology (Norway)), CEO & Founder, Pracademy
・Jae Ho Park 氏 (President & Founder, Korean Association of Design Thinking Research, Professor Emeritus of Industrial & Organisational Psychology, Yeungnam University (South Korea))

主催者：Yutaka Yamauchi (Associate Professor, Graduate School of Management, Kyoto University)

The goal of this workshop was to give incoming students an opportunity to experience design thinking in an intensive and hand-on manner. Two professors, Federico Lozano from Norway and Jae Ho Park from South Korean, offered an excellent introduction to design thinking. 18 people participated including 3 professors.



講義の様子

In this intensive workshop, the experienced workshop facilitators Professor Federico Lozano and Professor Jae Ho Park guided participants through the design thinking practices. After an engaging icebreak, Professor Lozano began the workshop with his own story of how he learned and come to practice design thinking initially at Stanford d.school. The workshop was organized around several interesting exercises to experience design thinking. For instance, participants were asked to draw the face of a partner with whom they made a team and learned the bias that we unknowingly introduce. Participants also learned several real-world examples of design thinking such as design of a PET scanner for children.

Kyoto-Copenhagen Workshop on Design Entrepreneurship

“How can design drive entrepreneurship and innovation in companies?”

日時：2017年6月16日（金）9:30～18:00

場所：京都大学デザインファブリケーション拠点

主催者：・Yutaka Yamauchi (Graduate School of Management, Kyoto University)

- ・Daniel Hjorth 氏 (Dept. of Management, Politics and Philosophy, Copenhagen Business School)
- ・Robin Holt 氏 (Dept. of Management, Politics and Philosophy, Copenhagen Business School)

本ワークショップはヨーロッパ最大のビジネススクールであるコペンハーゲンビジネススクール（以下 CBS）と共同で企画され、当日は6名の研究者を CBS から招き開催された。「デザインアントレプレナーシップ」と題された本ワークショップでは、ビジネスの文脈においても重要なキーワードになりつつあるデザインがプロダクト、そしてサービスイノ

バージョンにもたらす影響について、日本とデンマーク両国の知見を交え、理解を深めることを目的とした。昼食を挟み、ほぼ1日かけてのプログラムは、3名のキーノートスピーチ（各1時間ずつ）と、両国の研究者が交互に各々の視座からテーマについて、各30分程度の話題提供をする形で構成された。



講義の様子

ワークショップはオーガナイザの一人である Daniel Hjorth 教授によるオープニングスピーチの後、Sigvald Harryson 氏のキーノート、「Bringing Beautiful Design to Smart Renewable Energy Solutions」で幕を開けた。自らもデザイン会社の CEO である Sigvald 氏は、再生可能エネルギーを利用した発電機に関する問題に取り組んだビジネス事例を基に、「美しいデザイン」が持つ問題解決力について話された。続いて京大経営管理大学院の梶山教授とその学生による、ファッションデザイナー川久保玲氏を対象にした、デザインの共創プロセスに関するケーススタディの報告、そして CBS の博士課程学生である Dorthe Mejlhede 氏が、組織論の観点から、デザイン思考が企業のマネジメントに与える影響に関して話題提供がなされ、どちらのセッションでも活発な質疑応答が交わされた。その後、参加者も全員で立食形式の昼食を挟んだが、その最中も日本側、コペンハーゲン側の参加者が入り乱れ活発に意見交換がなされていた。

午後は Shannon Hessel 准教授による「Teaching design entrepreneurship」から始まった。タイトルにあるように、Shannon 氏のキーノートはビジネススクールでデザインを教えることについて、CBS の現在の実践を踏まえた内容となっており、京大デザインスクールに関わる学生、教員にとって興味深いものであった。次に山内准教授が、広がり続けるデザイン概念の現代社会における位置づけに関する話題提供があり、社会の外部性と内部性の接点としてのデザインという定義に対して多くの意見が交わされた。コーヒブレイクを挟み、冒頭でオープニングスピーチをされたオーガナイザの Daniel Hjorth 教授が「Design Entrepreneurship」というタイトルで、本ワークショップのメインテーマを俯瞰するような形で、経済性と美学的思想の関係について言及された。それに引き続き、教授の博士課程の学生である Johanna Oehlmann 氏が、彼女がこれまで実施してきた北欧家具を題材にした、そのデザインの意味と価値形成プロセスに関する研究を紹介された。

最後に、京大名誉教授で建築家の岸和郎氏が[Wa 和]=Modern というテーマで自身の建築作品を数多く引き合いに出しながらキーノートスピーチをされた。岸氏の京都の文化や歴史を踏まえた建築デザインの考え方に CBS 側の参加者から多くの質問が寄せられた。

今回のワークショップではデザインとビジネスをテーマに、日本、デンマーク両国の研究者から様々な角度から議論が展開され、文化を超えて知見や価値観を交えるという当初の目的は達成されたように思える。また、オーディエンスからも終始活発な意見交換がなされ、有意義な時間となった。本ワークショップは、来たる 2017 年 9 月、同様のテーマにてデンマークでも開催され、引き続き議論を継続していく予定である。

Housing, Crafts and Industry in Cultural Landscapes Resilient Land Use Development for Quasi-Urbanized Areas - The Kyoto Fushimi Greenbelt, Japan

日時：2017年9月5日（火）～9月11日（月）

場所：京都大学デザインイノベーション拠点 他

企画：神吉 紀世子（京都大学工学研究科 教授）

9月5日～11日にかけて、ドルトムント工科大学が来日・京都に滞在し、京都大学デザインスクールおよび神戸芸術工科大学との共催により、伏見区深草地区に位置する大岩街道周辺地域の将来計画案を作成するデザインワークショップを開催した。11日午前10:00からは深草支所第3会議室において、提案の発表会を開催した。参加



フィールドワーク

学生は10名（ドルトムント7名、京大2名、神戸芸工大1名）で、2グループでそれぞれのテーマでの提案を作成した。学生以外のファシリテータとして、7名（各大学より教員4名、ポスドク4名、対象地域にかかわりのある社会人（専門家））が参画している。かつて違法な廃棄物の野焼きや廃棄物（建設残土・解体瓦礫など）が持ち込まれ、開発許可なく建設された作業場建屋や住宅も存在することから、今後の土地利用のあり方や実現可能性の高い地域再生、種々の理由があって地域で営みを続けている関係主体の活動育成などがテーマとなってきた地域であり、ドイツ・ルール工業地帯の類似の地域における様々な経験をいかしつつ、短期・長期の複数の時間スケールを見通した、地域の魅力化・違反状態改善などの案が作成された。発表会には市役所・区役所の行政担当者や伏見区コミュニティアドバイザーなどの専門家、伏見区市民等も参加し、またワークショップ途中から新聞取材も受けるなど、地域での関心を得ることができ、今後の実際の地域再生への具体的な貢献が生まれる可能性を実現している。

2つのグループの案は、それぞれ、具体的な地域の魅力化を、地域主体が役割を担いつつ時間経過とともに実現していく点が特徴である。今は目だっていない小河川の自然再生から次第に土地利用を再生し、地域主体の負担を増大させない配慮とともにその持続的な活動に再生への役割を担うことを期待するもの、さらには、北側に接する、稲荷山からのトレイルコースに着目し、山を下ってくるルート of 要所で広くパノラマを見渡す地点をポイントで設けることで、地域再生への関心を広め、かかわりをもつ担い手の広がりをめざす提案も行われた。広い視野でみると、対象地は、京都市市街地をとりまく西・北・東山のつらなりの中で唯一緑の帯が途切れる地点でもあり、その再生によってひろく京都全体からみた地域の面白さにつながる点も指摘されている。

ドルトムント工科大学では、来年にはルール工業地帯が産炭の歴史を終えるにあたって、工業跡地地域の将来計画にかかわる地域計画の仕事を担っており、京阪神を含む広いスケールと今回のような要所の地域再生とを有機的・戦略的に関連させた実効性ある計画実践の取り組みを国際的に議論していきたいとのことであり、今後も京都大学はじめ学生交流・共同開催のワークショップ、実際の計画提案による貢献活動などを開催していくことも話題となった。

金融情報システムとデータデザイン

日時：2017年12月16日（土）13:00～18:00

場所：京都大学デザインファブ리케이션拠点

企画：佐藤 彰洋（京都大学情報学研究科 特定准教授）

参加者：学生8名（工学部情報学科3回生5名、大学院情報学研究科修士課程1年2名（内履修生（予科）1名）、大学院情報学研究科修士課程2年1名（内履修生（本科）1名））、日本総研3名、特定教員1名



ワークショップの様子

開催1週間前まで参加希望者を募集し、参加希望者には事前に宿題としてATMの参与調査とATMの課題（キャッシュレス社会実現、振り込み詐欺撲滅）についてアイデアを準備するよう宿題として連絡を行った。当日は、日本総研担当者より講義の趣旨、日本総研で取り扱うテーマ、ATMの基本的なデータの流れについて説明があり、1チーム（4名）からなる2チームそれぞれでキャッシュレス社会の実現、振り込み詐欺撲滅についてデザイン思考の方法論（ブレインストーミング、カスタマージャーニーマップの作製、データフローの設計、劇プロトタイピング）を用いてサービスの検討を行った。最後にテーマごとに劇プロトタイピングの発表会を行い、成果の共有とグループワークの体験を通じて、デザイン思考の方法論について学習を行った。

振込詐欺の撲滅のために、振込詐欺に該当すると思われる振込口座の特定と振込詐欺と思われる振込に対する振込先口座を利用しようとする人物の特定および検挙をATMの機能を追加して行うための仕組みについて議論した。

キャッシュレス社会を実現することの意義について議論を行った。現在利用されるスマートフォンを用いた決済システムの問題点として、携帯電話の電池がなくなった場合における不便性ならびにインターネット回線を用いた携帯電話の充電方法（IDパスワードによる認証）の脆弱性の問題点を解決できるシステムについて議論した。ATMが有するインターネット通信経路を介さない専用線を通じた信頼性の高い通信経路を用いることによる安心な携帯電話への銀行口座からの充電方法を実現するために求められる機能と、その実現のために必要となるATMと金融情報システムの仕組みについて議論を行った。参加者の感想はどれも好意的であり、デザインスクールのテーマを充実させるため、産学連携の取り組みをさらに拡大することが有効であると考えている。

Creative Computation for Structural Design Optimization of Seismic Performance and Architectural Design of Large-scale Structures

日時：2018年1月11日（木）10:00～12:00

場所：京都大学桂キャンパス C2 棟 102

Presenter & Coordinator: Caitlin Mueller (Assistant Professor, Massachusetts Institute of Technology (MIT))

参加者：学生 11 名（工学部建築学科 3 回生 4 名、大学院工学研究科修士課程 5 名、博士課程 2 名）、教員 2 名

1月9日～11日の3日間、Caitlin Mueller 先生によるワークショップが行われた。

初日はミニレクチャー、ワークショップ課題説明、オリエンテーションおよびコンピュータを用いた演習が行われた。ミニレクチャーはコンピュータを用いた構造デザインに関するテーマで、歴史的な背景に始まり、理論や適用事例を交えた講演が行われた。課題では京都タワーを題材として、力学的に合理性を持ち、経済性にも優れたタワーの形状を求めよ、との説明があり、その後、意匠系 1 名、構造系 1 名の学生でチームを編成し、計 5 つのチーム Grasshopper の最適化に関するコンポーネント (Goat, Galapagos) を用いた演習が行われた。

2 日目は構造解析 (Karamba) と MIT にて開発されたデザインツール (Design Space Exploration) を用いた演習が行われた。各コンポーネントの使い方を学習し、並行して課題内容に沿ったデザインの検討を行った。ツールについて学習した後、チーム毎で課題モデルの最終的な検討が行われた。検討が終了した後は 3D プリンターについてインストラクターの説明を受け、3D プリントの出力を行った。

最終日の午前中は Caitlin Mueller 先生による講演「Creativity Performance Driven Design」が行われ、活発な議論がなされた。午後は課題成果物を持ち寄り、ワークショップの感想と、今後どういったデザインが可能になるかについて参加者各自が意見を述べ、議論が行われた。

異なる分野の学生が協働し、1つのモデルを作成していく様子は、さながら建築物の設計における建築設計者と構造設計者の協働に通ずるものがあったと考えられる。また、参加者一同、これまでにないデザインツールとしての新たな可能性を発見するだけでなく、ツールに使われないよう、建築デザインに対する感性をより一層高め、構造デザインにおける力学挙動を適切に判断できる感覚が大事であることを確認することができた。



ミニレクチャー

Session 5 「ブータンの自然、人々」

日時：2017年10月5日（木）12:00～13:00
場所：京都大学デザインイノベーション拠点
参加者：39名（京都大学8名、KRP入居企業31名）

京都大学医学研究科EHR共同研究講座の吉原博幸名誉教授から、2013年1月の第10次ブータン訪問団としてブータン王国を訪問した際の様子について紹介があった。国民総幸福量（GNH: Gross National Happiness）を提唱し、経済発展より国民全体の幸福を最も重視する「幸せの国」として一躍注目を集めたブータン王国であるが、国民の日常生活は、住居、食事など、至って質素であること等が、数多くの写真とともに詳細に説明された。その間、参加者は弁当とブータンのお菓子（ザウ、ゲザシップ）を食べながら熱心に話に聞き入っていた。これは、日本ブータン友好協会のご厚意で、ワンコイン Mixer の事務局が現地から直接取り寄せたものである。

講演の後、参加者は、幸せについて思ったこと、ブータンの魅力などについてテーブルごとに自由に語り合った。



吉原博幸氏による講演

Session 6 「野菜の会社で決まり事なんて壊していいと知った」

日時：2018年2月28日（水）12:00～13:00
場所：京都大学デザインイノベーション拠点
参加者：37名（京都大学6名、KRP入居企業31名）

（株）トレード広報部の岡井良文氏から、同社のビジネスの概要について紹介があった。同社は革新的な野菜関連事業を幅広く手掛けておられる。例えば生産地をまたぐ野菜の卸売りなどを行っているが、これは従来の青果市場の常識を破るもので、豊作であれば価格が暴落しがちな野菜の市場メカニズムを抜本的に変える、社会的意義の大きな事業であること、その事業を支える現場はスピードが命であること、といった説明があった。その間、参加者は弁当と、今回特別に用意された同社の食物工場で生産されたレタス（ベジタス）を食べながら、熱心に話に聞き入っていた。

講演の後は、簡単なデザインワークショップを実施した。テーマは、参加者の出身地の特産品とベジタスを掛け合わせた、新しい食べ物のアイデアを考えることである。10分ほどの短時間で、5名前後で構成された各チームから、ユニークなアイデアが次々と生まれた。最後にアイデアを披露しあい、最も優れたアイデアを発表したチームには、商品としてベジタスが贈呈され、大いに盛り上がった。



ワークショップ

5 デザインイノベーションコンソーシアム

5.1 概要

本プログラムは、デザイン学を基礎に異分野の専門家と協働しながら、社会の実問題に取り組み、社会のシステムやアーキテクチャをデザインできる優れた人材を養成することを目指している。このような人材育成を、本プログラムを核とした密接かつ柔軟な産学官連携により推進するため、平成26年3月に産学官の組織で構成されたデザインイノベーションコンソーシアムが設立された。

本コンソーシアムの存続期間は規約により平成31年3月末までと規定されているため、その継続について実質的な議論を行うべく、平成29年5月の通常総会において、企業を中心とする4名の理事が新たに任命された。現在の役員は以下のとおりである。

会 長	山西健一郎	三菱電機株式会社 取締役会長
副 会 長	守倉 正博	京都大学大学院情報学研究所通信情報システム専攻 教授
理 事	岩井 良行	パナソニック株式会社 執行役員 エコソリューションズ社 副社長 (新任)
	川添 雄彦	日本電信電話株式会社サービスイノベーション総合研究所 所長 (新任)
	黒橋 禎夫	京都大学大学院情報学研究所知能情報学専攻 教授
	樫木 哲夫	京都大学大学院工学研究科機械理工学専攻 教授
	田中 健一	三菱電機株式会社 役員技監
	恒川 哲也	東レ株式会社 常務取締役 研究本部長 基礎研究センター所長 (新任)
	牧 紀男	京都大学防災研究所都市防災計画分野 教授 (新任)
	松原 厚	京都大学大学院工学研究科マイクロエンジニアリング専攻 教授
	三浦 智康	株式会社野村総合研究所 理事
	宮田喜一郎	オムロン株式会社 代表取締役執行役員専務 CTO 兼技術・知財本部長
	山本 和彦	森ビル都市企画株式会社 代表取締役社長
財務担当理事	川上 浩司	京都大学デザイン学ユニット 特定教授
監 事	徳賀 芳弘	京都大学経営管理大学院 教授
顧 問	大竹 伸一	西日本電信電話株式会社 相談役
	門内 輝行	大阪芸術大学芸術学部建築学科 教授/京都大学 名誉教授



デザインイノベーションコンソーシアムの組織

これまで本コンソーシアムでは、さまざまな講演やワークショップなどのプログラムを会員向け事業として企画・実施してきたが、会員各位からさまざまな意見を頂いているところである。これに対して、本年度は、理事会のもとで日常的運営を担っている推進委員会を中心に議論を重ね、本コンソーシアムならではの、会員にとって魅力的な事業の在り方を模索してきた。例えば、京大デザインスクールや京都を核とする内容であること、異業種が集まること、会員ごとに異なるニーズに合わせてプログラムを柔軟に選択できること等である。これらの議論を踏まえて、平成30年度は一部のプログラムの内容や実施方式を見直す予定である。

5.2 会員

2018年3月末現在、下記の計73組織が会員となっている。会員の区分は、規約において次の3種が規定されている。

- 正会員 A：コンソーシアムの事業の企画に参加し、受講することができる。また、デザインイノベーション拠点を利用した活動ができる。年会費 30 万円。
- 正会員 B：コンソーシアムの事業の一部を受講することができる。年会費 5 万円。
- 特別会員：コンソーシアムの事業の企画に参加し、受講することができる（官公庁等）。年会費無料。

<p>【正会員 A】 (31 組織)</p> <p>株式会社内田洋行 大阪ガス株式会社 オムロン株式会社 京都大学 デザイン学ユニット 京都大学 情報学研究科社会情報学専攻 京都リサーチパーク株式会社 サントリーMONOZUKURI エキスパート株式会社 株式会社島津製作所 株式会社積水インテグレートリサーチ ソニー株式会社 ダイキン工業株式会社 大日本印刷株式会社 大和ハウス工業株式会社 株式会社竹中工務店 田辺三菱製薬株式会社 DMG 森精機株式会社 株式会社電通テック 東レ株式会社 西日本電信電話株式会社 西日本旅客鉄道株式会社 株式会社日建設計 日本アイ・ビー・エム株式会社 株式会社日本総合研究所 日本電信電話株式会社 株式会社野村総合研究所 株式会社博報堂 パナソニック株式会社 日立化成株式会社 三菱電機株式会社 ヤマハ発動機株式会社 横河電機株式会社</p>	<p>【正会員 B】 (38 組織)</p> <p>株式会社 NTT データセキスイシステムズ 株式会社 mct 株式会社 MTG 株式会社エンプラス 株式会社沖縄教育出版 鹿島建設株式会社 川崎重工業株式会社 NPO 法人環境カウンセラーズ京都 公益財団法人関西文化学術研究都市推進機構 京セラ株式会社 中央研究所 公益財団法人京都高度技術研究所 株式会社サクラクレパス JFE スチール株式会社 シャープ株式会社 住友重機械工業株式会社 住友電気工業株式会社 株式会社セック 大成建設株式会社 株式会社丹青社 株式会社地域計画建築研究所 株式会社電通 株式会社東芝 ニチコン株式会社 日本電気株式会社 日本ハムビジネスエキスパート株式会社 株式会社ハイシンク創研 株式会社不二越 株式会社フジタ 株式会社堀場製作所 マルホ株式会社 三井物産株式会社 村田機械株式会社 株式会社村田製作所コンポーネント事業本部 森ビル都市企画株式会社 株式会社 UACJ 株式会社横井製作所 ローテック株式会社 株式会社ワオ・コーポレーション</p>
<p>【特別会員】 (4 組織)</p> <p>京都府 京都市 京都商工会議所 独立行政法人情報処理推進機構</p>	

注：法人内の一組織として会員になっている場合、法人内組織名を記載している。

5.3 活動内容

5.3.1 プロフェッショナル・デザインキャンプ

2018年1月23日（火）～25日（木）の日程で、第4回プロフェッショナル・デザインキャンプ（以下、キャンプという）をデザインイノベーション拠点（KRP）にて開催した。前述のデザインセミナーがデザイン理論の実践的習得を目的としているのに対して、本キャンプは、コンソーシアムの会員企業が主体的に価値協創を実践する場を提供することを目的としてスタートしたものである。

設立5年目を迎えるデザインイノベーションコンソーシアムでは、これまで京大デザインスクール式のデザイン思考を価値創造プロセスとして実践してきた。4回目となる今回のデザインキャンプは、「ロボット共生社会を予想する」をテーマに、教育心理学と機械工学という異なる視点から知見を得て、多様な業界の参加者の意見を交換しあうメソッドを3日間にわたって実施した。ファシリテータには、「場とつながりラボ home's vi」代表理事の嘉村賢州氏を迎え、遠くない「ロボット共生社会」に向けたビジネスコンセプト作りをテーマとした。

プログラムを表5-1に示す。昨年度の第3回から、リードカンパニー2社が共同でテーマを提供するという従来のスタイルは採っていない。特に今回は、京大デザインスクール式のデザイン思考を実践することを重視し、テーマはその題材という位置づけで、実行委員とファシリテータが設定した。

表 5-1 プログラム

	1月23日（1日目）	1月24日（2日目）	1月25日（3日目）
AM	<ul style="list-style-type: none"> ・オリエンテーション（ウェルカムトーク、チェックイン、ミニレクチャー） ・コミュニティビルディング（絵による伝達競争、嘘つき自己紹介） ・グループインタビュー（話す、聞く、記録、タイムキーパーを順番に） 	<ul style="list-style-type: none"> ・オープニング（チェックイン、スピードキャッチ） ・レクチャー（工学の視点から） ・ハーベスト（お困りごと、問い、築き、アイデア） ・ハーベストの共有 ・考えてみよう（この3日間で大事にしたい3か条） 	<ul style="list-style-type: none"> ・オープニング（ジグソー法によるプレストの探求、プレスト体験（2020年東京五輪、私たちはどうやって世界を驚かす？）、振り返り） ・3日間の学びの統合（学びの収穫、未来を作る問い10個以上、ホワイトペーパー）
PM	<ul style="list-style-type: none"> ・トレンド共有ワーク（業界トレンドの推移をシェアしあう） ・ハーベスト（お困りごと、問い、築き、アイデア） ・レクチャー（心理学の視点から） ・思考を深めるワーク（そもそもロボットって何？再定義曼荼羅を使ったラベルがし） ・振り返り 	<ul style="list-style-type: none"> ・プレスト（丸を使って絵を描く、反転増幅シート） ・シェアードビジョン（ロボットが当たり前で共生する未来） ・ワールドカフェ（私たちビジネスセクターはどんな社会をつくりたいのかな？） ・ハーベスト（わたしが仕事を通じて生み出したいのは〇〇な仕事） ・振り返り 	<ul style="list-style-type: none"> ・三角形（未来の兆し、コンセプト、プロトタイプ）の探求（個人で、分科会で（プレストによるアイディエーション、ビジネスコンセプトの策定、プレゼン準備）） ・プレゼン ・3日間の振り返り ・アンケート ・チェックアウト

当日はコンソーシアム会員企業やデザイン学から 17 名の参加者が集まり、4 つのグループに分かれてワークを行った。初日は、知識補強フェーズである。参加者の業界のトレンドを学び合うことは、異業種の集うコンソーシアムならではのインプットである。また、京都大学教育学研究科の楠見教授による心理学の視点からのレクチャー、ならびに京都大学工学研究科の榎木教授による工学の視点からのレクチャーは、京都大学デザイン学とコンソーシアムが産学連携しているからこそ実現できたものである。中日の午後からは思考を深めてアイデアを出すフェーズである。最終日には 3 日間の学びを統合してアウトプットとなる三角形（未来の兆し、コンセプト、プロトタイプ）へ落とし込んで行った。全体としては、ハーベスト、再定義曼荼羅によるラベルはずし、ブレスト、ジグソー法、シェアードビジョン、ワールドカフェ、ホワイトペーパーなど多彩な手法を織り交ぜながら、インプットからケイオティックパスを経てアウトプットに至るプロセスを実践した。

5.3.2 デザインフォーラム

デザインイノベーションコンソーシアムと本プログラムが共同で主催するフォーラムは、大学・企業・行政から専門家を招き、最新トレンドを捉えたハイレベルなテーマの講演会やワークショップを実施している。フォーラムを構成するビジネスデザイン、政策デザイン、ファシリテーションデザインの 3 つのシリーズの内、ファシリテーションデザインは一昨年度後半の有償化に伴ってデザインイノベーションコンソーシアム単独主催となった。今年度は実施されていない。

(1) ビジネスデザインシリーズ

本シリーズは、当プログラムの特任教授である貫井孝氏（元シャープ株式会社常務取締役）によってプロデュースされており、産業界の一線で活躍している、または実績のある方を講師に招き、ビジネス現場の実態、抱えている課題、その突破口、戦略、そのための人材論など、ビジネスの現場を踏まえた講演をいただき、これを元に産学官の参加者が質疑を交わし、ビジネス価値やビジネスモデルをデザインする思考起点となっている。国の経済活動の中核を担う「産業・企業・グローバルビジネス」という切口から、様々な分野・バリューチェーンにおける解決課題の認識と方向性、それを可能とするイノベティブな人材要件などを語り合い、それぞれの立場の人々のモチベーションを高めるとともに、これからのビジネスイノベーションにつながるシリーズである。

着実に参加者数を増やし、デザインイノベーション拠点のセミナースペースでは入りきらなくなり、今年度から会場をフレキシブルスペースに変更した。



貫井特任教授によるプロデュース

夢みる力が「気」をつくる

日時：2017年7月28日（金）17:30～19:00
場所：京都大学デザインイノベーション拠点
講師：唐池 恒二氏（九州旅客鉄道株式会社
代表取締役会長）

参加者：66名

冒頭、当該フォーラムの意図、並びに今回のテーマ設定に関し、貫井孝特任教授から主旨説明がなされた。続いて、唐池代表取締役会長の講演へと移り、更に参加者を交えての活発な討議、意見交換が行われた。

JR九州は1987年に国鉄が分割民営化されて30年、その間の逆境の歴史を乗り越え、「ななつ星」が実現するに至る歴史や成功要因について、下記6つの観点から示唆に富む話を聞いた。

- (1) 夢みる力：リーダーとして、備えるべき3つの力は、「夢みる力」、「気を高める力」、「伝える力」。なかでも「夢みる力」がいちばん大事。
- (2) 気を満ち溢れさせる力：素晴らしい経営者は、周りの人たちに「気」を満ち溢れさせる何かを持っている。「気」は「生命の原動力となりうる勢い、或いは活力の源」などの意味。「気に満ち溢れた職場は元気が出、お店は繁盛し、会社の業績がよくなる」。
- (3) 「世界一」の夢：「夢みる力が気をつくる」とずっと言ってきたが、「ななつ星」には「世界一豪華な寝台列車をつくらう」という夢をみたのが原点。
- (4) 「気」のエネルギーが「感動」のエネルギーに：「夢みる力」があればそこに「気」を生み、「気」があると、それは「感動」というエネルギーに変わる。これは「ななつ星」から学んだこと。
- (5) 逆境からの出発：30年前、JR九州は、300億円近い赤字、という逆境からスタート、この屈辱的な状況を脱しようという意欲が人や組織を強くし、鉄道事業の改革、新規事業の展開へと突き動かすこととなった。
- (6) 伝える力：「夢みる力」「気を高める力」に続いて、最後は「伝える力」が重要。伝えたと思っけていても相手に伝わらなければ、それは伝えたとは言えない。



唐池 恒二氏による講演

三菱ケミカルホールディングス、世界に向けて新たな発進～三菱系3社統合により始動した日本最大の化学メーカー；三菱ケミカル誕生の狙いとは～

日時：2017年10月19日（木）17:30～19:00
場所：京都大学デザインイノベーション拠点
講師：越智 仁氏（株式会社三菱ケミカルホールディングス 代表執行役社長）

参加者：61名

冒頭、当該フォーラム、並びに今回のテーマ設定に関し、貫井孝特任教授から主旨説明がなされた。そして、越智社長の講演へと移り、更に参加者を交えての活発な討議、意見交換が行われた。講演概要



越智 仁氏による講演

は、以下の通りである。

(1) 三菱ケミカルホールディングス (MCHC) の概要 : MCHC という持株会社が設立され、今日に至る過程／目的などが説明され、特に 2017/4 の化学系 3 社の合併した三菱ケミカルの成り立ちの意図について詳述された。

(2) 化学企業を取り巻く環境 : 世界の化学メーカーの売上高、収益力、強みと日本メーカーのそれを比較しながら、後者の課題 (スピード感、産学連携などの取り組み、アジアメーカーからの追い上げ、規模とシェアなど) が明示された。

(3) 社会、環境、科学技術の変化 : 「少子高齢化による労働力不足」よりも足りないのは「創造力」であること、演繹的なものの考え方から帰納法的に解を見出すことの必要性、世界的な業界や業種を超えた新事業創造の動きへの対応力、企業の持続可能な成長という観点の重要性などが詳細に語られた。

(4) 当社の取り組み : 経営戦略方針としての「マテリアリティ・アセスメント (重要課題の特定)」の解説、加えて、事業活動を進める上での 3 つの基軸 (サステナビリティ、ヘルス、コンフォート)、5 つのターゲット市場、5 年から 15 年先を見るチーム「先端技術・事業開発室」の新設、ソリューションを含めた提案の必要性、クリエイティブで情熱を持った人を作り上げていく「健康経営」の重要性など明示頂いた。

日本発のグローバルビューティカンパニーへ ～ (株) 資生堂の経営改革～

日時 : 2017 年 12 月 21 日 (木) 17:30～19:00

場所 : 京都大学デザインイノベーション拠点

講師 : 島谷 庸一氏 (株式会社資生堂 執行役員常務 (研究開発本部長))

参加者 : 70 名

冒頭、当該フォーラム、並びに今回のテーマ設定に関し、貫井孝特任教授から主旨説明がなされた。そして、島谷執行役員常務の講演へと移り、更に参加者を交えての活発な討議、意見交換が行われた。講演概要は、以下の通りである。



島谷 庸一氏による講演

(1) 化粧品市場について (市場規模・成長性、主なプレーヤーなど) : 化粧品の市場構造、該社の売り上げ構成、地域と市場規模、販売チャネルの概要を開示頂くと共に、化粧品専門店チャネルの売り上げ減少、量販型店舗の増加などの動向を教示頂いた。

(2) 資生堂の概要 (創業、制度品ビジネスモデル、プロモーション、国内市場での苦戦) : 資生堂の歴史概要、ビジネスモデルの変遷と経営への影響 (マスプロモーションへの投資からデジタルメディア系、SNS などへのシフトなど)、業界参入障壁の低さや薬機法がもたらすビジネスインパクトが明示された。

(3) 資生堂の経営改革 (100 年先も輝き続けるために) : 2014 年からスタートしたビジョン「世界で勝てる日本発のグローバルビューティカンパニーへ」の説明、その中での「マーケティングと R&D はバリューセンターである」との認識変化、経営のグローバルマトリクス体制への移行、プレステージファーストの戦略、ボーダレスマーケティングへの取り組みなどによる経営改善について詳述された。

(4) 資生堂の研究開発：「機能性」「感性」「安全性」というお客さまの視点の研究開発体制、海外基礎開発拠点の設立、新たなデジタルビューティーデバイスへの取り組みなど、先進的な研究開発を紹介頂いた。

(2) 政策デザインシリーズ

本シリーズは、当プログラムの特任教授である木村千恵子氏（元京都リサーチパーク株式会社・執行役員）によってプロデュースされている。国の中枢で政策立案する方々を招いて、旬の政策テーマについて講演をいただき、参加者を交えたディスカッションを行う。政策が立案される背景、プロセス、目指すべきところなどの話題提供と同時に、現場でその政策を活用する、あるいはそれらを研究対象とする参加者を交え、当該テーマが抱える課題の抽出や意見交換を行う。政策立案者とユーザが一堂に会し、双方の立場を超えた気づきの場を設計することによって、モノを介してコトをデザインするのではなく、政策という形で直接的にコトをデザインするための知見が共有される。

今回は、政策デザインシリーズのミニワークショップを、サマーデザインスクール 2017の期間に開催した。

政策デザインシリーズ 特別編 in サマーデザインスクール

日時：2017年9月14日(木) 9:15~17:00

場所：京都リサーチパーク（サマーデザインスクール会場内）

講師：松井 啓之教授（京都大学経営大学院）

企画：木村 千恵子（京都大学デザイン学ユニット特任教授）

参加者：コンソーシアム会員、政府系研究所関係者、6名

政策現場でのデザインメソッドの活用が始まっている。本セミナーでは、京都大学経営大学院 松井啓之教授の指導の元、政策評価の方法論の1つとして、都市経営シミュレーションモデルを用いた政策評価手法について実際にモデルを使いながら学び、後半では、シリアスゲームとして「Democracy 3」を使いながら、その可能性について検討を行った。

参加者はこれまで政策に携わった経験のない会員メンバーや、政策立案現場にいるもののシミュレーションによる評価には知見のなかったメンバーだったため、新たな可能性を感じる機会となった。短時間での開催だったため、入門レベルとなったが、今後もこういう企画を継続したい。

5.3.3 デザインイノベーション拠点フェロー

本プログラムでは、デザインイノベーション拠点において、京都大学デザイン学と共に活動するデザインイノベーション拠点フェロー制度を創設している。デザインイノベーションコンソーシアムの正会員 A は、各組織から 1 名、当プログラム担当者からの推薦を付して、フェローを推薦することができる。2018 年 3 月現在、10 名のフェローが、京都大学学際融合教育研究推進センターからの委嘱を受けて活動している。これまでにフェローが立ち上げた活動は下記などである。

- フェローの間で話題提供をしながら、本プログラムの履修者や構成員も迎え入れて定期的に情報交換をする場であるサロンの運営
- 本プログラムとコンソーシアムが共同で主催するデザインフォーラムにおいて、3 つのシリーズの内の一つである政策デザインシリーズの立ち上げと運営

サロンは毎月定例で開催されている。今年度はフェローの所属企業、あるいは業界において暗黙的に実践されている、問題発見・問題解決における思考方法を持ち寄り、本コンソーシアムならではのデザイン手法を確立すべく議論を重ねているところである。

このほか、「オープンイノベーション実習」や「異分野・異業種企業訪問学習会」など、本プログラムとデザインイノベーションコンソーシアムが共同で実施している活動において、企業側の代表として関連部署を統括・調整するなど、文字通り産学連携のキーパーソンとして活動いただいている。



畑中哲夫さん
(株)竹中工務店
大阪本店 設計部
設計第 2 部門 部長



磯崎彦次郎さん
(株)野村総合研究所
社会システムコンサル
ティング部
主任コンサルタント



今井紘さん
オムロン(株)
技術・知財本部
企画・CTO 支援室 先
行技術推進課 主査



粟田恵吾さん
(株)日本総合研究所
未来デザイン・ラボ
ディレクター



鉄川弘樹さん
ソニー(株)
技術戦略部
統括部長



山口義雄さん
(株)日建設計
設計部門
デザインパートナー



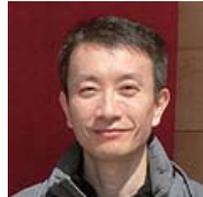
福田 卿也さん
(株)博報堂
関西クリエイティブ・ソ
リューション局開発
チームリーダー



中島 康祐さん
三菱電機(株)
デザイン研究所



木村 篤信さん
日本電信電話(株)
サービスエボリュー
ション研究所
主任研究員



永井 隆行さん
京都リサーチパーク(株)
産学公連携部
部長

6 プログラムのPDCAサイクル

6.1 質問紙調査

デザイン学プログラムでは、2015年度より、履修者等を対象とした質問紙調査を継続的に実施している。質問紙調査は、デザイン学プログラムの効果を検証し課題を抽出することを目的として定点観測的に実施しているものである。なお、一連の調査結果はデザイン学プログラムの評価と改善に利用するものとして位置付けるものであり、履修者個々人の評価を行うためのものではない。

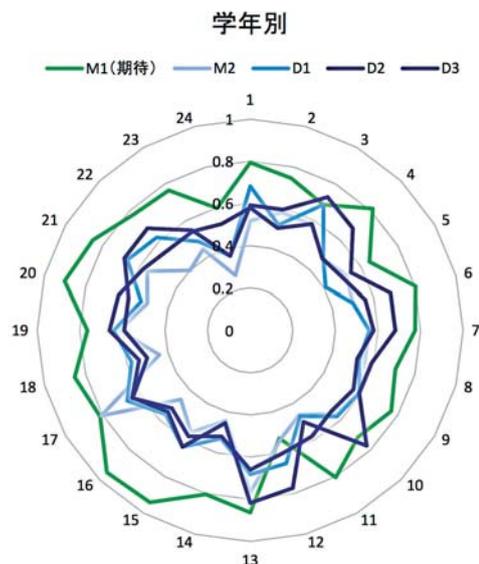
今回の質問紙調査は、2015年度（2015年5月実施）、2016年度（2017年3月実施）に引き続き、3回目となるものである。質問事項は、これまでに2回実施したものとほぼ同一であるが、卒業後の進路が決定しているL5の存在も踏まえ、進路選択および今後への期待等に関する質問項目のみ文言の変更を行なった。

質問紙は、パートI、IIの2項目からなる。パートIは選択肢から選択するタイプの計38問であり、PartIIは定性的な把握のための自由記述形式の計10問である。PartIの設問のうちの24項目は、デザインイノベータインデックスを算出するにあたり使用している質問項目であり、「エンゲージメント（協働）：Outward 他者との関係に対する俯瞰力」「ガバナンス（管理運営）：Forward 研究遂行上の規範・計画・管理・運営・組織面での俯瞰力」「インテリジェンス（知的能力）：Metaknowledge 知識の活用に対する俯瞰力」「パーソナリティ（個人の資質）：Inward 自身の内面に対する俯瞰力」という4領域のいずれかに対応する。具体的には、「自分とは異なる文化的背景を持つ人たちと価値観や問題意識を共有する力」や「自分の研究を進めて行く上でのプロセスを考えそれを実行していく力」について、それぞれ、「大きく力がついたと思う」「力がついたと思う」「変わらない」といった3項目から選択する形式をとっている。

本年度の質問紙調査は、2018年1月現在、履修者（本科）あるいは履修者（予科）としてデザイン学プログラムに在籍中の、L1（M1相当）からL5（D3相当）までの学生計63名に対して、2018年2月に電子的に質問紙調査書を配布した。3月2日現在、54名から回答を得た。

本報告書を執筆している2018年3月初頭現在、調査結果を集計し分析に着手したところである。次に示した図は、現時点での集計結果の一部である。デザインイノベータインデックスに関連する24個の質問項目への回答を、学年別に集計したものである。点数が高いほど、「強く力がついた」「力がついた」と回答した人数が多かったことを示す。参考として、毎年6月に、新入生あるいは新規編入生に対して実施している意識調査の結果（「M1（期待）」）を併記する。新入生対象の意識調査においては、各設問に記載された内容に対して、その力がつくことをどの程度期待しているかを回答してもらっている。

今後は、2015年度、2016年度の質問紙調査結果も含めた上で、回答内容のさらに詳細な分析を進めていく。具体的には、学年別、あるいは同一学年内の回答結果の経時変化の調査、自由回答に記載された内容の定性的分析と経時変化の調査等を行う予定である。



図：学年別回答結果（一部）（単純集計）

6.2 東一条館オープンキャンパス

2017年7月2日（日）に、東一条館オープンキャンパスが開催され、京都大学の5つのリーディングプログラムが紹介された。当プログラムも、事務室や特定教授の居室などが東一条館にあり、ここでのオープンキャンパスに参加した。

企画は、昨年度の初回オープンキャンパスとほぼ同様であり、コミュニティラウンジにおける各プログラムのブース、思修館ホールにおけるプログラム紹介プレゼンテーション、大講義室における体験講座や履修者からのメッセージ発信、会議室における各プログラムの履修相談ブースであった。当プログラムからは、コミュニティラウンジのブースにはA0判ポスター2枚やデザイン学論考全巻を展示し、思修館ホールでのプレゼンとともに全体の説明を特定教授が担当した。また、履修相談には教務担当があたった。昨年度は、

東一条館への来場者には、吉田キャンパス内にデザインファブリケーション拠点があることを伝え、同拠点には非常勤講師が待機して見学の対応をしたが、本年は実施していない。

来場数は33人と昨年37名より減少した。その内でアンケートに回答した15名は、本学学生4名、他大学学4名、教職員2名が含まれる。15名中、当プログラムに興味を持った人が2であった。

京都大学リーディングプログラム

2017年7月2日（日）
10:00~15:00
京都大学東一条館
(京大正門から西へ徒歩5分)

**第2回
オープンキャンパス
in 東一条館**

お待ちしております！昨年好評につき、今年もオープンキャンパスを開催します！
京都大学には5つのリーディングプログラムがあり、地球規模の課題を、グローバルな目線で解決できる人材の育成を目指しています。
国内外の第一級の専門家が、洗練された知識をわかりやすく解説します。最先端研究の世界をまよとので歩いてみませんか。
ぜひお気軽に遊びに来て下さい。

思修館

高い使命感・倫理観を有するグローバルリーダーとしての責任を身に、種々のプレッシャーに耐え、広い知識と深い専門性を両立させた柔軟性ある思考で既存の学問や課題領域を築きあげることができ、かつ国内外での豊富な実践経験を蓄積し、「課題」での的確な判断力・行動力を備えたリーダーたる人材を育成します。
<http://www.gsat.kyoto-u.ac.jp/>

京大生 学長兼学・ワイロライオンズ・リーディングプログラム

京大生は日本発の、そして日本が世界を牽引する稀有な学生です。書院寮を基盤に、入道の価値観を対向した「ワイロライオンズ」が確立されつつあります。フィールドワークを軸として、人間にこころ・からだ・くらしを包括的に理解しつつ、京大の基本目標である「地球社会の発展と共存」をめざして、学問と実践をつなぐグローバルリーダーを育成します。
<http://www.wildlife-science.org/>

総合学術情報センター 産学連携ラボ

医療・健康という切り口から、新たな概念を創出し、個人の一生や地域社会、広域社会の全体適合性を向上させる Medical Revolution を先導できる総合学術開発リーダーを育成します。
<http://www.lims.kyoto-u.ac.jp/>

現代の地球社会では、巨大自然災害、突発的人為災害・事故、環境変化・感染症などの地域環境変動、食料安全保障といった危機専門家や社会不安がますます深刻化しています。「グローバル生存学」という新たな学際領域を開拓し、社会の安全安心に寄与できるグローバル人材を育成します。
<http://gs-sv00.gss.sats.kyoto-u.ac.jp/>

「デザイン」の対象は、システムやアーキテクチャに及びつつあります。世界規模で進行するエネルギー、災害などの諸問題を分析し、社会の発展に寄与する総合的行動を「デザイン」でできる人材を育成します。
<http://www.design.kyoto-u.ac.jp/>

【問合せ先】 総合生存学館事務部 075-762-2001

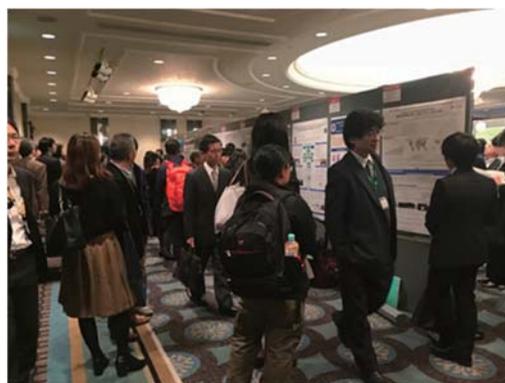
6.3 博士課程教育リーディングフォーラム 2017

「博士課程教育リーディングフォーラム」は、全国の博士課程教育リーディングプログラムの学生や教員間の情報共有、また産業界の人々との交流の場として、毎年開催されている。2017年度は名古屋大学が主催、日本経済団体連合会、中部経済連合会および中部経済同友会が後援して10月20日～21日に開催された。今年度のテーマは、第1期のリーディングプログラムから修了生がでていることもあり、「リーディングプログラムのレガシーと修了生への期待」であった。本プログラムからは、履修者2名（工学研究科航空宇宙工学専攻L4、教育学研究科教育科学専攻L4）と、教員4名が参加した。

フォーラムでは例年通り、学生による分科会やパネルディスカッション、招待講演や文部科学省による卓越大学院プログラムの説明が行われた。ただし、例年と異なり、フォーラムでの分科会が議論だけに終わらないように、Day 0として分科会毎の事前議論の場がフォーラムの前日に設けられた。これにより、フォーラムでは分科会ごとの提案に対して聴衆からのフィードバックを得ることができ、最終的に提言としてまとめ上げるようプログラムが工夫されていた。



招待講演



ポスターセッション

6.4 デザイン学ユニット協議会

教育内容や運営方針を産学官で議論するための協議会を毎年開催している。平成 29 年度は、国際デザインシンポジウムと同日となる以下の日程で開催した。議事内容として、デザインスクールの事後評価について報告を行い、将来構想について議論を行った。本年度は、協議会メンバーだけでなく、プログラムの検証・改善に資するために外部評価委員にも参加を求め、広く意見を聴取した。協議会後には引き続き昼食懇談会を開き、活発な意見交換が行われた。

日程：2018 年 3 月 14 日（水）10:00～12:40

場所：京都大学百周年時計台記念館 2 階 国際交流ホールⅢ

10:00～11:30 協議会

報告：デザインスクール事後評価について

石田 亨（情報学研究科 教授／プログラムコーディネータ）

榎木哲夫（工学研究科 教授／デザイン学ユニット将来構想委員長）

議事：デザイン学プログラムの将来構想について

榎木哲夫（工学研究科 教授／デザイン学ユニット将来構想委員長）

11:40～12:40 昼食懇談会

協議会のメンバーは以下の通りである。（敬称略）

石田 亨	京都大学情報学研究科社会情報学専攻 教授
楠見 孝	京都大学教育学研究科教育科学専攻 教授
佐藤 高史	京都大学情報学研究科通信情報システム専攻 教授
榎木 哲夫	京都大学工学研究科機械理工学専攻 教授
塚田 章	京都市立芸術大学大学院美術研究科 教授
松田 晃一	独立行政法人情報処理推進機構 顧問
上田 修功	日本電信電話株式会社 コミュニケーション科学基礎研究所 上田特別研究室長（NTT フェロー）、機械学習・データ科学センタ代表
田中 健一	三菱電機株式会社開発本部 役員技監
山田 敬嗣	日本電気株式会社中央研究所 理事
梶本 一夫	パナソニック株式会社全社 CTO 室技術戦略部直轄 主幹
三浦 智康	株式会社野村総合研究所 理事（兼野村マネジメント・スクール副学長）
上田 誠	京都市産業観光局 局長
谷脇 康彦	総務省 政策統括官（情報セキュリティ担当）
松井 啓之	京都大学経営管理研究部 教授
田中 利幸	京都大学情報学研究科システム科学専攻 教授
吉川 正俊	京都大学情報学研究科社会情報学専攻 教授
松原 厚	京都大学工学研究科マイクロエンジニアリング専攻 教授
藤本 健治	京都大学工学研究科航空宇宙工学専攻 教授
神吉 紀世子	京都大学工学研究科建築学専攻 教授
齊藤 智	京都大学教育学研究科教育科学専攻 教授
黒橋 禎夫	京都大学情報学研究科知能情報学専攻 教授

太田 快人	京都大学情報学研究科数理工学専攻 教授
富田 直秀	京都大学工学研究科機械理工学専攻 教授
三浦 研	京都大学工学研究科建築学専攻 教授
山内 裕	京都大学経営管理研究部 准教授
林 康裕	京都大学工学研究科建築学専攻 教授
西脇 眞二	京都大学工学研究科機械理工学専攻 教授
泉田 啓	京都大学工学研究科航空宇宙工学専攻 教授
西田 豊明	京都大学情報学研究科知能情報学専攻 教授
守屋 和幸	京都大学情報学研究科社会情報学専攻 教授
守倉 正博	京都大学情報学研究科通信情報システム専攻 教授
多々納 裕一	京都大学防災研究所社会防災研究部門 教授
美濃 導彦	京都大学学術情報メディアセンター 教授
須永 剛司	京都大学デザイン学ユニット 特任教授
中小路久美代	京都大学デザイン学ユニット 特定教授
川上 浩司	京都大学デザイン学ユニット 特定教授
十河 卓司	京都大学デザイン学ユニット 特定准教授
村上 陽平	京都大学デザイン学ユニット 特定准教授
北 雄介	京都大学デザイン学ユニット 特定講師
佐藤 彰洋	京都大学情報学研究科数理工学専攻 特定准教授

外部評価委員は以下の通りである。（敬称略）

下村 芳樹	首都大学東京大学院システムデザイン研究科 教授
深堀 聰子	九州大学教育改革推進本部（企画・評価部門） 教授
白井 博志	株式会社博報堂 執行役員、関西支社長
竹川 禎信	一般社団法人環境技術普及促進協会 常務理事
岩田 洋夫	筑波大学システム情報工学研究科知能機能システム専攻 教授



協議会



昼食懇談会

6.5 PDCA サイクルの確立

PDCA サイクルを確立するためには、(C) 現状の分析と理想の姿とを描き、(A) その両者のギャップを認識することからはじまる。そして、(P) このギャップを小さくすることを可能とする活動計画を立案し、(D) その計画を実践することによりサイクルの確立をはかることが必要である。

3月14日に実施した外部評価委員会における委員の指摘内容を総合し、デザイン学大学院連携プログラムの現状分析と理想とする姿との間に存在するギャップの分析を行い、特に重要となる以下の項目を得た。

- (1) 俯瞰力と独創力に対する評価項目と、Design Innovator Index の評価項目との一貫性が分かるよう工夫すべきである。履修者と企業の人材育成の目標が一致することの重要性を説明をすべきである。
- (2) 学位と、入試、研究指導認定、QE、ルーブリック評価の整合性に注意を払うべきである。また、学位プログラムが研究科ごとに異なり、過渡的な対応に見える。目標を明確にすべきである。
- (3) 補助金終了後も重要な講義や演習などの骨組みを維持すべき。さらに、事業収益を考えるプログラムや、芸術的視点を導入するなどしてブランド力を高めるべきである。社会人が容易に参加できるよう検討すべきである。
- (4) コンソーシアムと学生や教員との接点を強化すべき。企業人や学外の専門領域の協力をより積極的に得るべきである。現在 参画していない研究科や専攻の参画も考慮されたい。

これら抽出された現状と理想のギャップを小さくすることを可能とする活動計画について、今後、プログラム担当者間で協議を行い、実行可能な対応策を検討していく。

7 その他の活動

7.1 広報活動

プログラム全体の広報活動は「デザイン学ユニット広報小委員会」を設置して行なっている。これまでにロゴマークの策定や各種紙媒体、ウェブページの作成を行なった。平成 29 年度は既に定常活動に入っており、web ページの更新や「デザイン学論考」の継続発行(7.1.1 に詳述)などを例年通り行なった。なお各種イベントなどの広報はイベントの担当者が個別に行なっている。これらの主要なものについては付録に掲載する。

7.1.1 デザイン学論考

デザイン学に関する持論展開や議論の場として、「デザイン学論考」という小冊子の発行を行なっている。平成 26 年度に創刊した年 3 回の定期刊行物であり、デザイン学ユニット構成員、プログラム履修者、また学内外のデザイン学に関心を寄せる方に対して配布、および原稿募集をしている。学術論文誌とはせず、自らの研究や実習のプロセスについて自由に書けるものとしている。

平成 29 年度は 2 月現在までに 2 回発行し、あわせて 9 本の論考が掲載された。そのうち 8 本がプログラム履修者の執筆したもので、1 本が留学生による英語の論考となっている。3 月にも、最新号を発行予定である。



「デザイン学論考」vol.11 表紙

平成 29 年度発行 「デザイン学論考」掲載リスト

1. 久富望. 6 つのブレストバトル対抗戦実施報告 — 「産学連携バトル! in Kyoto」におけるワークショップより—. デザイン学論考, vol.10, pp.3-15, 2017.
2. 小山純汰. Web サービスの亡霊のゆくえ. デザイン学論考, vol.10, pp.16-21, 2017.
3. 坂口智洋, 久富望, 北雄介. 参加者は何を期待し何に満足しているのか — 京都大学サマーデザインスクール 2016 のデータ分析 (2)—. デザイン学論考, vol.10, pp.22-34, 2017.
4. 北雄介, 坂口智洋, 久富望. デザインプロセス全体を複雑なまま構造的に記述する試み. デザイン学論考, vol.10, pp.35-56, 2017.
5. 寺川達郎. アーティストたれ!. デザイン学論考, vol.11, pp.3-13, 2017.
6. Luciano Henrique de Oliveira Santos. The American Way of Design. デザイン学論考, vol.11, pp.14-21, 2017.
7. 広瀬貴之. アメリカでのデザインに対する取り組み. デザイン学論考, vol.11, pp.22-26, 2017.
8. 広瀬貴之. アメリカ訪問学習会 2017 秋 US 番外編 私たちはなぜデザインを学ぶか. デザイン学論考, vol.11, pp.27-30, 2017.
9. 久富望, 鶴羽愛里, 塩山皐月. リーダー集団に必要なリーダーシップとは — 「産学連携バトル! in Kyoto」を通して—. デザイン学論考, vol.11, pp.31-37, 2017.

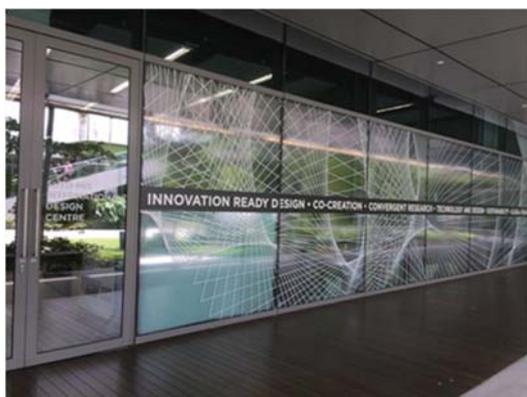
7.2 海外調査・交流

7.2.1 デザイン学白書作成のための調査

平成 27 年度の中間評価で、「デザイン学の体系化に向けては、海外の実情を踏まえた発展が望まれる。例えば、ハーバード大学やデルフト工科大学との連携を積極的に進め、デザイン学の共通理念を創出されることが期待される。」との参考意見が現地視察担当委員から提示された。これを受けて、デザイン学の国際標準のカリキュラムについて検討し、デザイン学白書（ホワイトペーパー）を編纂する事業を平成 28 年度より開始している。

平成 28 年度のオランダ デルフト工科大学 Industrial Design Engineering 研究科に続き、第 5 回国際シンポジウムに参加したシンガポールの国立シンガポール技術デザイン大学（SUTD: Singapore University of Technology and Design）の Prof. Chong Tow Chong との交流を機に、2017 年 6 月 30 日に中小路久美代特定教授が訪問した。

Provost（副学長に相当）の Chong Tow 先生および ASD (Architecture and Sustainable Design) コース長の Erwin Viray 先生とミーティングを行い、SUTD でのデザイン教育におけるカリキュラム設計の思想と目指す方向について、話を伺い、ミーティング後には SUTD のキャンパス内の案内、とくに講義室やデジタルファブリケーションを備えたデザイン実習工房、研究室などの紹介を受けた。



SUTD のキャンパス

SUTD は、2009 年に創立された大学である。創立時から米国の MIT（マサチューセッツ工科大学）の支援を受けており、学部生向けカリキュラムの 9 割は、MIT におけるデザイン教育のためのカリキュラムを踏まえて構築されているとのことであった。講義を行う講師も交代で期間を決めて MIT から派遣され、人的交流を含めて、2010 年からの 7 年間は、密接な関わりを持って大学が運営されていた。MIT とは、研究面での連携も深く、構築した IDC (International Design Centre: 国際デザインセンター) を拠点として、学生および教員が、デバイス、システム、サービスのデザインを通してシンガポール国内外への展開を図っているとのことであった。また、浙江大学 (Zhejiang University、中国) とも教育、交換留学、研

究という3つの分野で連携を行なっている。浙江大学が提供する文化、歴史、ビジネス等に関する5科目を選択科目として履修することができ、毎年100人程度の交換留学を実施しているとのことであった。

SUTDでの学部カリキュラムは、Architecture and Sustainable Design (ASD)、Engineering Product Development (EPD)、Engineering Systems and Design (ESD)、Information Systems Technology and Design (ISTD)と呼ばれる4つのPillar(「コース」とも呼ぶべきもの)から構成されている。学生は、入学後の前半(8学期のうちの3学期)を、これら4つのコースを横断する形での基礎知識を学び、後半で、コース毎のデザインプロジェクトに関わりながら、学士号を取得することになる。また前半では、Humanities, Arts and Sciences(HASS)と呼ばれる、人文系講義の履修が必修となっている。博士号のカリキュラムは、学部のPillarに対応する4つのコース、および、Science and Math(科学と数学)という計5個のコースからひとつを選ぶことになる。授与される学位は、それぞれのコースにおけるPh.D.(Doctor of Philosophy)となる。MITおよび浙江大学との密接な連携体制を踏まえて、博士課程の学生も、両大学の研究者との交流や共同プロジェクトへの参画を通して、6ヶ月を上限とするインターンシッププログラム等の産学連携や、分野間連携の実プロジェクト運用等の体験を通じた学びの場が提供されているとのことであった。

その他、イタリアのミラノ工科大学(Politecnico di Milano)のデザイン専攻所属でLab.I.R.Int Team Coordinatorを務めるProf. Alessandro Biamontiが、9月に開催されたサマーデザインスクールに参加するべく学生とともに来日した。期間中に、京都大学工学研究科機械理工学専攻の榎木哲夫教授の研究室を訪問し、ミラノ工科大学のデザイン教育について情報収集を行なった。

ミラノ工科大学では、3年間の学部教育と2年間の修士課程の教育を接合した5年間のプログラムが標準的である。学部から修士に相当するレベルで広くさまざまなデザインを対象とするプログラムが走っており、その先に、デザイン分野全体を取りまとめたPh.D.プログラムが実施中であることが述べられた。このPh.D.プログラムには、内部からの進学者よりは広く全世界からの受け入れを前提にしたオープンなプログラムになっており、このプログラムの中でPh.D.学生を対象とするさまざまなワークショップの開催を通じた学際教育がなされていることが紹介されたが、そのための特別の訓練までは行われていないとのことであった。学生数38,000名、1,400名の教員と1,200名の職員で、School of Design、School of Architecture School of Engineeringの大組織のもと6つのSchoolから構成されている。Schoolとは別に、合計12の研究分野(Department)が構成されており、うち一つがDesignの分野である。

ミラノ工科大学での”The Design System”と呼ばれるデザイン教育研究のモデルは、School of Designでの教育、Dept. of Designでの研究、そしてPoli. Design Consortiumでの生涯教育と産学連携、の3つの組織の協働体として組織されている。

代表的なデザインコースとしては、学部でProduct Designを修めて、修士はDesign and Engineeringの専攻に進むパターンが紹介された。Design and Engineeringの専攻には、複数の学部から学生が集まり、300名の学部生から80名が進学してくる。これらの専攻間での聴講は許されているが、専攻間での共通カリキュラムが用意されている訳ではない。修士論文はプロジェクトに参加して、10名規模で実習を伴うプロジェクトの研究成果を論文にする。課題を提起する企業は大学に支払い、成果は企業が買い取る。インターンシップ機会も

企業が提供する。修士課程では15名程度のクラスを編成して教育するが、必ずしも学際性は求めている。博士研究は、個人での研究が原則で、対価は大学を介して学生に支払われ、1週間単位での異分野経験を義務付けている。

大学としてのキャリアサポートサービスがあり、学生それぞれが、何を学修してどこで働いたかをすべてHP上に開示(名前の個人情報は秘匿)されている。企業側もこれをもとに学生をリクルーティングしており、学生には、キャリアを作って表明していくことに極めて積極的で、その積極さが雇用時には評価される。Employment Stat. も併せて開示されており、これが就職活動を円滑に回している。1 selected course がジェネリックスキル養成科目として提供されているが、博士課程学生には履修を義務づけてはおらずそもそも博士課程にはコースワークもない。また修士課程における教育は、自身の専門的知識に基づいて、いかにして新しい知識を獲得できるようになるかを養成目的としており、決して異なる分野の知識を共有させるような取組みは実施していないということであった。修士課程でもかなり競争的で、その中から博士に進むのはさらに競争的であり、Best Student のみが進学する。特徴的な取組みとしては、企業が定期的に大学で2 days – 1 week のワークショップを開催し、企業側からの参加を迎え研究テーマの提案がされる。

さらに今年度の活動の一環として、京都大学工学研究科機械理工学専攻並びにマイクロエンジニアリング専攻では、米国のみシガン大学(University of Michigan)との交流を開始している。同大学では2005年より、“A Rackham Interdisciplinary Doctoral Program in Design Science” と称するデザイン科学の博士課程教育プログラムが実施されている。“Artifact creation will be placed closer to the user and his/her social context” をモットーに、従来のリベラル教育やエンジニアリング教育のカリキュラムを見直すプログラムとして位置付けている。

プログラムの中で謳われているビジョンは、“Designing in the Designed World” と “Design Science” が強調される。前者では、人工物のデザインについて、その機能面のみならず、人工物の使用によって、技術がもたらす負の側面や、人工物がどのように個人や集団の生活を変えさせていくかについての社会技術システムの側面が強調される。一方後者では、既存のエンジニアリングデザインやインダストリアルデザインと対比させ、マーケティング(marketing)、人間工学(ergonomics)、人的要因(human factors)などの学際領域からの知見を取り込み、分析的/定量的/定性的なモデル構築を通じた意思決定(decision-making framework) との関係性を明らかにするデザイン学の体系化を目指している。同プログラムのその他の詳細については、デザイン白書で取りまとめる予定である。なお、来年度の5月には工学研究科機械理工学専攻並びにマイクロエンジニアリング専攻からの教員が参加して、みシガン大学でのジョイントシンポジウムの開催が予定されている。

7.3 I-U-U-I（産学学産）連携

平成 28 年度から、大学間の国際連携（UU）と産学連携（UI）を組み合わせる IUUI の一つとして、サマーデザインスクールとコンソーシアム会員組織でのインターンを組み合わせる企画を実施している。今年度も、当プログラムとの交流があるイタリアのミラノ工科大学から教員と院生が来日し、京都大学サマーデザインスクールに参加して当プログラムの履修者や構成員と交流するとともに、デザインイノベーションコンソーシアム会員企業における短期（2 週間）のインターンシップに参加した。

ミラノ工科大学は、イタリアの国立大学であり同国最大の工科大学である。工学・建築学・デザインの 3 学部から構成され、1863 年に創立したミラノで最も歴史のある大学でもある。当プログラムの連携先が所属するデザイン学部（Department of Design）は建築学部から 2003 年に独立したものであり、建築学からは著名な建築家・デザイナーを輩出しており、工学教育では世界有数の大学のひとつである。

IUUI の実施体制としては、当プログラムが中心となり、デザイン学ユニットサポートが担当した。担当者は、ミラノ工科大学側の担当者（Department of Design の Alessandro Biamonti 教授）、コンソーシアムの推進委員会、サマーデザインスクール（以下、SDS）実行委員会との連絡を担当した。

昨年度のスケジュールを踏襲して、3 月からミラノ工科大学と当プログラムでラフな条件の確認（SDS への参加形態、スケジュール、学生人数、経費負担）などの準備を開始した。春にはミラノ工科大学側では参加学生募集、コンソーシアムではインターン受入れ先を募集し、7 月に SDS へのテーマ提案やインターンの学生と受け入れ先とのマッチングを実施した。

9 月の SDS には、Biamonti 教授が DESIGN AND BEAUTY 題するテーマで 3 日間のデザインワークを実施し、学生 4 名はそれぞれ希望のテーマを履修した。SDS 後の 2 週間のインターンシップは、それぞれ以下のコンソーシアム会員企業で実施された。

[インターン受入れ組織およびインターン学生]

- パナソニック株式会社 エコソリューションズ社 デザインセンター：Pietro Tordini
- 株式会社 丹青社 関西支店 コミュニケーションスペース事業部：Matteo Menchetti, Giulia Cimenti
- 三菱電機株式会社 デザイン研究所：Fabrizio Guarrasi



Biamonti 教授が実施したテーマの様子



ミラノ工科大学の学生が参加したテーマの様子

7.4 学学連携

(1) 京都大学デザイン学ユニット/東北大学電気通信研究所合同シンポジウム

「デザイン学に基づく電気通信システムの革新」というタイトルで、2017年12月15日に、東北大学電気通信研究所（宮城県仙台市）において、京都大学デザイン学ユニットと東北大学電気通信研究所との合同シンポジウムを開催した。

本合同シンポジウムは、平成29年度「共同プロジェクト研究タイプS」として東北大学電気通信研究所により採択された「デザイン学に基づく電気通信システムの革新」プロジェクト（研究代表者：京都大学・榎木哲夫、東北大学・北村喜文）の一環として、開催したものである。東北大学電気通信研究所は、日本を代表する弱電研究の研究所で、磁気記録や半導体・光通信を始め、多くの電気通信に関わる研究成果を挙げている。情報通信共同研究拠点である当研究所は、ビジョンとして「社会的要請を先取りした、人間性豊かなコミュニケーションを実現する総合的科学技術の学理と応用に関する研究を展開すること」を標榜されており、デザイン学プログラムより8名、東北大学電気通信研究所より17名が参加した共同プロジェクトとして採択され、学学連携として実現したものである。プロジェクトのゴールとしては、(1) どのような体験をさせるかという最上位の目標から要素技術をトップダウンで統合するデザイン学のアプローチにより人間性豊かなコミュニケーションの実現に向けた環境設計を行うこと、(2) 電気通信システムという分野にデザイン学のこれまでの経験に基づいてチャレンジすることにより新たな問題発見と解決法を見出すこと、(3) デザイン学に基づいたコミュニケーション環境の技術や設計方法論に対する新たなブレークスルーおよび産業展開を図ること、を挙げている。

開催したシンポジウムでは、デザイン学プログラムから8名、東北大学電気通信研究所からは約15名が参加し、「仕組みと機構」「認知と社会」「作用と効用」という3つのテーマについて、計13件の発表が行われた。それぞれの発表に対し、活発な議論が交わされた。

「仕組みと機構」のセッションでは、インタラクティブなコンテンツのデザインや、デザインプロセスの記述、機械の動きや動物の動きの機構の創出と解明、視覚と行動に関わる脳処理や人の振る舞いについての発表があった。「認知と社会」のセッションでは、言語デザインや社会的相互行為、研究アーカイブによる学習場の設計やゲームを用いた組織デザインの発表があった。「作用と効用」のセッションでは、人と機械の共創や、人とインタラクティブ表現との共創、参学連携による共創といった事柄がとりあげられた。シンポジウム終了後は、来年度も引き続き共同プロジェクト研究を実施し、次回シンポジウムを京都で開催することで合意が得られた。

なお、本共同研究プロジェクトについては、東北大学電気通信研究所主催の平成29年度共同プロジェクト研究発表会「新世代ICTの羅針盤」（2018年2月22日開催）において、「Interpreting, Situating, and Envisioning Technologies in a Societal Context through Design」というタイトルで成果発表を行った。

以下に合同シンポジウムのプログラムを示す。

京都大学デザイン学ユニット・東北大学電気通信研究所 合同シンポジウム

「デザイン学に基づく電気通信システムの革新」

研究代表者：樫本哲夫（京都大学）、北村喜文（東北大学電気通信研究所）

開催日時：2017/12/15(金)

開始時刻：13:30 から

開催場所：東北大学 電気通信研究所本館 5階 M531 セミナー室

仙台駅から徒歩15～20分の片平キャンパス内（または地下鉄南北線 or 東西線で1駅）

<http://www.riec.tohoku.ac.jp/ja/access/>

講演時間：18分（13分発表、5分質疑）

13:30-15:00 <SESSION 1: 仕組みと機構>

「インタラクティブコンテンツのデザイン」

北村喜文（東北大学電気通信研究所・情報コンテンツ研究室・教授）

「動物の生き生きとした振る舞いに内在する制御原理」

石黒章夫（東北大学電気通信研究所・実世界コンピューティング研究室・教授）

「デザインプロセスの拡張的記述の試み」

北雄介（京都大学学際融合教育研究推進センター・特定講師）

「新機能メカニズムー全方向駆動車輪、変速システムー」

小森雅晴（京都大学大学院工学研究科・教授）

「視覚と行動に関する脳処理と日常生活での役割」

塩入論（東北大学電気通信研究所・高次視覚情報システム研究室・教授）

15:10-16:40 <SESSION 2: 認知と社会>

「共感覚メタファに基づく言語のデザイン」

楠見孝（京都大学大学院教育学研究科・教授）

「Human Implicit Social Interactions」

曾加憲（Chia-Huei Tseng）（東北大学電気通信研究所・高次視覚情報システム研究室・准教授）

「マルチモーダル空間情報の高次感性評価」

崔正烈（東北大学電気通信研究所・先端音情報システム研究室・助教）

「研究アーカイブの展示・展開・展望」

山本恭裕（京都大学学際融合教育研究推進センター・特定教授）

「組織デザインに対するゲームを用いたアプローチ」

松井啓之（京都大学経営管理大学院/大学院経済学研究科・教授）

16:50-18:02 <SESSION 3: 作用と効用>

「省エネ・ナノエレクトロニクス：デザインとの接点は？」

大野英男（東北大学電気通信研究所・スピントロニクス研究室・教授）

「人と機械の共創による活力ある社会技術システムのデザイン」

樫本哲夫（京都大学大学院工学研究科・教授）

「専門領域を超えた専門家の協働による産学オープンイノベーション」

十河卓司（京都大学学際融合教育研究推進センター・特定准教授）

「触発と知識創造を指向するデータ体験とビジュアルインタラクティブティ」

中小路久美代（京都大学学際融合教育研究推進センター・特定教授）

<終了後、懇親会>

電気通信研究所本館5階ラウンジ



シンポジウムの様子



参加者

7.5 京都大学デザインスクール基金

デザイン学大学院連携プログラムへの補助金は、2018（平成 30）年度をもって終了となるが、社会が求める人材育成のためにも、教育プログラムとして継続していく必要がある。大学としても、本プログラムを含むリーディングを継続していくため、大学院横断教育プログラム推進センター設置に向けて準備を進めている。

同時に、本プログラムでも将来構想委員会により終了後の履修者支援や組織運営について検討を重ね、今回、本基金を設置し、当プログラムの推進への賛同者を広く求め、デザイン学大学院連携プログラムの継続発展のための財政支援をお願いすることとした。

募集期間、寄付金の使途は以下の通りである。

京都大学デザインスクール基金 (http://www.kikin.kyoto-u.ac.jp/contribution/design/)	
募集期間	設置承認日～平成 36 年 3 月 31 日（プログラム履修者の在籍中）
寄付金の使途	<p><リーダー教育支援経費></p> <ul style="list-style-type: none"> ・プログラム履修者の研究・経済的支援 ・インターンシップ、フィールド実習等の実施に関わる経費 ・国際機関からの招へい講師に係る経費 <p><環境整備></p> <ul style="list-style-type: none"> ・拠点等のスペースチャージに係る経費 ・その他運営費

付録1 プログラムの教員

デザイン学ユニット構成員（プログラム担当者含む）（2018年3月時点）

石田 亨	プログラムコーディネータ／情報学研究科 社会情報学専攻 教授
楠見 孝	教育学研究科教育科学専攻 教授
齊藤 智	教育学研究科教育科学専攻 教授
Manalo, Emmanuel	教育学研究科教育科学専攻 教授
野村 理朗	教育学研究科教育科学専攻 准教授
野崎 優樹	教育学研究科教育科学専攻 特定講師
林 康裕	工学研究科建築学専攻 教授
神吉 紀世子	工学研究科建築学専攻 教授
三浦 研	工学研究科建築学専攻 教授
竹脇 出	工学研究科建築学専攻 教授
原田 和典	工学研究科建築学専攻 教授
竹山 聖	工学研究科建築学専攻 教授
平田 晃久	工学研究科建築学専攻 准教授
榎木 哲夫	工学研究科機械理工学専攻 教授
西脇 眞二	工学研究科機械理工学専攻 教授
富田 直秀	工学研究科機械理工学専攻 教授
井手 亜里	工学研究科機械理工学専攻 教授
松野 文俊	工学研究科機械理工学専攻 教授
小森 雅晴	工学研究科機械理工学専攻 教授
松原 厚	工学研究科マイクロエンジニアリング専攻 教授
田畑 修	工学研究科マイクロエンジニアリング専攻 教授
泉田 啓	工学研究科航空宇宙工学専攻 教授
藤本 健治	工学研究科航空宇宙工学専攻 教授
西田 豊明	情報学研究科知能情報学専攻 教授
黒橋 禎夫	情報学研究科知能情報学専攻 教授
熊田 孝恒	情報学研究科知能情報学専攻 教授
河原 大輔	情報学研究科知能情報学専攻 准教授
中澤 篤志	情報学研究科知能情報学専攻 准教授
守屋 和幸	情報学研究科社会情報学専攻 教授
吉川 正俊	情報学研究科社会情報学専攻 教授
大手 信人	情報学研究科社会情報学専攻 教授
松原 繁夫	情報学研究科社会情報学専攻 准教授
馬 強	情報学研究科社会情報学専攻 准教授
Adam Jatowt	情報学研究科社会情報学専攻 特定准教授
山本 岳洋	情報学研究科社会情報学専攻 助教
林 冬恵	情報学研究科社会情報学専攻 助教
太田 快人	情報学研究科数理工学専攻 教授
梅野 健	情報学研究科数理工学専攻 教授

木村 欣司	情報学研究科数理工学専攻／情報教育推進センター 特定准教授
佐藤 彰洋	情報学研究科数理工学専攻 特定准教授
田中 利幸	情報学研究科システム科学専攻 教授
平岡 敏洋	情報学研究科システム科学専攻 助教 (2017年9月末迄)
佐藤 高史	情報学研究科通信情報システム専攻 教授
守倉 正博	情報学研究科通信情報システム専攻 教授
五十嵐 淳	情報学研究科通信情報システム専攻 教授
新熊 亮一	情報学研究科通信情報システム専攻 准教授
松井 啓之	経営管理大学院 教授
原 良憲	経営管理大学院 教授
若林 直樹	経営管理大学院 教授
山内 裕	経営管理大学院 准教授
平本 毅	経営管理研究部附属経営研究センター 特定講師
多々納 裕一	防災研究所社会防災研究部門 教授
牧 紀男	防災研究所社会防災研究部門 教授
美濃 導彦	学術情報メディアセンター 教授
中村 裕一	学術情報メディアセンター 教授
緒方 広明	学術情報メディアセンター 教授
笠原 秀一	学術情報メディアセンター 特定講師
喜多 一	国際高等教育院／学術情報メディアセンター 教授
永田 素彦	人間・環境学研究科共生人間学専攻 教授
黒田 知宏	医学部附属病院医療情報企画部 教授
糸 直人	医学研究科 特定准教授
土佐 尚子	情報環境機構／高等教育研究開発推進センター 教授
阿久津達也	化学研究所 バイオインフォマティクスセンター 教授
塩瀬 隆之	総合博物館 准教授
高橋 雄介	白眉センター 特定准教授
古本 淳一	生存圏研究所生存圏診断統御研究系 助教
中小路久美代	学際融合教育研究推進センターデザイン学ユニット 特定教授
川上 浩司	学際融合教育研究推進センターデザイン学ユニット 特定教授
十河 卓司	学際融合教育研究推進センターデザイン学ユニット 特定准教授
村上 陽平	学際融合教育研究推進センターデザイン学ユニット 特定准教授
北 雄介	学際融合教育研究推進センターデザイン学ユニット 特定講師
山本 恭裕	学際融合教育研究推進センターデザイン学ユニット 特定教授
田中 克己	情報学研究科 非常勤講師／名誉教授
須永 剛司	学際融合教育研究推進センターデザイン学ユニット 特任教授／ 東京藝術大学 美術学部 教授
貫井 孝	学際融合教育研究推進センターデザイン学ユニット 特任教授
寺田 知太	学際融合教育研究推進センターデザイン学ユニット 非常勤講師／ 株式会社野村総合研究所 デジタルビジネス開発部 グループマネージャー

中川 智絵	学際融合教育研究推進センターデザイン学ユニット 特任助教
白石 晃一	学際融合教育研究推進センターデザイン学ユニット 非常勤講師/ ファブラボ北加賀屋 団体代表
辰巳 明久	学際融合教育研究推進センターデザイン学ユニット 非常勤講師/ 京都市立芸術大学美術研究科 教授
木村 千恵子	学際融合教育研究推進センターデザイン学ユニット 特任教授
大島 裕明	学際融合教育研究推進センターデザイン学ユニット 特任准教授/ 兵庫県立大学大学院応用情報科学研究科 准教授
富山 哲男	学際融合教育研究推進センターデザイン学ユニット 特命教授/ クランフィールド大学 教授
濱口 秀司	学際融合教育研究推進センターデザイン学ユニット 特命教授/ monogoto Inc. CEO/Ziba Design Inc. エグゼクティブフェロー
中津 良平	学際融合教育研究推進センターデザイン学ユニット 特命教授/ ヘキサゴンジャパン株式会社 代表取締役

付録2 業績リスト（講演・出版）

1. デザイン学ユニット構成員

(1) 教育活動にかかわる講演（抜粋）

※下線はデザイン学履修者

(i) デザイン学主催イベントでの講演

1. Yusuke Kita. Exploring Meta Design by Analyzing the Summer Design School. Panel Discussion: Skills for Designing Future Society, International Design Symposium in Kyoto 2018 (IDS Kyoto 2018), Clock Tower Centennial Hall I, Kyoto University, 2018.3.14.
2. Yohei Murakami. Field Internship: Interdisciplinary Collaboration in Fields. Panel Discussion: Skills for Designing Future Society, International Design Symposium in Kyoto 2018 (IDS Kyoto 2018), Clock Tower Centennial Hall I, Kyoto University, 2018.3.14.
3. Takushi Sogo. Open Innovation Practice: Developing skills for organizing multidisciplinary collaboration. Panel Discussion: Skills for Designing Future Society, International Design Symposium in Kyoto 2018 (IDS Kyoto 2018), Clock Tower Centennial Hall I, Kyoto University, 2018.3.14.

(ii) その他の講演

1. Osamu Tabata. Formation of Gold Nanoparticle Dimers on Silicon by Sacrificial DNA Origami Technique, The 12th IEEE International Conference on Nano/Micro Engineered and Molecular Systems, UCLA Meyer & Renee Luskin Conference Center, Los Angeles, USA, 2017.4.9.
2. 高橋雄介. 現代日本の超高齢社会で心理学ができるかもしれないいくつかのこと. シンビオ社会研究会, 京都大学百周年時計台記念館会議室 III, 京都市.2017.4.26.
3. 中小路久美代. デザインプロベナンスの構想と展望. 2017年度人工知能学会全国大会近未来チャレンジセッション「コト・データベースによるモノ・コトづくり支援」(招待講演), ウィンクあいち(愛知県産業労働センター), 名古屋市, 2017.5.24.
4. 高橋雄介. 発達パーソナリティ科学の観点から紐解く社会適応や教育の様相. 東海心理学会第66回大会, 東海学園大学名古屋キャンパス, 名古屋市, 2017.5.27.
5. Saito, S. Paradigms for research on human memory. Lecture Series: Master of Science in Psychology, University of Fribourg, Fribourg, Switzerland, 2017.5.8.-12.
6. 高橋雄介. How are we designed? —パーソナリティのデザイン—. 原子力安全システム研究所研究会, 原子力安全システム研究所, 福井県三方郡美浜町, 2017.6.6.
7. 黒田知宏. コピキタスコンピューティングが変えるデータヘルス. 第54回日本循環器病予防学会学術集会, 京都大学 芝蘭会館, 京都市, 2017.6.17.
8. Osamu Tabata. Low Temperature, Wafer-Level Process of Alkali-Metal Vapor Cells for Micro-Fabricated Atomic Clocks, The 19th International Conference on Solid-State Sensors Actuators and Microsystems, Kaohsiung Exhibition Center, Kaohsiung, Taiwan, 2017.6.20.
9. 阿久津達也. On exact identification of the structure of a probabilistic Boolean threshold network from samples, 情報処理学会第113回MPS・第50回BIO合同研究発表会, 沖縄科学技術大学院大学, 沖縄, 2017.6.24.
10. Kumiyo Nakakoji, Instrumenting Interaction for Inspiration and Imagination. ACM Creativity and Cognition Conference 2017 (基調講演), The National Gallery of Singapore, Singapore, 2017.6.28.
11. 北雄介, 坂口智洋, 久富望. ワークショップのプロセスの複合的・構造的記述. 第64回日本デザイン学会春季研究発表大会, 拓殖大学 文京キャンパス, 2017.6.30-7.2.
12. 神吉紀世子. ただならぬ普通 文化的景観の保全と都市・農村計画. 六稜同窓会・大阪府立北野高等学校, 大阪市, 2017.7.

13. 黒田知宏. ビッグデータ科学時代の看護情報の蓄積, 第 23 回日本看護診断学会 学術大会, 国立京都国際会館, 京都市, 2017.7.16.
14. 齊藤智. ワーキングメモリと実行機能とは -概念と測定-. 第 43 回 全国英語教育学会島根研究大会・課題研究フォーラム (1 年目 東北英語教育学会)「ワーキングメモリ機能にみる小・中学生の認知的特徴」, 島根大学松江キャンパス, 松江市, 2017.8.19.
15. Kiyoko KANKI. Drastic Change of Accessibility & Mass Tourism Spread into the Isolated Small Heritage Island of Taketomi - Traditional community's struggle -, 17th International Conference of National Trusts, Wana Ubud Resort Hotel, Bali Safari Park, etc., Bali, Gianyar, Indonesia, 2017.9.13.
16. 北雄介. 街の質感を表現する一都市様相論とオノマトペマップ, 日本認知科学会第 34 回大会, 金沢大学, 金沢, 2017.9.15.
17. 阿久津達也. On the minimum number of genes required for discriminating steady states under a Boolean model, 情報処理学会第 51 回 BIO 研究発表会, 北海道大学情報科学研究科 1 階 A13 教室, 札幌, 2017.9.26.
18. 榎木哲夫. IoT が可能にするものづくり現場における人間中心のデータ活用に向けて, 日本機械学会関西支部特別フォーラム ~IoT の発展が製造業にもたらす影響~, 大阪科学技術センター, 大阪市, 2017.9.28.
19. 中小路久美代. 人×(AI×ビッグデータ): AI×ビッグデータとのインタラクションをデザインすることによる〈使うことの世界〉の造形, 朝日地球会議 2017~分断から共存へ 私たちが進む未来~ パネル討論「AI×ビッグデータの衝撃にどう向き合うか」, 帝国ホテル, 東京, 2017.10.3.
20. Saito, S. Rhythms in working memory and long-term sequential knowledge, Psychology Seminar, Lancaster University, Lancaster, UK, 2017.10.3.
21. Kumiyo Nakakoji, Situating and Interpreting the Laboratory Practice of Designerly Making and the Parliamentary Practice of Decision-Making, Symposium on Design Trade-Offs for Quality of Life: Exploring Grand Challenges for the Digital Age, (Discussant), Schloss Herrenhausen, Hannover, Germany, 2017.10.18.
22. 神吉紀世子. 地域づくりから見る文化的景観. 近畿地方都市美協議会 都市景観研修会, イオンモール京都桂川内・イオンホール, 京都市南区, 2017.10.19.
23. Yusuke KITA. Design Process Depiction for Richer Process Experience, 2017 IASDR Conference: Re: Research, University of Cincinnati, Cincinnati, USA, 2017.10.31.
24. 榎木哲夫. 人と機械の共創による活力ある社会技術システムのデザイン. 第 60 回 自動制御連合講演会, 電気通信大学, 府中市, 2017.11.12.
25. 中小路久美代. 人と技術の系の様相についての創造と想像の知. 科学の客観性と人間性との調和を目指さず科学教育のあり方と実施方法研究会 (招待講演), 東北大学電気通信研究所, 仙台市, 2017.11.15.
26. Masatoshi Yoshikawa. Personal Data as “New Oil” and its Market, Korea-Japan (Japan-Korea) Database Workshop 2017 (KJDB 2017), 沖縄都ホテル, 沖縄, 2017.11.18.
27. 黒田知宏. 情報革命は医療になにをもたすのか, 平成 29 年度日本生体医工学会関西支部講演会, 近畿大学ブロッサムカフェ, 東大阪市, 2017.12.9.
28. 北雄介. デザインプロセスの拡張的記述の試み. 東北大学電気通信研究所・京都大学デザイン学ユニット合同シンポジウム「デザイン学に基づく電気通信システムの革新」東北大学電気通信研究所, 仙台市, 2017.12.15.
29. 小森雅晴. 新機能メカニズムー全方向駆動車輪、変速システムー. 東北大学電気通信研究所・京都大学デザイン学ユニット合同シンポジウム「デザイン学に基づく電気通信システムの革新」東北大学電気通信研究所, 仙台市, 2017.12.15.
30. 楠見孝. 共感覚メタファに基づく言語のデザイン. 東北大学電気通信研究所・京都大

- 学デザイン学ユニット合同シンポジウム「デザイン学に基づく電気通信システムの革新」東北大学電気通信研究所，仙台市，2017.12.15.
31. 山本恭裕. 研究アーカイブの展示・展開・展望. 東北大学電気通信研究所・京都大学デザイン学ユニット合同シンポジウム「デザイン学に基づく電気通信システムの革新」東北大学電気通信研究所，仙台市，2017.12.15.
 32. 松井啓之. 組織デザインに対するゲームを用いたアプローチ. 東北大学電気通信研究所・京都大学デザイン学ユニット合同シンポジウム「デザイン学に基づく電気通信システムの革新」東北大学電気通信研究所，仙台市，2017.12.15.
 33. 榎木哲夫. 人と機械の共創による活力ある社会技術システムのデザイン. 東北大学電気通信研究所・京都大学デザイン学ユニット合同シンポジウム「デザイン学に基づく電気通信システムの革新」東北大学電気通信研究所，仙台市，2017.12.15.
 34. 十河卓司. 専門領域を超えた専門家の協働による産学オープンイノベーション. 東北大学電気通信研究所・京都大学デザイン学ユニット合同シンポジウム「デザイン学に基づく電気通信システムの革新」東北大学電気通信研究所，仙台市，2017.12.15.
 35. 中小路久美代. 触発と知識創造を指向するデータ体験とビジュアルインタラクティブティ. 東北大学電気通信研究所・京都大学デザイン学ユニット合同シンポジウム「デザイン学に基づく電気通信システムの革新」東北大学電気通信研究所，仙台市，2017.12.15.
 36. 中小路久美代. Interpreting, Situating, and Envisioning Technologies in a Societal Context through Design. 新生代 ICT の羅針盤：通研共同プロジェクトからのメッセージ（特別講演）. 東北大学電気通信研究所，仙台市，2018.2.22.
 37. 川上浩司. 不利益とデザイン. 日本インダストリアルデザイナー協会 第4回関西ブロック教育フォーラム, 大阪デザイン振興プラザ(大阪南港 ATC ITM 棟 10F), 大阪, 2018.3.9
 38. 榎木哲夫. 「十字型人材」の育成に向けて：京都大学デザインスクールの取り組み，関西工学教育協会機械分科会第3回研究会，日本機械学会関西支部第93期定時総会・講演会「特色ある博士課程プログラムと現役学生が語る博士課程の魅力」，摂南大学寝屋川キャンパス，寝屋川市, 2018.3.13.

(2) 教育活動にかかわる出版（抜粋）

(i) 図書

1. Tatsuya Akutsu, Algorithms for Analysis, Inference, and Control of Boolean Networks, World Scientific, 2018.4.
2. 中小路久美代. インタラクションデザイン. 人工知能学大事典, 人工知能学会編, Chap.14 創造活動支援, pp.1087-1090, 共立出版株式会社, 2017.7.12.
3. 山内 裕, 平本 毅, 杉万 俊夫 (著). 『組織コミュニティ・デザイン』(京都大学デザインスクールテキストシリーズ2), 共立出版, 2017.10.
4. 川上浩司 (編著). 不利益-手間をかけるシステムのデザイン, 近代科学社, 2017.11.1.
5. 川上浩司 (共著). Cellular Manufacturing Systems, chapter15, Nova Science Pub Inc, 2017.12.1.
6. 榎木哲夫 (編著), 榎木哲夫, 松原厚, 川上浩司, 堀口由貴男 (著). 『アーティファクトデザイン』(京都大学デザインスクールテキストシリーズ3), 共立出版, 2018.4.

(ii) 論文・解説

7. Toru Ishida, Tetsuo Sawaragi, Kumiyo Nakakoji and Takushi Sogo. Interdisciplinary Education for Design Innovation. IEEE Computer, Vol. 50, No. 5, pp. 44-52, 2017.5.

8. Nakayama, M., & Saito, S., Position-element frequency learning is dissociable from Hebb repetition learning. *Journal of Memory and Language*, 94, 235-253, 2017.6.
9. 石田亨. 大学におけるデザイン学教育プログラム. *電子情報通信学会誌*, Vol. 100, No. 7, pp.615-620, 2017.7.
10. Ken-ichiro Kamei, Yoshiki Kato, Yoshikazu Hirai, Shinji Ito, Junko Satoh, Atsuko Oka, Toshiyuki Tsuchiya, Yong Chen, Osamu Tabata, "Integrated Heart/Cancer on a Chip to Reproduce the Side Effects of Anti-Cancer Drugs in vitro", *RSC Advances*, Vol.7, 2017, pp.36777-36786, 2017.7.24.
11. Yanaoka, K., & Saito, S., Developing control over the execution of scripts: The role of maintained hierarchical goal representations. *Journal of Experimental Child Psychology*, 163, 87-106, 2017.11.
12. Maehara, Y., Saito, S., & Towse, J. N., Joint cognition and the role of human agency in random number choices. *Psychological Research* (in press), 2017.11. (First Online)
13. Naoki Yamashita, Zhipeng Ma, Seongsu Park, Kentaro Kawai, Yoshikazu Hirai, Toshiyuki Tsuchiya, Osamu Tabata, "Formation of Gold Nanoparticle Dimers on Silicon by Sacrificial DNA Origami Technique", *Micro & Nano Letters*, Vol. 12, Issue 11, pp. 854-859, 2017.11.
14. Zhipeng Ma, Yunfei Huang, Seongsu Park, Kentaro Kawai, Do-Nyun Kim, Yoshikazu Hirai, Toshiyuki Tsuchiya, Hirofumi Yamada, and Osamu Tabata, "Rhombic-Shaped Nanostructures and Mechanical Properties of 2D DNA Origami Constructed with Different Crossover/Nick Designs", *Small*. doi: 10.1002/sml.201702028, 2017.11.13.
15. 竹内萌, 安田溪, 三浦研. ユニット型特養における可視分析を通じた見守り空間に関する研究. *日本建築学会近畿支部研究報告集第 57 号・計画系*, pp.33-pp.36, 2017.6
16. 桐谷龍之介, 三浦研. 下宿住所履歴の分析に基づく学修環境の変化に関する研究ー桂キャンパス移転を中心としてー. *日本建築学会大会梗概集 (建築計画)*, pp.437- pp.440, 2017.7
17. 安田溪, 三浦研. ニューラルネットワークによる空間の可視領域の判別. *第 40 回情報・システム・利用・技術シンポジウム 2017 梗概集*, pp.75-pp.78, 2017.12
18. Shikishima, C., Hiraiishi, K., Takahashi, Y., Yamagata, S., Yamaguchi, S., & Ando, J. (2018). Genetic and environmental etiology of stability and changes in self-esteem linked to personality: A Japanese twin study. *Personality and Individual Differences*, 121, 140-146. [査読有] doi: 10.1016/j.paid.2017.09.013
19. Noda, T., Takahashi, Y. & Murai, T. (2018). Coping mediates the association between empathy and psychological distress among Japanese workers. *Personality and Individual Differences*, 124, 178-183. [査読有] doi: 10.1016/j.paid.2017.12.009
20. Suzuki, A. Tsukamoto, S., & Takahashi, Y. (in press). Faces tell everything in a just and biologically determined world: Lay theories behind face reading. *Social and Personality Psychology Science*. [査読有] doi: 10.1177/1948550617734616
21. Xiaoqing Cheng, Takeyuki Tamura, Wai-Ki Ching, Tatsuya Akutsu. Discrimination of singleton and periodic attractors in Boolean networks, *Automatica* 84, pp. 205-213, 2017.10.
22. 神吉紀世子. 文化的景観 (Cultural Landscape) の保全に「表現」の必要なとき～熊野でである風景の体験とその真実性をどのように扱うか～. 2017 年度日本建築学会大会 (中国) 農村計画部門パネルディスカッション資料集「空間創造が風景をまもる時ー文化的景観の進化的保全と建築・デザイン」, pp.31-34, 2017.9
23. Kiyoko KANKI, 2011 Kii Peninsula Flood disaster with the viewpoint of Rural Municipal Merger, *PROCEEDINGS OF 2017 JAPAN-KOREA RURAL PLANNING SEMINAR - Resilience and Sustainability of Rural Areas*, pp.17-18, 2017.12.9.
24. TU Dortmund + Kyoto University + Kobe Design University, *HOUSING, CRAFTS AND*

- INDUSTRY IN CULTURAL LANDSCAPES -Resilient Land Use Development for Quasi-Urbanized Areas-, LODE-PORT SUMMER ACADEMY 2017, p.109, 2017.9.
25. Yang Cao, Masatoshi Yoshikawa, Yonghui Xiao, Li Xiong. "Quantifying Differential Privacy under Temporal Correlations". The 33rd IEEE International Conference on Data Engineering (ICDE2017), 2017.4.
 26. Rachana Nget, Yang Cao, Masatoshi Yoshikawa, "How to Balance Privacy and Money through Pricing Mechanism in Personal Data Market", The 2017 ACM SIGIR Workshop On eCommerce, Tokyo, Japan, 2017.8.
 27. T. Motoyoshi, H. Masuta, K. Koyanagi, T. Oshima and H. Kawakami, Formal Concept Analysis of Programming Operation using Tangible Tool, SICE Journal of Control, Measurement, and System Integration (JCMSI), 10(5), pp.442-449, 2017.
 28. 平岡敏洋, 林秉譽, 川上浩司. ドライバの潜在的な安全運転態度を測定する改良版日本語 Implicit Association Test. ヒューマンインタフェース学会論文誌, Vol.19, No.2, pp.199-210, 2017.
 29. Tomohiro Kuroda, Snapshot of Medical Informatics Research in Japan, Abstract Book at EMBEC and NBC, p.51, 2017.6.12.
 30. 黒田知宏. いのちを救う医療情報データベースを作るために. 第37回医療情報学連合大会論文集, 2017.11.21.
 31. 黒田知宏. 情報化医療のデータ流通のあり方と法制. 日本医事法学会研究大会予稿集, 2017.11.25.
 32. 中小路久美代, 山本恭裕, 松原伸人, 川嶋稔夫, 羽室行信, 宇野毅明. 時系列データ間の関連性と関係性理解のためのビジュアルインタラクティビティ. 2017年度人工知能学会全国大会, 2D2-4in2, 名古屋市, pp.1-3, 2017.5.24.
 33. 中小路久美代. デザインプロベナンスの構想と展望. 2017年度人工知能学会全国大会近未来チャレンジセッション「NFC-3 (サバイバル) コト・データベースによるモノ・コトづくり支援 (1)」招待講演, 2F3-NFC-03a-4, 名古屋市, pp.1-3, 2017.5.24.
 34. 佐藤彰洋. レジリエンス改善のための災害リスク評価. 横幹, Vol. 11, No.2, pp.135-144, 2017.10.
 35. Yusuke Kita, Nozomu Kutomi, Tomohiro Sakaguchi, Kumiyo Nakakoji, Design Process Depiction for Richer Process Experience, Proceedings of IASDR 2017 Conference, University of Cincinnati, USA, pp.1-8, 2017.11
 36. Aki-Hiro Sato. Characterization of cities based on world grid square statistics about specific properties, 2017 IEEE International Conference on Big Data (IEEE Big Data 2017), Boston, MA, USA, pp. 4228-4237, 2017.12.11-14.
 37. Toru Ishida, Tetsuo Sawaragi, Kumiyo Nakakoji, Takushi Sogo, Interdisciplinary Education for Design Innovation -Challenges in Kyoto University Design School-, IEEE Computer, Special Issue on Learning Technologies, Vol.50, Issue 5, pp.42-52, IEEE Computer Society, 2017.5.10.
 38. 榎木哲夫. 人と機械の共創による活力ある社会技術システムのデザイン, 計測と制御, Vol.57, No.2, pp.79-84, 2018.2.
 39. Hirose T, Sawaragi T, Horiguchi Y, Nakanishi H. Safety Analysis for Resilient Complex Socio-Technical Systems with an Extended Functional Resonance Analysis Method. International Journal of Astronaut Aeronautical Engineering Volume 2, Issue 2, 2:012 (18 pages), 2017.10.28.
 40. Yuji Takada, Erwin R. Boer, Tetsuo Sawaragi. Driver assist system for human-machine interaction, Cognition, Technology & Work, Volume 19, Issue 4, pp 819-836, 2017.11.
 41. 大江和彦, 松村泰志, 黒田知宏. 鼎談: 医療情報のフロンティアを語るー医療の進化と医療情報の役割. 遙か, vol.11, pp.2-15, 2018.2.1.
 42. Aki-Hiro Sato, Paolo Tasca, Takashi Isogai. Dynamic Interaction Between Asset Prices and Bank

- Behavior: A Systemic Risk Perspective. Computational Economics, Springer, pp.1-33, 2018.2.5.
43. 米村滋人, 板倉陽一郎, 黒田知宏, 高木利久, 田代志門, 吉峯耕平. 医療・医学研究における個人情報保護と利活用の未来—医療・医学研究の現場から. 論究ジュリスト, no.24, pp.142-166, 2018.2.10.

(3) 教育活動にかかわる受賞 (抜粋)

1. 福田啓介, 榎木哲夫, 堀口由貴男, 中西弘明. 「機能共鳴分析手法を用いた鉄道運転操縦のリスク評価」(計測自動制御学会論文集, Vol. 52, No. 2, pp. 68-76, 2016), 2016年度計測自動制御学会関西支部 支部長 奨励賞, 2017.1.27 受賞.
2. 田畑修. 「ナノ・マイクロシステム工学発展への貢献」, 電気学会業績賞 2017.6.2 受賞.
3. 加藤義基, 平井義和, 亀井謙一郎, 土屋智由, 田畑修. 「3次元微細加工を応用した Body on a Chip の開発」電気学会 第73回電気学術振興賞 論文賞, 2017.6.2 受賞.
4. Yukio Horiguchi, Naoki Kojima, Tetsuo Sawaragi, Hiroaki Nakanishi, User Simulation to Inspect Menu Hierarchical Design Using Information Scent Model, Joint 17th World Congress of International Fuzzy Systems Association and 9th International Conference on Soft Computing and Intelligent Systems (IFSA-SCIS 2017) Outstanding Poster Award, 2017.6.30.受賞.
5. 北雄介, 坂口智洋, 久富望. 「ワークショップのプロセスの複合的・構造的記述」. 日本デザイン学会 第64回春季研究発表大会 グッドプレゼンテーション賞, 2017.7.2 受賞.
6. 堀口由貴男, 鈴木貴也, 鈴木貴之, 榎木哲夫, 中西弘明, 瀧本友晴. 「Markov Cluster Algorithm を用いた列車運転士の視覚的スキルの分析」(知能と情報 Vol. 28, No. 3, pp. 598-607, 2017), 2017年度日本知能情報ファジィ学会 論文賞, 2017.9.14 受賞.
7. 川上浩司他. 「ドライバの潜在的な安全運転態度を測定する改良版日本語 Implicit Association Test」, ヒューマンインタフェース学会 論文賞, 2018.3.6 受賞.
8. 川上浩司. 「不便で良かったことはありませんか」, 近畿化学協会 エディタ賞, 2018.2.1 受賞.

2. デザイン学履修者

(1) 口頭発表

※下線はデザイン学履修者

(i) デザイン学主催イベント

1. 藤田弥世, 野村理朗. 差別は人の知覚を歪めるか? -fNIRS を用いた神経科学的検討. 第1回異分野・異業種企業訪問学習会, オムロン株式会社, 2017.9.8.
2. Samar El Helou. The Effect of Joining the Design School on My Research. Students Session of International Design Symposium in Kyoto 2018 (IDS Kyoto 2018), Clock Tower Centennial Hall I, Kyoto University, 2018.3.14.
3. Victoria Abou Khalil. My Research and the Design School -A Young Story-. Students Session of Students Session of International Design Symposium in Kyoto 2018 (IDS Kyoto 2018), Clock Tower Centennial Hall I, Kyoto University, 2018.3.14.
4. Luciano Henrique de Oliveira Santos. Adventures on Design School -Purposeful Fun-. Students Session of Students Session of International Design Symposium in Kyoto 2018 (IDS Kyoto 2018), Clock Tower Centennial Hall I, Kyoto University, 2018.3.14.
5. Tatsuro Terakawa. My Exploration in KDnS, Students Session of Students Session of International Design Symposium in Kyoto 2018 (IDS Kyoto 2018), Clock Tower Centennial Hall I, Kyoto University, 2018.3.14.
6. Kozo Furuta. Design and My Thesis Students Session of IDS Kyoto 2018, Clock Tower Centennial Hall I, Kyoto University, 2018.3.14.
7. Nozomu Kutomi. Mass Production of Leaders, and Next? - Thinking of “Leadership for Groups of Leaders” (邦題: リーダー候補の大量生産, その次は? -「リーダー集団に必要なリーダーシップ」考). Students Session of Students Session of International Design Symposium in Kyoto 2018 (IDS Kyoto 2018), Clock Tower Centennial Hall I, Kyoto University, 2018.3.14.

(ii) 学会、国際会議等

1. Arseny Tolmachev, Sadao Kurohashi Kotonoha. An Example Sentence Based Spaced Repetition System, 言語処理学会第23回年次大会, pp.847-850, つくば, 2017.3.15.
2. Tomohiro Sakaguchi, Sadao Kurohashi. Timeline Generation based on a Two-stage Event-time Anchoring Model, Proceedings of the 18th International Conference on Intelligent Text Processing and Computational Linguistics (CICLing2017), Budapest, Hungary, 2017.4.19.
3. Tatsuro Terakawa, Masaharu Komori, Yuya Morita. Analysis of Engagement of Tooth in Reducer-Integrated Actuator. The 7th International Conference on Manufacturing, Machine Design and Tribology (ICMDT2017), Ramada Plaza Jeju, Jeju, Korea, 2017.4.20
4. Tatsuro Terakawa, Masaharu Komori, Yuya Morita. Research on New Reducer-Integrated Actuator and Its Output Torque. The 7th International Conference on Manufacturing, Machine Design and Tribology (ICMDT2017), Ramada Plaza Jeju, Jeju, Korea, 2017.4.20
5. 藤野正寛. ①コンパッションと神経可塑性, ②注意を集中させる, ③自己と他者に波長を合わせる. GRACEプログラム2017~いのちに寄り添うエンド・オブ・ライフ・ケアのために~, 奈良県長弓寺, 2017.4.21-23.
6. Kotaro Mori, Daisuke Kono, Iwao Yamaji and Atsushi Matsubara, Model based installation of viscoelastic damper support for reducing residual vibration of machine tools, The 6th International Conference on Virtual Machining Process Technology, Ecole Polytechnique de Montreal, Montreal, Canada, 2017.5
7. 古田幸三, 折井将彦, 土橋拓也, 泉井一浩, 山田崇恭, 西脇眞二, 大谷 亮. 熱電素子

- を対象としたマルチマテリアルを用いたトポロジー最適化. 第 22 回計算工学講演会, 計算工学会, 埼玉, F-10-4. 2017.5.31 - 6.2.
8. 佐藤那央. 相互主観的な視座からみたセンスメイキング. 2017 年度組織学会研究発表大会, 滋賀大学, 2017.6.
 9. Philip Blaser, Florentina Pavlicek, Kotaro Mori, Josef Mayr, Sascha Weikert and Konrad Wegener, Adaptive Learning Control for Thermal Error Compensation of 5-Axis Machine Tools, SME North American Manufacturing Research Conference 45, Los Angeles, USA, 2017.6
 10. Yanaoka, K., Saito, S. Development of hierarchical goal representation in the control of script execution. The 15th Annual Convention of the Japanese Society for Cognitive Psychology, Keio University, Japan, 2017.6.3.
 11. 市村賢士郎, 長谷部育恵, 市村春香, 西澤園子, 宮一愛実, 後藤崇志, 楠見 孝. 動機づけの量的側面の動的変化を捉える実験パラダイムの提案. 日本認知心理学会第 15 回大会, 慶應義塾大学, 2017.6.3-4.
 12. Kozo Furuta, Ayami Sato, Kazuhiro Izui, Mitsuhiro Matsumoto, Takayuki Yamada, Shinji Nishiwaki, Level set-based topology optimization for thermoelectric nano- structures considering the temperature discontinuity, based on the Boltzmann transport equation, The 12th World Congress of Structural and Multidisciplinary Optimisation, Braunschweig, (No.294), Germany, 2017.6.5-9.
 13. 市村賢士郎. 動機づけの量的側面の動的変化を捉える実験パラダイムの提案. こころの若手研究者交流会, 京都大学, 2017. 6.18.
 14. 山口直人. 異年齢の遊び主体により発見される潜在的遊び空間のもつ物理的性状－西陣中央小学校校区を対象として－. 2017 年度日本建築学会近畿支部研究発表会 計画系, No.7002, 大阪保健医療大学, 2017.6.25.
 15. 清山陽平. 京都市伏見区中書島における跡形集積の風景に対する来街者評価に関する研究－現代風景への非修景的アプローチ. 2017 年度日本建築学会近畿支部研究発表会 計画系, No.7021, 大阪保健医療大学, 2017.6.25.
 16. 太田裕通, 神吉紀世子. 「ダイアログ手法」を応用した設計実験の思考プロセスに見る「都市認識」の活用可能性 -京都・紫野の空き家長屋を対象として. 2017 年度日本建築学会近畿支部研究発表会 計画系 No.7022, 大阪保健医療大学, 2017.6.25.
 17. 加登遼, 神吉紀世子. 大都市圏周辺地域においてスマートシュリンクングを実現するウォークビリティ指標の開発 - 北大阪都市計画区域と茨木市に着目して -, 2017 年度日本建築学会近畿支部研究発表会 計画系, No.7044, 大阪保健医療大学, 2017.6.25.
 18. Junta Koyama, Yohei Murakami, Donghui Lin. Situated Sensor Composition for Event-Based System. Conference: The 14th IEEE International Conference on Services Computing (SCC 2017), Hilton Hawaiian Village Waikiki Beach Resort, Honolulu, USA, 2017.6.26.
 19. 河村悠太. 『他者の目』が利他行動を促進するとき－社会的規範の調整効果－. 心の先端研究ユニットコロキウム, 京都大学, 2017.6.27.
 20. 久富望, 坂口智洋, 北雄介. ワークショップにおけるオーガナイザーの振る舞いパターン分析, 第 64 回日本デザイン学会春季研究発表大会, 拓殖大学 文京キャンパス, 東京, 2017.6.30-7.2.
 21. Yijun Duan, Adam Jatowt and Katsumi Tanaka: Discovering Typical Histories of Entities, The 28th ACM Conference on Hypertext and Social Media (HT 2017), ACM Press, Prague, Czech Republic, 2017.7.4-7.
 22. 北雄介, 坂口智洋, 久富望. ワークショップのプロセスの複合的・構造的記述. 第 64 回日本デザイン学会春季研究発表大会, 拓殖大学 文京キャンパス, 2017.6.30-7.2.
 23. Yijun Duan, Discovering Typical Histories of Entities, ACM Hypertext and Social Media, Prague, 2017.7.6.

24. 藤野正寛. 洞察瞑想の神経基盤—マインドワンダリングの低下—. 心の先端研究ユニットコロキウム, 京都大学, 2017.7.25.
25. Pituxcoosuvam, Mondheera, Toru Ishida. Enhancing Participation Balance in Intercultural Collaboration. Collaboration Technologies and Social Computing: 9th International Conference, (CollabTech 2017), Saskatoon, SK, Canada, 2017.8.9. (Best Student Paper Award)
26. Victoria Abou Khalil, Toru Ishida, Masayuki Otani, Donghui Lin, A Culturally-Situated Agent to Support Intercultural Collaboration. Collaboration Technologies and Social Computing: 9th International Conference on Collaboration Technologies. (CollabTech 2017), Saskatoon, SK, Canada, 2017.8.9.
27. Haruka KATO, Kiyoko KANKI. Development of Walkability Indicator for visualizing Smart Shrinking - A Case study of Sprawl Areas in North Osaka Metropolitan Region, Proceedings of International Conference 2017 on Spatial Planning and Sustainable Development (SPSD2017), Seoul National University, 2017.8.18-20.
28. 寺澤孝文, 久富望. 学び・指導を変えるビッグデータの可能性—学力低位層の意欲と学力の底上げが可能に—. 日本デジタル教科書学会第6回年次大会, 青山学院大学 青山キャンパス, 2017.8.19-8.20.
29. 久富望, 坂口智洋, 北雄介. ワークショップ型授業におけるプロセスの定量的分析・評価の可能性—オーガナイザーの振る舞い分析を例に—. 第42回教育システム情報学会全国大会, 北九州国際会議場, 2017.8.23-8.25.
30. 久富望, 寺澤孝文, 田中利幸. 自己評価の縦断データによる学習者のパターン分析. 第42回教育システム情報学会全国大会, 北九州国際会議場, 2017.8.23-8.25.
31. 市村賢士郎. 人工知能の活用は人間の学習をどのように変えるか?—今後10年の展望と30年後の予測—. IDE 大学セミナー. 人工知能と教育—人工知能と人間の共進化を促進する教育とは—, 京都大学, 2017.8.25.
32. Yanaoka, K., Tsuda, A., Nishimura, C. An observational study looking at the developmental mechanism for learning action sequences. 18th European Conference on Developmental Psychology, Utrecht, Netherlands, 2017.8.30.
33. 清山陽平. 京都市伏見区中書島地域における跡形集積の風景に対する来街者評価に関する研究 現代風景への非修景的アプローチ. 2017年度日本建築学会大会学術講演会, 広島工業大学, 2017.8.31.
34. 加登遼, 神吉紀世子. 大都市圏周辺地域におけるスマートシュリンキングとしてのウォークビリティ指標の開発 - 北大阪都市計画区域における茨木市に着目して. 日本建築学会大会学術講演梗概集, No.7070, 広島工業大学, 2017.8.31-9.3.
35. 角谷遊野, 山口直人, 神吉紀世子. 西陣中央小学校区において遊び主体により発見される潜在的遊び空間のもつ物理的性状—その1 18-19歳学生の遊びの経験からみた校区全域調査—. 日本建築学会大会学術講演会, 広島工業大学, 2017.8.31-9.3.
36. 山口直人, 角谷遊野, 神吉紀世子. 西陣中央小学校区において遊び主体により発見される潜在的遊び空間のもつ物理的性状—その2 小学2年生の授業の一環として行われたまちあるきの観察調査—. 日本建築学会大会学術講演会, 広島工業大学, 2017.8.31-9.3.
37. Ryunosuke Oka, & Takashi Kusumi. The effect of metaphorical and “action-emotional state” description on emotional evaluation. Metaphor Festival 2017, Amsterdam, Netherlands. 2017.9.1.
38. Megumi Masuda., Pierre Gosselin, Michio Nomura. Japanese children's knowledge of the facial components of basic emotions. The 18th European Conference on Developmental Psychology, Utrecht, Netherlands, 2017.9.1.
39. 河原大輔, 黒橋禎夫, 林部祐太, 森田一, Arseny Tolmachev. 実テキストの情報分析のた

- めの頑健な言語処理基盤, 第 11 回テキストアナリティクス・シンポジウム, pp.25-30, 成蹊大学, 2017.9.7.
40. 柳岡開地, 齊藤智. スクリプト実行中の場面情報保持メカニズムの発達の検討. 赤ちゃん学会若手部会第 5 回研究合宿, 修善寺, 2017.9.9-10.
 41. 古田幸三, 佐藤綾美, 泉井一浩, 山田崇恭, 松本充弘, 西脇眞二. 不連続性を考慮したナノスケール熱伝導を対象とした最適設計手法. 第 27 回 設計工学・システム部門講演会, 日本機械学会, 山口, No. 1107, 2017.9.13-15.
 42. 岡隆之介, 楠見孝. 直喩表現の理解における解釈数と主題-喩辞の類似性の関連の検討. 日本認知科学会第 34 回大会, 金沢大学, 2017.9.13.
 43. 長谷部育恵, 楠見孝. 学習教材の知覚的流暢性が学習者の行動に及ぼす影響. 日本教育工学会第 33 回全国大会, 島根大学, 2017.9.16-18.
 44. 森幸太郎. 工作機械支持部の減衰付加. 日本機械学会 関西支部 第 375 回振動談話会, 京都大学, 2017.9.25.
 45. 伊川美保, 綾部宏明, 松岡真由子, 平岡大樹, 西山慧, 高野了太, 楠見孝. 統計リテラシー日本語版尺度の妥当性と信頼性の検討ーニューメラシーや批判的思考態度との関係ー. 日本教育心理学会第 59 回総会 PG81, 名古屋国際会議場, 2017.10.8.
 46. 長谷部育恵, 楠見孝. 学習教材の選択場面における動機づけ調整の検討. 日本教育心理学会第 59 回総会 PG32, 名古屋国際会議場, 2017.10.9.
 47. Kawamura, Y.. The effect of reputational concerns on altruistic behavior in daily life. Leading Graduate Schools Forum 2017, Nagoya, Japan, 2017.10.20.
 48. 森幸太郎. 環境を考慮した工作機械設計. 日本機械学会 関西支部 第 18 回秋季技術交流フォーラム, 神戸大学, 2017.10.21.
 49. Hiroaki Inoue, Tomoyuki Aotani, Atsushi Igarashi. A DSL for Compensable and Interruptible Executions, The 4th ACM SIGPLAN International Workshop on Reactive and Event-Based Languages and Systems (REBLS'17), pp. 8-14, Hyatt Regency Vancouver, Vancouver, Canada, 2017.10.23.
 50. 坂口智洋, 河原大輔, 黒橋禎夫. 京都大学テキストコーパスに対する網羅的な時間情報アノテーション. 情報処理学会 第 233 回自然言語処理研究会, 宮古島, 2017.10.24.
 51. Yusuke Kita, Nozomu Kutomi, Tomohiro Sakaguchi, Kumiyo Nakakoji, Depicting a Design Process for its Richer Experience, 2017 International Association of Societies of Design Research (IASDR), The University of Cincinnati's college of Design, Architecture, Art and Planning (DAAP), Cincinnati, 2017.10.31-11.3.
 52. Tomohide Shibata, Hongkai Li, Tomohiro Sakaguchi and Sadao Kurohashi. KYOTOU at TAC KBP 2017 Event Track: Neural Network-based Event Sequence Classification Model, Proceedings of the Tenth Text Analysis Conference (TAC 2017), Maryland, USA, 2017.11.13-14.
 53. Mau Adachi, Tomoya Kamimura, and Fumitoshi Matsuno, Dynamical Analysis of Pace and Trot Gait Using a 3D Quadrupedal Model, The Second International Symposium on Swarm Behavior and Bio-Inspired Robotics (SWARM2017), Kyoto, 2017.11.1.
 54. 大倉裕貴, 藤本健治. ポートハミルトン系の可変インピーダンス制御について. 第 60 回自動制御連合講演会, 電気通信大学, 東京, 2017.11.
 55. Kotaro Mori, Daisuke Kono, Atsushi Matsubara, and Hidenori Saraie, Preload distribution on machine tool mounting structure by leveling work during installation, The 9th International Conference on Leading Edge Manufacturing in 21st Century, 61, International Conference Center Hiroshima, Hiroshima, Japan, 2017.11.
 56. Kensuke Morris, Goshiro Yamamoto, Shosuke Ohtera, Michi Sakai, Shusuke Hiragi, Kazuya Okamoto, Osamu Sugiyama, Naoto Kume, Masayuki Nambu, Tomohiro Kuroda, Reducing

- Patient Privacy Concerns via Access Control to EHRs, Joint Conference on Medical Informatics 2017 (18th Annual Meeting of Japan Association for Medical Informatics), Osaka, 2017.11.21.
57. 古田幸三, 佐藤綾美, 泉井一浩, 山田崇恭, 松本充弘, 西脇眞二. フォノンによる微視系熱輸送におけるエネルギー最小化問題を対象とした感度解析. 計算数理工学シンポジウム 2017, 日本計算数理工学会, 香川, No. 28-171215, 2017.12.15.
 58. Yuki Okura, Kenji Fujimoto, Akio Saito, Hidetoshi Ikeda. On Potential Function Design for Path Following Control of Port-Hamiltonian Systems, The 56th IEEE Conference on Decision and Control (CDC 2017), Melbourne Convention Center, Melbourne, Australia, 2017.12.
 59. 藤野正寛, 上田祥行, 井上ウィマラ, 大石悠貴, 北川智利, 野村理朗. 洞察瞑想の短期介入が表情への注意バイアスを変容させる. 日本マインドフルネス学会第4回大会, 早稲田大学, 2017.12.16-17.
 60. Yanaoka, K., & Saito, S. Dynamic representation of task contexts in routine sequential actions by young children. International Workshop on Memory and Cognition in Context, Kyoto University, 2018.2.10.
 61. 藤野正寛. マインドフルネスに基づいたコンパッション訓練—対人援助職のセルフケアのために—. 第4回〈身〉の医療研究交流会シンポジウム「〈身〉を生きる臨床とは脳科学・臨床医学・看護学・心理療法の視座より」, 関西大学, 2018.2.12.
 62. 藤野正寛. マインドフルネスが記憶関連脳領域の関与に与える影響. 早稲田大学応用脳科学研究所シンポジウム『応用脳科学の進展 2017』, 早稲田大学, 2017.2.27.
 63. 岡隆之介, 楠見孝, 大島裕明. 名詞比喩表現における解釈の検索モデル. 第10回データ工学と情報マネジメントに関するフォーラム (DEIM2018), A1-2, 2018.3.4. (学生プレゼンテーション賞, 優秀インタラクティブ賞受賞)
 64. Yijun Duan. Typicality-focused comparative analysis of entities, 第10回データ工学と情報マネジメントに関するフォーラム, 福井県あわら市, 2018.3.4
 65. Victoria Abou Khalil, Brendan Flanagan, Hiroaki Ogata, Learning false friends across contexts, Companion Proceedings of the 8th International Conference on Learning Analytics and Knowledge (LAK18) (CrossMMLA2018), the SMC Conference & Function Centre in Sydney, Australia, 2018.3.5-9.
 66. 大倉裕貴, 藤本健治他. ベイズ推定を用いたポートハミルトン系の操作データに基づいた経路追従制御. 計測自動制御学会第5回制御部門マルチシンポジウム, 東京都市大学, 東京, 2018.3.11.
 67. 岸本裕大, 村脇有吾, 黒橋禎夫. 一般常識を用いた非明示的な談話関係解析. 言語処理学会 第24回年次大会, 岡山, 2018.3.13.
 68. 齋藤純, 坂口智洋, 柴田知秀, 河原大輔, 黒橋禎夫. 述語項構造に基づく言語情報の基本単位のデザインと可視化. 言語処理学会 第24回年次大会, pp.93-96, 岡山, 2018.3.13.
 69. Arseny Tolmachev, Sadao Kurohashi. Juman++ v2: A Practical and Modern Morphological Analyzer. 言語処理学会第24回年次大会, pp.917--920, 岡山, 2018.3.14.
 70. 寺川達郎, 小森雅晴. 減速機構内蔵モータの開発. 近畿歯車懇話会第746回研究会, 京都大学桂キャンパス, 京都, 2018.3.15
 71. Saiki, J., Hung, T., Fujino, M. Effects of short-term mindfulness mediation on self-concept and emotion regulation. The 3rd National Taiwan University-Kyoto University International Symposium. Taipei, Taiwan. 2018.3.17.
 72. 柳岡開地. 幼児期におけるスキプトの発達—自他理解・自己制御の観点から—. 日本発達心理学会第29回大会, 東北大学北川内キャンパス, 2018.3.24.
 73. 柳岡開地. 実行機能とスキプトの柔軟な運用の発達の変容. 日本発達心理学会第29回大会, 東北大学北川内キャンパス, 2018.3.25.
 74. 森幸太郎, 河野大輔, 松原厚, 新家秀規. 工作機械のレベル変化が支持点間の荷重配分

に与える影響の検討. 2018 年度精密工学会春季大会学術講演会, A69 中央大学, 東京, 2018.3.17.

75. Victoria Abou Khalil, Brendan Flanagan, Hiroaki Ogata, Learning what students want to learn. 第24回 情報処理学会 教育学習支援情報システム研究会 (CLE) 研究発表会 (Information Processing Society Educational Learning Support Information System (CLE) Study Group), Kyoto University, 2018.3.21.

(iii) その他活動

1. Fujita, H. Toward understanding of Comprehensive Mechanisms in Racial Categorical Perception Bias. Prof. Emi and Yoshi Kashima's meetings with Ying-yi's lab group, Chinese University of Hong Kong, 2017.11.3.
2. 加登遼. ウォーカビリティに立脚したスプロール市街地のスマートシュリンキングシナリオの構築. 茨木市・都市整備部主催による市内合同勉強会 招待講演, 茨木市役所, 2018.1.15.
3. 伊川 美保. リスクの合理的判断に関わる個人要因: リスクリテラシー, ニューメラシー, 批判的思考. 食のリスクコミュニケーション・フォーラム 2017, 東京大学, 2017.4.21.
4. 伊川美保. リスク認識. 食の安全セミナー, 関西大学, 2017.10.14.
5. 伊川美保. リスクの意思決定スキルを身につけよう 高校1年・2年『大学見学～京都大学～』. 開明高等学校, 2017.10.18.
6. 伊川美保. 数値の読み解き方を身につけよう. 平成29年度「大学の先生による出前講義」, 鹿児島県立鶴丸高等学校, 2017.10.27.
7. 伊川美保. 数値の読み解き方を身につけよう. 平成29年度京都大学高大連携学びコーディネート事業 「大学の講義を体験しよう!!～京都大学の出前授業～」, 浪速高等学校, 2017.12.11.
8. 伊川美保. 数値の読み解き方を身につけよう. H29年度 e-Top 推進室 難関大交流フォーラム 京都大学学びコーディネートによる出前授業, 茨城県立牛久栄進高等学校, 2017.12.15.

(2) ポスター発表

(i) デザイン学主催イベント

1. Kiyoteru Kitano. Development and social implementation of workshop design methodology based on practice theory (邦題: 実践論に基づくワークショップデザイン方法論の開発と社会実装), Students Research Exchange Workshop in Design, Clock Tower Centennial Hall I, Kyoto University, 2018.3.14.
2. Tomoya Hori. The study on habitat uses of fish in tsunami stricken fishing ground, for fishery restorations. (邦題: 津波被災漁場における魚類の生息地利用の解明と漁業復興に関する研究), Students Research Exchange Workshop in Design, Clock Tower Centennial Hall I, Kyoto University, 2018.3.14.
3. Hiroaki Inoue. (邦題: 堅牢な文脈認識ソフトウェア開発のためのプログラミング言語の研究), Students Research Exchange Workshop in Design, Clock Tower Centennial Hall I, Kyoto University, 2018.3.14.
4. Kozo Furuta. Sensitivity analysis and optimization methods for thermoelectric devices and their actuators. (邦題: 熱電素子および熱電アクチュエータを対象とした感度解析および最適設計法), Students Research Exchange Workshop in Design, Clock Tower Centennial Hall I, Kyoto University, 2018.3.14.

5. Ryunosuke Oka. Retrieval model of nominal simile interpretation. (邦題：名詞直喩表現における解釈の検索モデル), Students Research Exchange Workshop in Design, Clock Tower Centennial Hall I, Kyoto University, 2018.3.14.
6. Mondheera Pituxcoosuvarn. Machine Translation Used In a Children Workshop: a field study, Students Research Exchange Workshop in Design, Clock Tower Centennial Hall I, Kyoto University, 2018.3.14.
7. Luciano Henrique de Olivieira Santos. Towards pervasive game design principles to promote quality of life of older adults, Students Research Exchange Workshop in Design, Clock Tower Centennial Hall I, Kyoto University, 2018.3.14.
8. Samar El Helou. Ceci N'est Pas Un EHR System. Students Research Exchange Workshop in Design, Clock Tower Centennial Hall I, Kyoto University, 2018.3.14.
9. Tatsuro Terakawa. (邦題：機構の解析と総合による移動ロボットの創造とモータの設計), Students Research Exchange Workshop in Design, Clock Tower Centennial Hall I, Kyoto University, 2018.3.14.
10. Seongsu Park. Creation of mobile robots and design of motors through analysis and synthesis of mechanism of machinery. (邦題：ナノ流体デバイスを用いた DNA ナノ構造体のサイズ分離), Students Research Exchange Workshop in Design, Clock Tower Centennial Hall I, Kyoto University, 2018.3.14.
11. Haruka KATO, Kiyoko KANKI. Scenario of Smart Shrinking based on Walkability in sprawled urban areas, Students Research Exchange Workshop in Design, No.12, Kyoto University, 2018.3.14.
12. Kaichi Yanaoka, Determining the developmental requirements for Hebb repetition learning in young children (邦題：Hebb 学習が成立する発達の必要条件の解明), Students Research Exchange Workshop in Design, Clock Tower Centennial Hall I, Kyoto University, 2018.3.14.
13. Victoria Abou Khalil, Personalized and preventive false friends learning, Students Research Exchange Workshop in Design, Clock Tower Centennial Hall I, Kyoto University, 2018.3.14.
14. Jian Guo, The effect of articulatory suppression on working memory-guided attentional control, Students Research Exchange Workshop in Design, Clock Tower Centennial Hall I, Kyoto University, 2018.3.14.
15. Lukman Heryawan, User Interface Optimization of Cloud EMR System Based on Similar User Access Behavior, Students Research Exchange Workshop in Design, Clock Tower Centennial Hall I, Kyoto University, 2018.3.14.
16. Kensuke Morris, Design of an Integrated Triage Support System for Chronic Disease Patients in the aftermath of Multi-casualty Incidents, Students Research Exchange Workshop in Design, Clock Tower Centennial Hall I, Kyoto University, 2018.3.14.
17. Yijun Duan, Comparative Analysis of Typical Entities, Students Research Exchange Workshop in Design, Clock Tower Centennial Hall I, Kyoto University, 2018.3.14.
18. Takayuki Hirose, Safety Analysis About the Feasibility of Standard Operation Procedures Under the Influence of Variabilities. (邦題：ゆらぎの影響下で遂行される標準作業手順の脆弱性解析), Students Research Exchange Workshop in Design, Clock Tower Centennial Hall I, Kyoto University, 2018.3.14.
19. Kotaro Mori, Modelling of level adjustments of machine tools. (邦題：工作機械レベル調節作業のモデル化), Students Research Exchange Workshop in Design, Clock Tower Centennial Hall I, Kyoto University, 2018.3.14.
20. Yohei Kiyoyama, Description and visitors' evaluation of urban landscapes with Vestiges -An approach to contemporary landscape for escaping acculturation. (邦題：跡形が集合的につくる市街地風景の記述と来街者評価-文化変容を避ける現代風景保全アプローチに向け

- て), Students Research Exchange Workshop in Design, Clock Tower Centennial Hall I, Kyoto University, 2018.3.14.
21. Kazuki Shimada, Noise-Robust Speech Recognition using Beamforming. (邦題: ビームフォーミングを用いた雑音に頑健な音声認識), Students Research Exchange Workshop in Design, Clock Tower Centennial Hall I, Kyoto University, 2018.3.14.
 22. Shogo Sumitani, State Trajectory Centric Inverse Reinforcement Learning. (邦題: 状態軌道中心逆強化学習), Students Research Exchange Workshop in Design, Clock Tower Centennial Hall I, Kyoto University, 2018.3.14.
 23. Satoru Nishiyama, Resolving Interference by Inhibition: An investigation with category-based retrieval after the Think/No-Think procedure. (邦題: 抑制を用いた記憶検索の促進に関する検討), Students Research Exchange Workshop in Design, Clock Tower Centennial Hall I, Kyoto University, 2018.3.14.
 24. Naoto Yamaguchi, Physical Play Environment in Historical City Area -Through Observation of "machi-tanken" conducted at Nishijin Chuo Elementary School- (邦題: 歴史的市街地の物理的遊び環境—西陣中央小学校にて実施された「まちたんけん」の観察を通じて—), Students Research Exchange Workshop in Design, Clock Tower Centennial Hall I, Kyoto University, 2018.3.14.
 25. Mau Adachi, Mathematical Analysis of Pace and Trot Gait using a Simple Model on the Transverse Plane. (邦題: 横断面上のシンプルモデルを用いた Pace・Trot 歩容の数理解析), Students Research Exchange Workshop in Design, Clock Tower Centennial Hall I, Kyoto University, 2018.3.14.
 26. Longji Oh, Kanako Akagi, Miho Nishiguchi, Shiora Ikeda, et al., How education and evaluation of social-emotional ability should be designed? (邦題: 社会感情的能力の教育・評価に関わるデザイン) (FBL/PBL 最終発表), Students Research Exchange Workshop in Design, Clock Tower Centennial Hall I, Kyoto University, 2018.3.14.
 27. Miho Nishiguchi, Perceptual Simulation in Sentence Production. (邦題: 単文産出における知覚的シミュレーション性の検討), Students Research Exchange Workshop in Design, Clock Tower Centennial Hall I, Kyoto University, 2018.3.14.

(ii) 学会、国際会議等

1. Kotaro Mori, Daisuke Kono, Iwao Yamaji and Atsushi Matsubara, Model based installation of viscoelastic damper support for reducing residual vibration of machine tools, The 6th International Conference on Virtual Machining Process Technology (VMPT 2017). small poster competition for oral presenters, Ecole Polytechnique de Montreal, Montreal, Canada, 2017.5.29-6.2.
2. 山口直人. 京都西陣における「まちなかあそびきょうしつ」を通じた子どもによる小学校空間の再発見. 子ども教育支援建築会議全体会議・シンポジウム, 建築会館ホール, 2017.6.19.
3. Kozo Furuta, Ayami Sato, Kazuhiro Izui, Mitsuhiro Matsumoto, Takayuki Yamada and Shinji Nishiwaki, Shape sensitivity for thermal design problem based on the Boltzmann Transport Equation., The 9th US and Japan Joint Seminar on Nanoscale Transport Phenomena (P-13), Tokyo, Japan, 2017.7.2-5.
4. Samar El Helou. Generation of openEHR Test Datasets for Benchmarking, 16th World Congress on Medical and Health Informatics (MedInfo2017), Hangzhou, China, 2017.8.21-25.
5. Kensuke Morris, Naoto Kume, Goshiro Yamamoto, Shinji Kobayashi, Kazuya Okamoto, Hiroshi Tamura, Tomohiro Kuroda. Authenticating Unknown Doctors for Access to EHRs Based on

- Societal Trust, The 16th World Congress on Medical and Health Informatics (MedInfo2017), Hangzhou, CHINA, poster, 2017.8.23.
6. 久富 望, 坂口 智洋, 北 雄介. ワークショップ型授業におけるプロセスの定量的分析・評価の可能性ーオーガナイザーの振る舞い分析を例にー. 第 42 回教育システム情報学会全国大会, 小倉, 2017.8.23-8.25.
 7. Nishiyama, S., & Saito, S. Resolving Interference by Inhibition: An investigation with category-based retrieval after the Think/No-Think procedure. 20th Conference of the European Society for Cognitive Psychology, 2017.9.3-6.
 8. Arseny Tolmachev, Sadao Kurohashi. Automatic Extraction of High-Quality Example Sentences for Word Learning Using a Determinantal Point Process, Proceedings of the 12th Workshop on Innovative Use of NLP for Building Educational Applications, Copenhagen, Denmark, 2017.9.
 9. 北野清晃. 実践経験によるワークショップの認識差異. 日本教育工学会第 33 回全国大会, 島根大学, 島根, 2017.9.17
 10. 市村賢士郎, 楠見孝. 課題取り組みの持続性に及ぼす諦め行動の影響ーあきらめたらそこで試合終了か?ー. 日本心理学会第 81 回大会 1B-072, 久留米シティプラザ, 2017.9.20.
 11. 平岡大樹, 野村理朗. 乳児の泣き声への反応に対する遺伝・環境・状況要因の影響. 日本心理学会第 81 回大会 1D-088, 久留米シティプラザ, 福岡, 2017.9.20.
 12. 柳岡開地, 津田彩乃, 西村知紗. 幼児はいかにして行為を紡ぐのかー「朝の用意」の縦断的観察を通してー. 日本心理学会第 81 回大会 2C-069, 久留米シティプラザ, 福岡, 2017.9.21.
 13. 藤田弥世, 野村理朗. 偏見は人の知覚を歪めるか?ー人種のカテゴリーに関する認知神経科学的検討ー. 日本心理学会第 81 回大会 3A-013, 久留米シティプラザ, 福岡, 2017.9.22.
 14. 白砂優希, 柳岡開地, 寺川達郎, 大倉裕貴, 高橋雄介, 楠見孝. 産業用ロボットの外見と人代替可能性が印象評価に及ぼす影響. 日本心理学会第 81 回大会 3A-092, 久留米シティプラザ, 福岡, 2017.9.22.
 15. 河村悠太, 石黒翔, 西端和志, 星野春香, 山下環奈, 渡邊智也, 楠見孝. 日本語版道徳アイデンティティ尺度作成と妥当性の検討. 日本心理学会第 81 回大会 2A-007, 久留米シティプラザ, 福岡, 2017.9.21.
 16. 西口美穂, 楠見孝. 単文産出における知覚的シミュレーション性の検討, 日本心理学会第 81 回大会 2A-068, 久留米シティプラザ, 福岡, 2017.9.21.
 17. 柘田恵, 野村理朗. 顔部位が表情認識に及ぼす影響に関する発達の検討. 日本心理学会第 81 回大会 3A-071, 久留米シティプラザ, 2017.9.22.
 18. 河村悠太, 楠見孝. 過剰な利他主義者は評判を獲得できるか (1)ーシナリオ実験に基づく検討ー. 日本社会心理学会第 58 回大会 P425, 広島, 2017.10.29.
 19. 平岡大樹, 宮坂まみ, 野村理朗. 配偶者の存在が乳児の泣き声に対するストレス反応に与える影響. 日本社会心理学会第 58 回大会 P419, 広島大学, 広島, 2017.10.29.
 20. Yusuke Kita, Nozomu Kutomi, Tomohiro Sakaguchi and Kumiyo Nakakoji. Depicting a Design Process for its Richer Experience, 2017 International Association of Societies of Design Research (IASDR), Cincinnati, USA, 2017.10.31-11.3.
 21. 寺川達郎, 小森雅晴, 森田悠也. 波動歯車装置を用いた減速機構内蔵モータの動作に関する研究. 第 18 回計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会, 仙台国際センター, 仙台, 2017.12.21.
 22. Yanaoka, K., Nakayama, M., Jarrold, C., Saito, S. Determining the developmental requirements for Hebb repetition learning in young children: Short-term memory, grouping, and their interaction. January Meeting of Experimental Psychology Society, 2018.1.4-6.

23. Yijun Duan, Typicality-focused comparative analysis of entities, 第 10 回データ工学と情報マネジメントに関するフォーラム, 福井県あわら市, 2018.3.4
24. 井上裕昭. ContextWorkflow: 中断と償いのための DSL. 第 20 回プログラミングおよびプログラミング言語ワークショップ (PPL2018), 皆生グランドホテル天水, 鳥取, 2018.3.5
25. Pituxcoosuvarn M. Ishida T, Yamashita N, Takasaki T, Mori Y. Supporting a Children's Workshop with Machine Translation. In Proceedings of the 23rd International Conference on Intelligent User Interfaces Companion 2018.3.7-11.
26. 柳岡開地, 齊藤智. ルーティン実行中の場面情報保持メカニズムの発達の検討. 日本発達心理学会第 29 回大会, 東北大学北川内キャンパス, 2018.3.23.

(3) 出版

(i) 図書

1. 藤野正寛 (鎌田東二・監修). 瞑想の神経科学研究—一人称の体験に基づいた三人称の科学—. 身心変容の科学—瞑想の科学—, 株式会社サンガ, 2017.10.
2. 藤野正寛 (鎌田東二・監修). 心のプロセスと瞑想のプロセスのモデル化の試み—目的を持たないマインドフルネス瞑想を目指して—. 身心変容の科学—瞑想の科学—, 株式会社サンガ, 2017.10.

(ii) 論文・解説

1. 日道俊之, 小山内秀和, 後藤崇志, 藤田弥世, 河村悠太, Davis, Mark H., 野村理朗. 日本語版対人反応性指標の作成. 心理学研究 88 (1), pp.61-71, doi: 10.4992/jjpsy.88.15218, 2017.4.25.
2. 藤野正寛, 上田祥行. マインドワンダリングの低下に関わる集中瞑想と洞察瞑想の神経基盤. 精神科治療学 32 (5), pp.645-650, 2017.5.
3. Kozo Furuta, Kazuhiro Izui, Kentaro Yaji, Takayuki Yamada and Shinji Nishiwaki. Level Set-based Topology Optimization for the Design of a Peltier Effect Thermoelectric Actuator, Structural and Multidisciplinary Optimization, Vol.55, Issue 5, pp.1671-1683, 2017.5.
4. 市村賢士郎, 上田祥行, 楠見孝. 清音ひらがな 5 文字のアナグラムデータベースの作成. 心理学研究 88 (3), pp.241-250, 2017.8.25.
5. 太田裕通, 神吉紀世子. 「ダイアログ手法」を応用した設計実験の思考プロセスに見る「都市認識」の活用可能性—京都・紫野の空き家長屋を対象として. 日本建築学会近畿支部研究報告集 計画系 (57), 2017.6.25.
6. 清山陽平, 神吉紀世子. 京都市伏見区中書島における跡形集積の風景に対する来街者評価に関する研究—現代風景への非修景的アプローチ. 日本建築学会近畿支部研究報告集 計画系 (57), pp.353-356, 2017.6
7. Kotaro Mori, Daisuke Kono, Iwao Yamaji and Atsushi Matsubara. Modelling of viscoelastic damper support for reduction in low frequency residual vibration in machine tools, Precision Engineering 50, pp.313-319, 2017.6.
8. Philip Blaser, Florentina Pavlicek, Kotaro Mori, Josef Mayr, Sascha Weikert and Konrad Wegener. Adaptive Learning Control for Thermal Error Compensation of 5-Axis Machine Tools, Journal of Manufacturing Systems 44, pp.302-309, 2017.7.
9. 清山陽平, 神吉紀世子. 京都市伏見区中書島地域における跡形集積の風景に対する来街者評価に関する研究—現代風景への非修景的アプローチ. 日本建築学会学術講演梗概集, 巻号: 2017, pp.683-684, 2017.7.

10. Yijun Duan, Adam Jatowt and Katsumi Tanaka: Discovering Typical Histories of Entities, Proceedings of the 28th ACM Conference on Hypertext and Social Media (HT 2017), July 4 - 7, 2017, Prague, Czech Republic, ACM Press, pp.105-114, 2017.7.
11. 清山陽平. 「跡形」の積み重ねが集成的につくる中書島の風景現代風景への非修景的アプローチ. 2017年度日本建築学会大会(中国)農村計画部門パネルディスカッション資料集. 空間創造が風景をまもる時—文化的景観の進化的保全と建築・デザイン, pp. 63-66, 2017.8.
12. Pituxcoosuvann, Mondheera, Toru Ishida. Enhancing Participation Balance in Intercultural Collaboration. Collaboration Technologies and Social Computing: 9th International Conference, (CollabTech 2017), Saskatoon, SK, Canada, August 8–10, 2017, Proceedings. Lecture Note in Computer Science Vol. 10397. Springer, pp 116-129, First Online: 2017.7.12. (Best Student Paper Award)
13. Victoria Abou Khalil, Toru Ishida, Masayuki Otani, Donghui Lin. A Culturally-Situated Agent to Support Intercultural Collaboration. Collaboration Technologies and Social Computing: 9th International Conference on Collaboration Technologies. (CollabTech 2017), Saskatoon, SK, Canada, August 8–10, 2017 Proceedings, Lecture Note in Computer Science Vol. 10397, Springer, pp 130-144, First Online: 2017.7.12.
14. 佐藤那央. 相互主観的な視座からみたセンスメイキング. 組織学会大会論文集, Vol.6 No.1, pp.44-49, 2017.8.18.
15. Kawamura, Y., Kusumi, T. The norm-dependent effect of watching eyes on donation, *Evolution and Human Behavior*, 38(5), pp.659-666. doi: 10.1016/j.evolhumbehav.2017.05.003, 2017.9
16. 金丸厳太, 太田裕通, 神吉紀世子. 「ダイアログ手法」を応用した設計実験の思考に見る「都市認識」の活用可能性 —その1 京都・紫野の長屋における設計実験の実施概要—. 日本建築学会大会学術講演梗概集(都市計画), pp.1183-1184, 2017.9.3
17. 太田裕通, 金丸厳太, 神吉紀世子. 「ダイアログ手法」を応用した設計実験の思考に見る「都市認識」の活用可能性 —その2 設計の思考における「都市認識」と「ダイアログ手法」の導入の影響に関する検討—. 日本建築学会大会学術講演梗概集(都市計画), pp.1185-1186, 2017.9.3.
18. 加登遼, 神吉紀世子. 大都市圏周辺地域におけるウォークビリティに立脚したスマートシュリンキングの可能性. 2017年度日本建築学会大会(中国)都市計画部門研究協議会資料「コンパクトシティの政策・計画からデザインへ」, pp.91-94, 2017.9
19. Kawamura, Y., Kusumi, T. Relationships between two types of reputational concern and altruistic behavior in daily life, *Personality and Individual Differences*, 121, pp.19-24. doi: 10.1016/j.paid.2017.09.003, 2018 1.15. (online: 2017.9.15)
20. 太田裕通, 神吉紀世子. 京都・紫野における都市探索グループワークによる発見的価値付けへの「ダイアログ手法」の応用可能性. 公益社団法人日本都市計画学会 都市計画論文集 Vol.52, No.2, pp.45-54, 2017.10.
21. 加登遼, 神吉紀世子. 居住エリアのウォークビリティに立脚した地域評価に関する指標の開発と検証 - 北大阪都市計画区域の茨木市におけるスマートシュリンキングに向けて -, 都市計画論文集, Vol.52, No.3, pp.1006-1013, 2017.10.
22. Takayuki Hirose, Tetsuo Sawaragi, Yukio Horiguchi and Hiroaki Nakanishi. Safety Analysis for Resilient Complex Socio-Technical Systems with an Extended Functional Resonance Analysis Method. *International Journal of Astronautics and Aeronautical Engineering*, Vol. 2 Issue 2, Published Online: 2017.10.28.
23. 久米学, 和田敏裕, 高木淳一, 堀友彌, 三田村啓理, 荒井修亮, 山下洋. 福島県松川浦におけるクロホシマンジュウダイ幼魚の初記録. *魚類学雑誌* 64(2), pp. 201-205, 2017.11.
24. 寺川達郎, 小森雅晴, 森田悠也. 波動歯車装置の原理を利用した減速機構内蔵モータ.

- 設計工学, Vol. 52, No. 11, pp. 683-694, 2017.11.
25. Yanaoka, K., Saito, S. Developing control over the execution of scripts: The role of maintained hierarchical goal representations. *Journal of Experimental Child Psychology*, 163, pp.87-106. 2017.11
 26. Kensuke Morris, Goshiro Yamamoto, Shosuke Ohtera, Michi Sakai, Shusuke Hiragi, Kazuya Okamoto, Osamu Sugiyama, Naoto Kume, Masayuki Nambu, Tomohiro Kuroda, Reducing Patient Privacy Concerns via Access Control to EHRs, Joint Conference on Medical Informatics 2017 (18th Annual Meeting of Japan Association for Medical Informatics), pp.512-517, 2017.11.
 27. 古田幸三, 佐藤綾美, 泉井一浩, 山田崇恭, 松本充弘, 西脇眞二. フォノンによる微視系熱輸送におけるエネルギー最小化問題を対象とした感度解析. 計算数理工学論文集, Vol. 17, No. 28, pp. 143-148, 2017.12.15.
 28. 岡隆之介, 楠見孝. 比喩表現の産出しやすさに説明対象が及ぼす影響-感情と行動の説明の差異-. 認知科学, 24 (4), pp. 540-555, 2017.12.
 29. 市村賢士郎, 楠見孝. 課題遂行場面における目標設定に及ぼす平均成績情報の影響. 認知科学, 24 (4), pp. 556-566, 2017.12.
 30. 藤本健治, 大倉裕貴. パラメータ変動に対してロバストな LQ 最適制御の枠組みの提案. 計測自動制御学会論文集, 54 巻, 1 号, pp.138-145, 2018.1.
 31. Tatsuro Terakawa, Masaharu Komori, Shouta Tamura, Ryo Kataoka and Yuya Morita. Reducer-integrated motor using simultaneous engagement of gear pairs with small and no differences in teeth number. *Journal of Advanced Mechanical Design, Systems, and Manufacturing*, Vol. 12, No. 1, pp.JAMDSM 0014, 2018.1
 32. Megumi Masuda, Pierre Gosselin, Michio Nomura. Japanese children's knowledge of the facial components of basic emotions. *Journal of Nonverbal Behavior* 42(2), pp. 253-266, 2018.6. (First Online: 2018.2.15).
 33. Kawamura, Y., Kusumi, T. The relationship between rejection avoidance and altruism is moderated by social norms, *Personality and Individual Differences* 129, pp.24-27. doi: 10.1016/j.paid.2018.02.038, 2018.07.15. (online: 2018.3.7)
 34. Naoki Yamashita, Zhipeng Ma, Seongsu Park, Kentaro Kawai, Yoshikazu Hirai, Toshiyuki Tsuchiya, Osamu Tabata, "Formation of Gold Nanoparticle Dimers on Silicon by Sacrificial DNA Origami Technique", *Micro & Nano Letters*, Vol. 12, Issue 11, pp. 854-859, 2017.11.
 35. Zhipeng Ma, Yunfei Huang, Seongsu Park, Kentaro Kawai, Do-Nyun Kim, Yoshikazu Hirai, Toshiyuki Tsuchiya, Hirofumi Yamada, and Osamu Tabata, "Rhombic-Shaped Nanostructures and Mechanical Properties of 2D DNA Origami Constructed with Different Crossover/Nick Designs", *Small*. doi: 10.1002/sml.201702028, 2017.11.13.
 36. Kawamura, Y., Kusumi, T. Selfishness is attributed to men who help young women: Signaling function of male altruism, *Letters on Evolutionary Behavioral Science*, 8(2), pp.45-48. doi: 10.5178/lebs. 2017.64, Published online: 2017.12.7.
 37. 藤野正寛. マインドフルネスとコンパッションの神経科学情動. *Cancer Board Square*, 4 (1), pp. 22-28, 2018.2.
 38. 岡隆之介, 楠見孝. 感情の“字義と比喩”表現および“気持ちと行動”記述の差異が感情評価に与える影響. *日本感性工学会論文誌*, 16 (3), pp.307-313, 2017.
 39. Kensuke Morris, Naoto Kume, Goshiro Yamamoto, Shinji Kobayashi, Kazuya Okamoto, Hiroshi Tamura, Tomohiro Kuroda. Authenticating Unknown Doctors for Access to EHRs Based on Societal Trust, The 16th World Congress on Medical and Health Informatics (MedInfo2017), Hangzhou, CHINA, poster, DOI10.3233/978-1-61499-830-3-1308, p.1308, 2017.8.23.
 40. Takayuki Goto, Yuya Ishibashi, Shogo Kajimura, Ryunosuke Oka, Takashi Kusumi. Belief in free will indirectly contributes to the strategic transition through sympathetic arousal. *Personality*

and Individual Differences 128, pp. 157-161, 2018.7. (Online: 2018.3.2).

(4) 受賞

1. Philip Blaser, Florentina Pavlicek, Kotaro Mori, Josef Mayr, Sascha Weikert and Konrad Wegener. North American Manufacturing Research Conference (NAMRC) [Outstanding Technical Paper Award], 2017.6.7 受賞.
2. 北雄介, 坂口智洋, 久富望. ワークショップのプロセスの複合的・構造的記述. 日本デザイン学会 第64回春季研究発表大会 [グッドプレゼンテーション賞], 2017.7.2 受賞.
3. 森幸太郎. [平成29年度 京都大学大学院工学研究科 馬詰研究奨励賞], 2017.7.3 受賞.
4. 廣瀬貴之. [平成29年度 京都大学大学院工学研究科 馬詰研究奨励賞], 2017.7.3 受賞.
5. Pituxcoosuvam, Mondheera, Toru Ishida. “Enhancing Participation Balance in Intercultural Collaboration.”, Collaboration Technologies and Social Computing: 9th International Conference (CollabTech 2017), [Best Student Paper Award], 2017.7.12 受賞.
6. 加登遼. 大都市圏周辺地域におけるスマートシュリンキングとしてのウォーカービリティ指標の開発 - 北大阪都市計画区域における茨木市に着目して. 2017年度日本建築学会大会(中国)学術講演会 都市計画部門 [若手優秀発表賞], 2017.9.3 受賞.
7. Ryosuke Kawamori, Aki-Hiro Sato. “BDMM Workshop Hackathon”, The first place award the Hackathon Challenges in BDMM 2017 in IEEE Big Data 2017, Boston, 2017.12.12 受賞.
8. 藤野正寛, 上田祥行, 井上ウイマラ, 大石悠貴, 北川智利, 野村 理朗. 日本マインドフルネス学会 [第4回大会最優秀研究賞], 2017.12.16-17 受賞.
9. 寺川達郎, 小森雅晴, 森田悠也. 波動歯車装置を用いた減速機構内蔵モータの動作に関する研究. 第18回計測自動制御学会システムインテグレーション部門 [SI2017 優秀講演賞], 2017.12.23 受賞.
10. 岡隆之介, 楠見孝, 大島裕明. 名詞比喩表現における解釈の検索モデル. 第10回データ工学と情報マネジメントに関するフォーラム (DEIM2018) [優秀インタラクティブ賞], 2018.3.4 受賞.
11. 岡隆之介. 名詞比喩表現における解釈の検索モデル. 第10回データ工学と情報マネジメントに関するフォーラム (DEIM2018) [学生プレゼンテーション賞], 2018.3.4 受賞.
12. Arseny Tolmachev, 黒橋禎夫. Juman++ v2: A Practical and Modern Morphological Analyzer]. 言語処理学会・言語資源協会 [2018 言語資源賞], 2018.3.15 受賞.
13. 柳岡開地. [平成29年度 京都大学大学院教育学研究科長賞(分野:学業)], 2017.受賞.
14. 柳岡開地. [平成29年度 京都大学総長賞(分野:学業)], 2018.3.19 受賞.
15. 岸本隆平. 作品名「おそうじカレンダー」, 一般社団法人日本インダストリアルデザイナー協会 関西ブロック主催 JIDA 関西ブロック学生デザイン賞 2017「不利益なデザイン〜プロセスを楽しむプロダクト〜」[最優秀賞], 2018.3.9 受賞.
16. 岸本隆平, 奥野僚介, 坂井幸貴, 菅村亮介, 小林佑輔. グランプリ 企画名「Waraby」, 東大教養学部, 博報堂ブランド・イノベーションデザイン主催ブランドデザインコンテスト「Branco!」, 2018.3.10 受賞.

付録3 業績リスト（メディア）

（1）新聞

1. 小森雅晴, 寺川達郎. 「変・減速機」. 日刊工業新聞, 18-19 面, 2017.2.20
2. 「笑いテーマに企画京大院生チーム V」. 朝日新聞 東京版, 29 面, 2017.3.11.
3. 「京大院生らのチーム優勝」. 朝日新聞 京都版, 2017.3.16.
4. 「産廃問題解決、ドイツの学生提案へ 京都・伏見」, 京都新聞, 政治・社会面 2017.9.9.
5. 「常葉大浜松が全史地図作り」, 静岡新聞, 2017.11.24
6. 「世の中、便利すぎ?」, 朝日新聞, 耕論, 2017.5.17.
7. 「不便益の宝庫」, 京都新聞, 一日版, p.1, 2017.6.1.
8. 「AIx ビッグデータの衝撃にどう向き合うか: 「なぜ」を問える人間は残る」, 朝日新聞, 23 面, 2017-10-26.
9. 「京大など、衛星ビッグデータと世界位置情報を統合解析する手法を開発」日本経済新聞, 2018.2.15.
10. 「京大など、衛星ビッグデータと世界位置情報の統合解析で新手法 津波リスク予測に活用」, 日刊工業新聞, 2018.2.22

（2）テレビ

1. 川上浩司. 「不便のススメ」, NHK, あさイチ, 2017.6.14./ 8:15-9:54
2. 川上浩司. 「不便」をデザインする」, NHK, 視点論点, 2017.12.7/ 3:50-4:00
3. 川上浩司. 「いま「不便」が見直される理由」, NHK, おはよう日本, 2018.1.24/ 4:30-8:00

（3）ラジオ

1. 川上浩司. 「不便益がこれから楽しい」. KBS ラジオ 竹内弘一のズキュ〜ン, 2017.6.27./15:30-16:00
2. 川上浩司. 「不便益という発想」. ABC ラジオ 道上洋三の健康道場, 2017.11.4/ 7:00-7:30
3. 川上浩司. 「不便益」. Tokyo FM 未来授業, 第 1 回 2018.1.22/ 19:52-20:00
4. 川上浩司. 「不便益」. Tokyo FM 未来授業, 第 2 回 2018.1.23/ 19:52-20:00
5. 川上浩司. 「不便益」. Tokyo FM 未来授業, 第 3 回 2018.1.24/ 19:52-20:00
6. 川上浩司. 「不便益」. Tokyo FM 未来授業, 第 4 回 2018.1.25/ 19:52-20:00

（4）雑誌

1. 石田亨. 進化する協働—京都大学デザインスクール. 大学の約束 2017-2018, リクルートムック, pp.6-7, 2017.9.20.
2. 京都大学デザインスクールが創造性開発のノウハウを活かしてマルホ株式会社の社員研修を実施, KRP Press, vol. 150, p.3, 2017.7.

（5）Web

1. 「脳科学の最前線を行く—飛躍的に進む瞑想研究」特集: 禅の世界へ, 2017.4.18.
<https://www.nippon.com/ja/views/b06105/>
2. 「「瞑想と脳」健康コラム 医療情報室 1 脳の病気」, 京都新聞. 2017.6. 29.
<http://www.kyoto-np.co.jp/kp/medical/search/tokushu1.html>
3. 「The Secret of Happiness is Here... — When Modern Science Meets Meditation —」, UNLIMITED UBS, 2017.9.18.

- <https://www.unlimited.world/vice/the-secret-of-happiness-is-here>
4. 「Subak Perlu Diselamatkan」, Bali Ekibis, 2017.9.22.
<http://www.baliekbis.com/subak-perlu-diselamatkan/>
 5. 「苦あるいは生きづらさ、のその先へ」, フリースタイルな僧侶たち, vol.49, 2018.2.1
<http://www.freemonk.net/blog/archives/5218>
 6. 「(東京) アイデア競い 168 組参加 ブランドデザインコン」, 2018.3.11
<https://www.asahi.com/articles/ASL3B4HW7L3BUTIL00T.html>
 7. 「矢口真里とウーマン村本が東大で講義 テーマは「炎上」と「笑い」」, 2018.3.11
<https://sirabee.com/2018/03/11/20161539216/>
 8. 「産廃問題解決、ドイツの学生提案へ京都・伏見」, 京都新聞, 2017.09.09.
<http://www.kyoto-np.co.jp/politics/article/20170909000052>
「不便の効用 (セレンディピティ考)」. Graphication No.13 Business Crossover, 2017.12.
<https://graphication2.s3.amazonaws.com/html/013/index.html#/spreads/66>
 9. 「就プロ 2050 年を生きる力」前編, 2018.2.23.
<https://syukatsu-pro.com/interview/3556>
 10. 「就プロ 2050 年を生きる力」後編, 2018.3.1
<https://syukatsu-pro.com/interview/3558>
 11. 「「遊び」と「不便」が学びを深める」. あスコラ vol.6, 2017.10.23.
https://berd.benesse.jp/special/asukora/asukora_06.php
 12. 「京大病院の黒田氏が語る、「情報化医療」の世界」. 日経デジタルヘルス, 2017.10.30.
<http://tech.nikkeibp.co.jp/dm/atcl/event/15/091500142/102800052/?ST=health>
 13. 「【特別対談 第 5 回】リアルワールド・データ活用最前線: アカデミア×ヒューマン データサイエンスでヘルスケアを支援する IQVIA :ビッグデータ時代における医療の トランスフォーメーション」, JB Press, 2017.11.22.
<http://jbpress.ismedia.jp/articles/-/51542>

2017年度前期FBL/PBL

データの地産地消 ～観光分野を対象に考える～

実施責任者 美濃導彦 京都大学学術情報メディアセンター
 笠原秀一 京都大学学術情報メディアセンター
 村上陽平 京都大学デザインユニット

参加者 Kensuke Morris 京都大学大学院情報学研究所社会情報学専攻M2
 和田拓也 京都大学大学院情報学研究所システム科学専攻M1
 王隆基 京都大学大学院教育学研究科M1
 橋爪雅人 京都大学大学院情報学研究所社会情報学専攻M1

実施協力者 清水和孝 京都市 総合企画局 情報化推進室
 清水直樹 京都府 政策企画部
 ITコンソーシアム京都、京都市観光協会

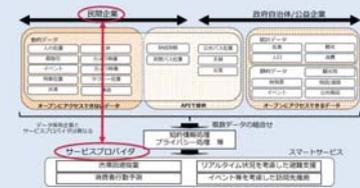
1. 実習概要

本実習では、データの地産地消の考え方に基いて、「京都の観光」をテーマにスマートサービスをデザインすることを目的とする。

参加者は京都観光の問題点についてのディスカッション、関係者へのインタビューを実施後、最終的に2チームに分かれてサービスをデザインした。

各チームは、ITコンソーシアム京都観光部会の講演会でプレゼンテーションし、識者による講評を受けた。

“データの地産地消”＝
 地域のデータを、地域の企業・団体が、地域の住民・訪問者向けサービスとして提供すること。



実習でのポイント

- ・旅行者、データ保有者、地域住民、行政といった複数の視点の獲得。
- ・情報処理技術や既存事例の調査手法の体験。
- ・関係者インタビュー、公開データの分析、技術の調査
- ・参加者のアイデアを統合するデザイン手法の実習。

最終発表:

- ・ITコンソーシアム京都講演会で最終発表。
- ・聴講者50名以上。
- ・京都観光と情報通信技術の専門家が講評。

2. アイデアジェネレーションと合意形成

1. 参加メンバーによるディスカッション

「京都観光の問題点は？」
 「問題解決にどんなサービスが必要か？」



2. 交通機関やレストランの混雑が旅行者の満足度を下けている！

分類	割合(%)	例
人が多い、混雑	15.0	・バスが混雑しすぎていて、利用を諦めた ・人が多くて、ゆっくり楽しめない
公共交通機関	12.3	・バスの乗降がスムーズでないため、時間がかかった ・交通機関がわかりにくい
マナー	9.0	・観光客の中にマナーの悪い方がいた

3. 異なる2つのアプローチ毎にサービスをデザイン

チーム fast eating

混雑情報を提示して無駄な時間を最小化

チーム Pointrip

活用しきれていない観光リソースへの分散

サービス案1 ハヤグイ fast eating

数日しか滞在しない旅行者のスケジュールは非常にタイトであり、ベストなレストランを素早く見つけるニーズがある。

サービスの目的
 レストランの詳細な情報を提供して、旅行者の検索ストレスや選択ストレスを解消する。

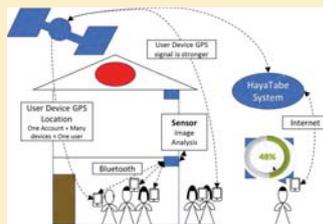


レストラン情報をビジュアルに提供

混雑度 約90%
 席の平均回転時間 15分
 カテゴリー 日本料理
 フロアマップ



スクリーンイメージ



使用するデータの収集イメージ

将来的IoTを活用して自動的に収集

サービス案2 Pointrip

目的: 非混雑地域の観光客の誘導

→ 目的地またはルートを変更してもらう必要性

概要: 地域版SNSサービスによる観光客同士の情報共有

→ 訪れたいと思う新しい観光スポットやルートを表示

特徴: ①全てのアカウントの投稿閲覧を通して観光情報が取得できる

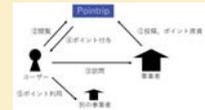
②投稿と訪問のインセンティブのためのポイント制度

③混雑を回避した、ストーリーのあるルート検索

対象: ・観光プランが未確定の人

・新しい観光スポットに関する情報を得たい人

・混雑を回避して観光を楽しみたいと思っている人



	Pointrip	Instagram, Facebook	Mizica,
投稿表示方法	地図上	時系列	地図上
投稿内容	写真、動画	写真、動画	※
投稿の共有範囲	すべて公開	友人	すべて公開
投稿のインセンティブ	ポイント獲得	友人へのシェア	情報共有のみ
チャット機能	あり	あり	※
その他機能	地域情報を利用したルート検索	なし	混雑予想の提示

提案サービスの利用モデル(サービス展開側)

- 導入期**
 - ・ポイントをインセンティブとしたユーザの獲得
 - ・オープンデータから観光資源、イベントの情報を積極的に収集
- 拡大期**
 - ・投稿数の増加に伴い、混雑情報や観光資源に関する最新データの獲得と予測精度の向上
 - ・ユーザ数を増やした事業者側の参加数の増加
- 成熟期**
 - ・フェイク投稿に対する監視機能の拡充
 - ・非混雑地域の特定とユーザへのプッシュを強化

提案サービスの利用モデル(ユーザ側)

- 導入期**
 - ・観光に関する情報を得たい(スポットやルート)
 - ・混雑を回避して観光を楽しみたい
- 拡大期**
 - ・ポイント獲得による観光客の増加
 - ・観光に関する情報を得ることができる
 - ・投稿を行い、注目されることでポイントを獲得できる
- 成熟期**
 - ・サービス拡大後のユーザメリット
 - ・混雑に関する精度の高い情報を入力出来る
 - ・アプリを介した新たな出会いの場を見つけることができる(例1:無料ガイドをしてくれる住民とつながれる(例2:一緒に観光する仲間を見つける)

データコミュニティ デザイン

大学院情報学研究科数理工学専攻 助教 佐藤彰洋
デザイン学ユニット 特定教授 川上浩司

京都市総合企画局情報化推進室情報統計担当 主任 井上卓也
京都市総合企画局情報化推進室情報統計担当 解析係長 井上景介

大学院工学研究科建築学専攻 D1 山口直人
大学院情報学研究科数理工学専攻 M1 河盛亮介
大学院工学研究科機械理工学専攻 M1 加藤裕樹
大学院情報学研究科知能情報学専攻 M1 丸田薫平
大学院情報学研究科数理工学専攻 M1 飯田智基

●データ利活用コミュニティの提案: 増加する観光客の安心安全●

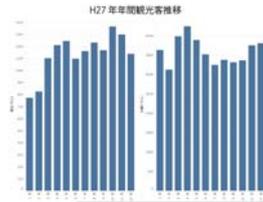
京都には、年間5684万人の観光客が訪れる。H27年はうち、1362万1千人が宿泊観光客であり、4321万9千人が日帰り観光客である。⁽¹⁾

京都市の歴史密度は濃く、府内国宝・重要文化財(建造物)の約8割が市内(府内:297件)。これらは、平安時代から昭和まで網羅している。⁽²⁾

京都の寺社・名所には、地域の避難所として位置づけられているものもある。⁽³⁾



京都市の避難所の分布 (Google mapより作成)



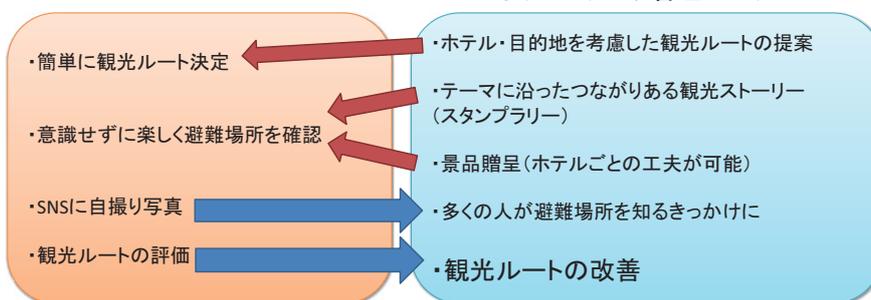
(Tableauにより作成)

1)京都市観光総合調査(平成27年) 2)国指定文化財等データベース 3)「指定避難所等一覧」京都市オープンデータポータルサイト

解決策

楽しみながらの観光地(兼避難場所も)めぐり

- ・避難場所紹介を忍ばせた観光ルートの提案
 - ・文化紹介を織り交ぜたストーリー観光つき宿泊プラン
- ホテル・データ管理システム



※矢印は情報の流れを示す。

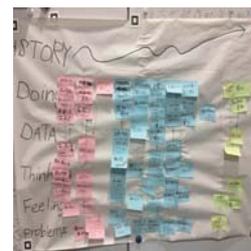
発想の手順

- 1. インプット**
基本的な情報の入手
- 2.ブレインストーミング**
批判しない、自由に発言、質より量、連想していく、ことを念頭にアイデア出し
- 3. データ分析**
統計データ等を用いてアイデアについて実状を調査
- 4. アイデア組み合わせ**
アイデアを組み合わせることでより質の高いアイデアへ
- 5. ペルソナ**
詳細に設定した「ペルソナ」という代表的なプロフィールを共有し、への理解を深める
- 6. カスタマージャーニーマップ**
行動における情報源の考察・行動における思考と感情の推測
→対する問題点と提案項目の作成
- 7. プロトタイプング**
共同作業のためのイメージ共有を目的に作成



←実際に設定したペルソナ

ペルソナをもとに実際に作成した→カスタマージャーニーマップ



ICTを活用する新しい地域交通システムのサービスデザイン

広瀬貴之（工学研究科） 松谷恭太（工学研究科） 吉井健（経営管理大学院） 鈴木慶昭（情報学研究科）
 平井良暉（工学研究科） 梅杰（工学研究科） 谷村嘉久（経営管理大学院） 高橋憲生（情報学研究科）

目的：交通システムの有効活用による地域コミュニティの活性化

- ▶ 今後、地方問題の解決にはコミュニティ間の連携が不可欠
- ▶ まずは人と物の流れ（=交通）からアプローチ

課題：宮城県石巻市周辺を題材とした交通サービスのデザイン

- ✓ 生活に自家用車が不可欠な一方、高齢化で運転できない人多数
- ✓ 地域開発や地域製品のアピールが弱く、活性化を推し進めにくい
- ✓ 東日本大震災により、地方問題が加速・顕在化した地域でもある
 - ▶ 本課題への取り組みは、同様の問題を抱える地域の活性化に向けたモデルケースにもなりうる

課題解決案①：

車を利用したボランティア・ツーリズム 概要

- ◆ **概要：**全国からドライバーのボランティアを募集。1日2-3時間ほど地元の移動困難者を車で送迎する社会貢献を行った後、残る時間で観光を楽しむ。希望により、地元民の語り部の話を聞くことができ、他では聞けない地元の知識も得られる。
- ◆ **現況：**地方では公共交通機関が少なく、多くの移動困難者がいる。カーシェアリング等を行なっているが、ドライバー数自体が少ない。一方で、全国では地方に貢献・理解したい人は多く、「語り部の話を聞きに来る観光客」は少なくとも年25,000人、多くが車利用」（石巻市観光課から聞き取り）
- ◆ **メリット：**交通の利便性向上とともに、地元と全国の人々の交流・コミュニケーション・理解・共感の向上。観光目的であり、中長距離移動でも運用可能。

FBL/PBL 地域交通システム

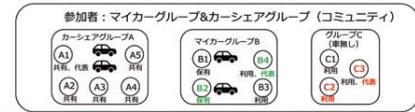
車を利用したボランティア・ツーリズム 具体策



FBL/PBL 地域交通システム

課題解決案②：マイカー及びシェアカーの相乗り

- ◆ **現況：**安価かつ維持可能な移動手段が必要!
- ◆ **仕組み：**電話のみで「依頼」と「相乗り」を調整
- ◆ **参加者：**マイカーグループ&カーシェアグループを統合
 - マイカーグループは、相乗り経験済みのグループ(家族や親族、お隣さん同士など)
 - カーシェアグループは既存のグループ
 - 車無しグループは新設で、コミュニティ内でグループ分け
 - ※各グループごとに代表者を決定
 - ※法令上、各グループで実行できることは異なる
- ◆ **報酬：**仕組みを維持するための報酬を設定
 - 表彰、謝金、役務の免除など



FBL/PBL 地域交通システム

課題解決案③：石巻産魚介食べ歩き市場 概要



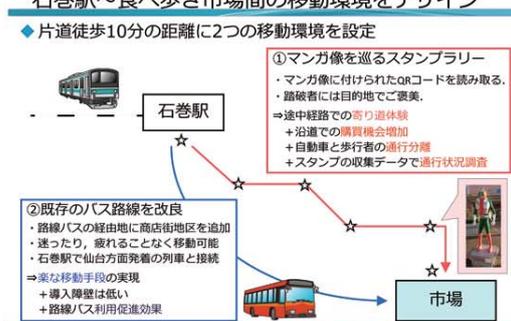
FBL/PBL 地域交通システム

石巻産魚介食べ歩き市場 具体策

- ◆ **「メルカド・イシノマキ」(仮)**
- ◆ **シーフードコンテンツの強化と発信**
 - 石巻・旧商店街地区に食べ歩き市場新設(ブース・屋台型)
 - 調理&出店の場を提供→初期投資なく若い料理人が参入可能
 - 観光客+地元住民も継続的に楽しめる街中シーフードコート
- ◆ **調理学校や水産学校と提携→海産物料理実習環境の提供**
 - 学生が調理知識を活かし創作メニューをマーケットで提供
 - マーケット来場者へシーフード料理教室も開催
 - 水産学校等のサテライト施設誘致→学生やイベント参加者の増加
- ◆ **シーフードグルメイベントの開催→ブランドイメージ発信**
 - 「S-1グランプリ」「ワールドシーフードフェス」など
- ◆ **マーケット周辺の交通インフラの最適化→歩いて楽しめる街へ**
 - 市場周辺の歩行者天国化とエリア辺縁に駐車場の整備
 - 駐車場脇にスーパー等開設(日用品買物機会の提供)

FBL/PBL 地域交通システム

課題解決案④：石巻駅～食べ歩き市場間の移動環境をデザイン



FBL/PBL 地域交通システム

食歩き市場とその導線改善による石巻観光の活性化
 ボランティアツアーリズムと相乗りによる人材活用

2017年度後期FBL/PBL データの地産地消～スマートツーリズムのデータエコシステム～

実施責任者 美濃導彦 京都大学学術情報メディアセンター
 笠原秀一 京都大学学術情報メディアセンター
 村上陽平 京都大学デザインユニット
 実施協力者 堀江卓也 京都市観光協会
 ITコンソーシアム京都、早稲田大学、東邦大学

参加者 Kensuke Morris 京都大学大学院情報学研究所社会情報学専攻D1
 加藤裕樹 京都大学大学院工学研究科機械理工学専攻M1
 Duan Yijun 京都大学大学院情報学研究所社会情報学専攻D1

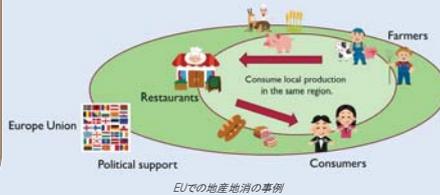
実習概要 Outline

本実習では、**データの地産地消**の考え方に基いて、京都の観光サービスプラン制作を通じて地域における**データのエコシステム**を考えることを目的とした。

参加者が個別に**観光ルート**を設定して実際に周回し、観察結果を元に**グループでルートの見直しと統合**を行った。

統合ルートを実際に周回して問題点を提起し、**問題点を解決するルートとソリューション**の組み合わせを発表した。

“データの地産地消” Regional Data Management
 地域のデータを、地域の企業・団体が、地域の住民・訪問者向けサービスとして提供すること。



実習でのポイント

- 観光プラン制作
- Service plan making.
- フィールド調査に基づく観光中の問題点抽出
- Problem extraction based on field survey.
- 実際に周遊してサービスプランを評価
- Evaluation of service plans.
- 地域データエコシステムをデザイン
- Design regional data ecosystem.

フィールドワークと問題点抽出 Fieldwork and Problem Extraction

1. 一人づつ観光ルートを考え、実際に周遊して問題点を抽出 Individual Route Making and Field Survey



2. 得られた問題点を分析 Problems during Field Survey

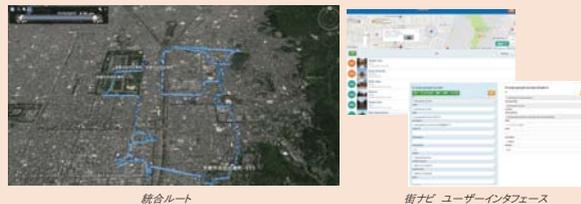
Route 1	Route 2	Route 3
<ul style="list-style-type: none"> • Checkpoint location and range was not convenient • No obvious bicycle parking spots • There were events in some hotspots that were not expected 	<ul style="list-style-type: none"> • Some checkpoints are not so meaningful • Most places are only suitable to visit in the day • Some areas are not convenient for parking bicycles and not accessibility for wheels 	<ul style="list-style-type: none"> • The number of checkpoints are too few, which made participants bored • Machinavi app are not used correctly • More novel information such as local festival should be considered

3. ルート修正とサービスプロトタイプング Individual Revision and Service Prototyping



- アピールポイント Appealing point
- 欠点 Defects
- 潜在的な新規サービス Potential novel services

4. グループでフィールド調査を実施する Group Field Survey



サービス案 Towards Realizing the Next Generation Smart Tourism

サービスフォーカス Service Focus

自転車、車椅子など人力駆動の移動手段を利用している旅行者。



Tourist who use **human powered means of transport** (incl. bicycles, wheelchairs).

主要問題点 Main Problems

意思決定支援 Decision making support

アクセシビリティ Accessibility

移動 Movement

提案サービス Proposed Services

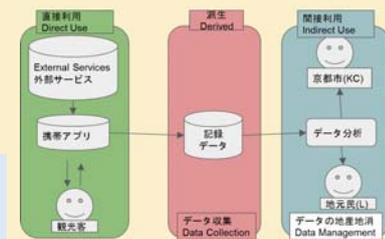
- アナロジーでのスポット紹介 Analogy
Festival / second-hand markets recommendation
- お祭りや手作り市紹介
Entrance recommendation based on assumed situations
- 個人に合わせた移動ナビ
Personalized transportation methods recommendation
- 自転車シェアリング Bike Sharing
- 駐車場ナビ Parking lots info.

サービスを統合ルート上に配置 Services on the united map

出町柳駅→下賀茂神社→銀閣寺→京大、吉田神社→蘆山寺→京都御所→本能寺→河原町駅→八坂神社、円山公園→平安神宮
 Demachiyanaagi Station→Simogamo Shrine→Ginkakuji Temple
 → Kyoto University, Yoshida Shrine→Rozanji Temple→Kyoto Palace
 →Honnoji Temple→Kawaramachi Station→ Yasaka Shrine, Maruyama Park
 → Heian Jingu



データマネジメント Data Management



獲得データの地域での活用

Utilizing Acquired Data from App

Situations 状況	Logged Data 記録データ	Purpose Use 目的	Target Data Users 対象ユーザー	Solutions 改善点
Bike sharing, parking (自転車シェアリング、駐車場情報)	Time of Use, Location data, Parking data, Start time, End time, average travel speed	Ratio of share bicycles and parking Know tourist movement, know demand for service	Kyoto City Officials (KC) Locals (L)	Change entrance for wheelchair access (KC) Get more bikes (KC) Put signs in locations visited by tourists (KC) Parking friendly businesses (L)
Entrance, Festival (人口情報、祭)	Analogy count, location data, nationality	Know nationalities of tourists and their count	Kyoto City Officials (KC)	Recruit volunteer translators (KC,L) Online statistics (KC)
Analogy, Accessibility (アナロジー、アクセシビリティ)	Location, tourist movement, entrance location, stay time at temple	Know congestion information, identify obstacles that tourist face	Kyoto City Officials (KC) Locals (L)	Improve shuttle service (KC) Improve human powered wheelers for wheelchair tourists (L)

2017年度後期FBL/PBL2
社会感情的能力の教育・評価に関わるデザイン

実施責任者	野崎優樹	教育学研究科	教育科学専攻	特定講師	参加者	赤城賀奈子	経営管理教育部	経営管理専攻	M1
	梶見孝	教育学研究科	教育科学専攻	教授		安達真永	工学研究科	機械理工学専攻	M1
	北雄介	デザイン学ユニット	特定講師			池田潮良	教育学研究科	教育科学専攻	M1
						王隆基	教育学研究科	教育科学専攻	M1
					西口美德	教育学研究科	教育科学専攻	M1	
					橋爪雅人	情報学研究科	社会情報学専攻	M1	
					李瑞明	情報学研究科	知能情報学専攻	M2	

問題

社会感情的能力

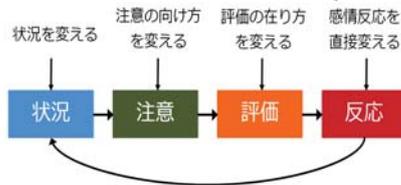
- 他者と関わり合いながら社会で活躍する上で重要な能力の総称。感情知性 (EQ) とも呼ばれる。
- 共感力・自己制御力・ストレス対処力 など

測定の難しさ

- 通常の知能テストでは、1つの問題に1つの正解があるが、感情知性に関しては、ある問題に対して1つの正解を定めることが難しい。
- 現状、主に用いられている手法
 - 自己報告尺度・・・回答バイアスの問題
 - パフォーマンステスト・・・正解を決めることが困難
- **個人のプロフィールをフィードバックする強制選択式のテストであればこれらの問題を解決できる**

感情調整方略

- 人がどのように感情を調整するか — EQの構成要素の1つ



本研究の目的：
 EQの構成要素である感情調整方略に着目し、既存のEQ測定方法が持っていた問題を解決し、より様々な場面に適応できるような尺度の開発を目指す。

方法

尺度の作成

日常生活において不都合な状況に直面するなどの理由でネガティブな感情を感じた際にどのような対応方法を用いるかについて、感情調整方略4 (状況, 注意, 評価, 反応) × 方略対象2 (自己, 他者) の64項目8因子の尺度を作成した。

調査方法・対象者

社会人538名 (うち女性169名) ($M_{age} = 48.9, SD_{age} = 10.17$) に、職種や婚姻歴などとともに、リッカート法と強制選択法の両方法で回答させた。

質問項目例

- 状況 × 他者**
問題解決のためのアドバイスを誰かに求める
- 注意 × 自己**
1人で息抜きになるようなことをする
- 評価 × 自己**
その経験から得るものがあると考えている
- 反応 × 他者**
誰かにその状況に関する不満を漏らす

結果

探索的因子分析・確認的因子分析を行った

→探索的因子分析では7因子となり、状況×他者と評価×他者が一つの因子にまとまってしまった (CFI = .874, PCFI = .837, RMSEA = .059)
 しかし、それ以外の因子は想定通りにまとまった

→また、8因子でのモデルでも適合度に大きな変化はなかったため、8因子でも分析可能だと判断 (CFI = .881, PCFI = .841, RMSEA = .058)

では、どのような人が、どのような方略を使うのか？

例えば、EQの高い人は、(強制選択, リッカート)
 ・ **状況 × 自己をよく用いる** ($r_s = .226, .284$)
 ・ **注意 × 自己は使わない** ($r_s = -.334, -.164$)
 ・ **反応 × 自己は使わない** ($r_s = -.250, -.159$)
 という傾向を持っている

例えば、男女を比較したとき、女性の方が
 ・ **状況 × 他者・注意 × 自己・注意 × 他者**
 ・ **評価 × 他者・反応 × 他者をよく使う**
 →女性の方がより「他者」によって情動調整を行おうとする傾向にある

例えば、年齢が高くなるほど**注意・反応方略はあまり使われなくなる** (例: 強制選択注意・自己 $r = -.258$)

考察

- 因子分析ではほぼ想定していた因子でまとまった
- 作成した尺度はそれぞれの情動調整方略を区別できる
- 自分がどのような情動調整方略を用いがちなのかを得点化・フィードバックを行うことができる

実社会での適用可能性

- 就活・婚活等でのマッチングに利用 (使う方略が似ていると相性がよいかも?)
- 人材評価における評価方法のひとつとして利用
- トレーニングに先立つ自分の情動調整方略の客観化

2017年度後期 FBL/PBL

ハイスピードカメラによる時間を超越した日本美の発見

履修者：工学研究科 広瀬 貴之 教育学研究科 王 隆基 情報学研究科 Liu Shengyu
 実施責任者：高等教育研究開発推進センター 土佐 尚子 工学研究科 富田 直秀 デザイン学ユニット 十河 卓司
 実施協力者：デザイン学ユニット特命教授 中津 良平 総合生存学館 Pang Yunian 京都市産業技術研究所

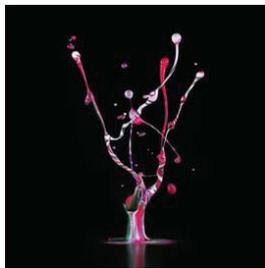
テーマ

- ◆ハイスピードカメラによる
日本美の発見



自然現象の中に隠れている美

- ◆将来的にはロゴや建築へ応用



作品の例

1. スピーカ上に薄いラバーシートを設置
2. その上に複数色のインクを配置
3. スピーカの重低音でインクを跳ね上げる
4. ハイスピードカメラで撮影 (2000 frame/sec)

漆を使った実験

漆について

- ◆縄文時代から使われている日本古来の塗料
- ◆江戸時代まで、漆器は庶民の使うものではなかった
- ◆通常のポスターカラー等と異なり、吸い込まれていくような色：底光りがある
- ◆ただしその扱いは難しく、近寄りたいたいからその魅力がある



様々な素材での実験

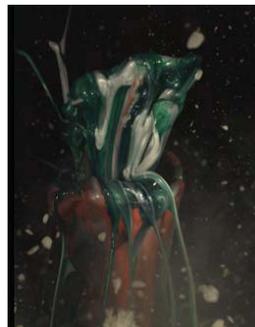
材料

- ◆市販のスライム
- ◆ドライアイス
- シャボン液
- お湯
- ◆消臭剤ビーズ

泡の発生に使用

機材設定

- ✓スピーカ
 - 音波の形状：サイン波
 - 周波数：40[Hz] & 50[Hz]
- ✓ハイスピードカメラ
 - シャッタースピード：2000[fr/sec]



材料

- ◆アルギン酸ナトリウム
- ◆乳酸カルシウム

機材設定

- ✓スピーカ
 - 音波の形状：サイン波
 - 周波数：40[Hz] & 50[Hz]
- ✓ハイスピードカメラ
 - シャッタースピード：2000[fr/sec]

実験設定

- ✓反応時間を5分、10分、15分、20分、25分と変化させ、それぞれ撮影



まとめ

本実験から分かってきた日本美とは

- ◆漆：本来は人体に害をもたらす危険なもの
 - 危険で近寄りたいたいからこそ感じる魅力や畏怖の念がある
 - 凜として向かい合う必要がある代物であり、緊張感を強いるものである
 - でも一度出会おうと忘れられない美しさがある
- ◆日本美とは、森羅万象に対する畏怖の念に基づく自然現象の中に存在するものである
 - 威厳や偉大さ、大きさに重きを置く中国や、自然を支配しようとする西洋の文化とは異なる

本研究の価値

- ◆漆はこれまで塗料としてのみ扱われていた
 - 塗る前の状態で価値を出すというのは今までなかった
 - 塗る前の塗料自体が美しいかどうかという議論すらなかった
- ◆今までにない漆の価値を見いだす実験になったのでは (京都市産業技術研究所 談)

産業への応用

- ◆実験で得られた日本美を含む曲線を物作りの造形に応用可能

DESIGN SCHOOL CALENDAR

2017-2018 京都大学デザイン学大学院連携プログラム 年間スケジュール

2017

キックオフ合宿

4月に新しく予科に入った学生を中心に、デザインスクール履修者と教員が一堂に会し、交流を深める1泊2日のイベントです。参加者の自己紹介が始まり、将来の夢や今考えていることをリラックスした雰囲気の中で語り合います。合宿先周辺の散策やミニワークショップなども行います。

6月17日(土) - 18日(日)



サマーデザインスクール

今年度で7回目となる3日間集中のデザインワークショップ。学生、教員と、多様な専門性を持つ実務家がグループに分かれ、それぞれのアプローチから課題に挑みます。年齢や立場を超えて討議し、発表する自由なスタイルが特徴です。 at KRP

9月13日(水) - 15日(金)



デザインフォーラム

- ・ビジネスデザインシリーズ
- ・政策デザインシリーズ
- ・ファンリレーションデザインシリーズ

デザインイノベーションコンソーシアムと共同で主催するフォーラム。産業界の第一線で活動する企業幹部や政策立案する省庁の方々にも、その実績、戦略、背景などについて講演いただきます。 月1回程度開催



デザインビジョンズ

国内外のデザイン研究者や実践者をスピーカーとして招き、学生自らの学習や研究、デザイン実践などのビジョンを広げる場を提供します。 月1回程度開催



デザインセミナー

デザインイノベーションコンソーシアム主催

大学教員による、デザイン対象領域の理論や手法の講義と、それらを実践するワークショップを組み合わせた3日間集中のセミナー。コンソーシアム会員企業の社会人とともに取り組みます。 年2回程度開催



履修者(予科)選抜

授業開講	4月10日(月)
募集説明会	4月10日(月)
履修者(予科)募集	4月10日(月) - 24日(月)
履修者(予科)合格発表	5月中旬
履修者(予科)向けガイダンス	5月中旬

博士論文 研究基礎力審査 (QE)

4月下旬

デザインスクール in アジア

国立成功大・京大・香港バプテスタ大
合同デザインスクール

台南、京都、香港のアジア三都市で香港バプテスタ大学および国立成功大学の学生と英語でデザインワークショップを行います。海外を訪れて初めて現地の状況と背景を理解するという条件のもと、問題発見・解決にチャレンジします。(M2対象)



5月26日(金) - 6月4日(日)

履修者(本科)選抜

履修者(本科)選抜・面接	8月末~9月初旬
履修者(本科)発表	9月下旬
履修者(本科)入学式・オリエンテーション	9月下旬

履修者(予科)選抜(10月入学)

授業開講	10月2日(月)
募集説明会	10月上旬
履修者(予科)募集	10月下旬
合格発表・ガイダンス	11月中旬

博士論文 研究基礎力審査 (QE)

10月下旬

デザインスクール in 沖縄

京大・珞大合同デザインスクール

沖縄にて、珞球大生とグループワークを行います。京都とは異なる文化を持つ沖縄の地で、地元の人々とともに沖縄独自の問題発見と解決に取り組みます。(M1対象)



11月下旬

プロフェッショナル・ デザインキャンプ

デザインイノベーションコンソーシアム主催

企業ニーズを踏まえたテーマ設定のもと、産学や分野、業界を横断してフラットに対話する、3日間のイノベーションワーク。コンソーシアム会員企業の社会人とともに取り組みます。 年1回程度開催



スプリング デザイン スクール

3月中旬

国際デザイン シンポジウム

3月中旬



2018



Collaborative Graduate Program in Design

www.design.kyoto-u.ac.jp

All are welcome

May 26 → Jun 4

**2017 Joint Workshop on
Design for Sustainability D4S
Creative Design for Sharing Economy**

- ✕ **National Cheng Kung University**
May 26 - 29
- ✕ **Kyoto University**
May 29 - Jun 1
- ✕ **Hong Kong Baptist University**
Jun 1 - 4

Kyoto Hong Kong Tainan

 香港浸會大學
HONG KONG BAPTIST UNIVERSITY

 京都大学
KYOTO UNIVERSITY

 國立成功大學
National Cheng Kung University

✉ comp@comp.hkbu.edu.hk ☎ 3411 2385 🌐 <http://www.comp.hkbu.edu.hk/designworkshop>

あなたの 「デザイン力」 を試そう。

今年は
23テーマ!

「京都大学サマーデザインスクール」は、これまでのべ1500名以上が参加してきた、3日間集中形式の**デザインワークショップ**です。本スクールでの「デザイン」とは、意匠デザインばかりでなく、**社会システムやアーキテクチャのデザイン**も含まれます。大学の枠を越えて産業界や自治体からもテーマを募り、様々な分野の参加者がテーマに分かれ、社会の実問題に真剣に挑みます。京都大学サマーデザインスクール2017で、今年の夏を締めくくしましょう!

日程: 9.13 WED - 15 FRI

場所: 京都リサーチパーク

参加費: 学生 (主催・共催団体の大学*) 1,000円
学生 (上記以外) 3,000円
一般 (主催・共催団体の大学*、会員組織) 3,000円
一般 (上記以外) 10,000円

* 京都大学, 京都市立芸術大学, 京都工芸繊維大学



お申込は HP から (先着順)

@kyotosds

サマーデザインスクール2017

検索

<http://www.design.kyoto-u.ac.jp/sds2017/>



主催 京都大学 デザイン学大学院連携プログラム / 京都大学大学院 情報学研究所 / 京都大学 経営管理大学院 / デザインイノベーションコンソーシアム
共催 京都大学大学院 工学研究科 / 京都大学大学院 教育学研究科 / 京都大学 学術情報メディアセンター / 京都市立芸術大学 美術学部・美術研究科 / 京都工芸繊維大学 工芸科学研究科

Spring Design School 2018

International Design Symposium in Kyoto 2018

*Skills for Designing
Future Society*

MARCH 14, 2018

1:00 PM-
CLOCK TOWER CENTENNIAL HALL
KYOTO UNIVERSITY



Organized by

Collaborative Graduate Program in Design, Kyoto University
Design Innovation Consortium



 ids kyoto 2018

<http://www.design.kyoto-u.ac.jp/idskyoto-2018/>

執筆担当者

石田 亨	プログラムコーディネータ／ 京都大学情報学研究科社会情報学専攻 教授
楠見 孝	京都大学教育学研究科 教授／平成 29 年度ユニット長
榎木 哲夫	京都大学工学研究科機械理工学専攻 教授
佐藤 高史	京都大学情報学研究科通信情報システム専攻 教授
佐藤 彰洋	京都大学情報学研究科数理工学専攻 特定准教授
松井 啓之	京都大学経営管理大学院 教授
山内 裕	京都大学経営管理大学院 准教授
野崎 優樹	京都大学教育学研究科教育科学専攻 特定講師
中小路 久美代	京都大学学際融合教育研究推進センターデザイン学ユニット 特定教授
川上 浩司	京都大学学際融合教育研究推進センターデザイン学ユニット 特定教授
十河 卓司	京都大学学際融合教育研究推進センターデザイン学ユニット 特定准教授
村上 陽平	京都大学学際融合教育研究推進センターデザイン学ユニット 特定准教授
北 雄介	京都大学学際融合教育研究推進センターデザイン学ユニット 特定講師
大島 裕明	京都大学学際融合教育研究推進センターデザイン学ユニット 特任准教授
久保田 庸子	京都大学学際融合教育研究推進センターデザイン学ユニット 特定職員
角川 栄里	京都大学学際融合教育研究推進センターデザイン学ユニット 特定職員

博士課程教育リーディングプログラム
京都大学デザイン学大学院連携プログラム
活動報告書（平成 29 年度）

発行日 平成 30 年 5 月

発行者 京都大学デザイン学大学院連携プログラム
contact@design.kyoto-u.ac.jp
<http://www.design.kyoto-u.ac.jp>



京都大学
KYOTO UNIVERSITY